

第1編:研究発表

2000年から2014年までの
我が国における生きがい研究の動向
ー生きがい研究の「ルネッサンス」ー

長谷川明弘¹⁾
藤原佳典²⁾
星旦二³⁾

所属

- 1) 東洋英和女学院大学人間科学部 准教授
2) 東京都健康長寿医療センター研究所 社会参加と地域保健研究チーム 研究部長
3) 首都大学東京大学院都市環境科学研究科 教授

生きがい研究 21 卷
(長寿社会開発センター)
第21卷, 2015, pp.60-143
2015年3月23日発行



4 2000年から2014年までの我が国における生きがい研究の動向

—生きがい研究の「ルネッサンス」—

長谷川明弘<東洋英和女学院大学人間科学部准教授>

藤原 佳典<東京都健康長寿医療センター研究所
社会参加と地域保健研究チーム研究部長>

星 旦二<首都大学東京大学院都市環境科学研究科教授>

はじめに

さまざまな生き方を選択できるようになった現在、すべての世代において自分の生き方を見つめ直すキーワードとしての「生きがい」の在り方が重要となってくる。団塊の世代が75歳以上となる2025年を目途に、高齢者の尊厳の保持と自立生活の支援の目的のもとで、可能な限り住み慣れた地域で、自分らしい暮らしを人生の最期まで続けることができるよう、国は地域包括ケアシステムの構築を推進している。このような状況の中、高齢者の社会参加をより一層推進することを通じて、元気な高齢者が生活支援の担い手として活躍するなど、高齢者が社会的役割をもつことで、生きがいや介護予防にもつなげる取組が期待されている（厚生労働省，2013）。

それ故に、高齢者の「生きがいづくり」を目的とした各種事業への介入効果の測定が、時代的要請として課せられ、施策の評定を含むプログラム評価研究（安田ら，2008）の実施が求められる時代が到来する可能性がある。今後は、このような自治体の施策に役立てられる資料となり得る生きがいに関する実証研究を蓄積し、さらにはプログラム改善にも有効な情報を提供する尺度を用いた研究が求められる。その上で「生きがい」の増進をねらった具体的な手法の開発も望まれる。尺度を用いた量的な分析からの研究だけではなく、面接法によりデータを集めて質的な検討を加えた研究や個々の事例を集約の上での検討が行われる必要もあろう。

本研究では、生きがい研究が21世紀に入ってから再び活発になっていることを取り上げている点で、生きがい研究の「ルネッサンス」を迎えたことに注目している。

る。さらになにかを達成した、少しでも向上した、人に認めてもらっていると思えるときにももてる意識であるといえる」と定義した。今井ら(2009)は、暫定的な生きがいの定義を、神谷(1980)を参考に「生きがいを感じている精神状態」とした上で、生きがい概念と主観的幸福感の相違を実証的に検討し、①『社会⇄個人の関係性の次元』と、②『過去・現在⇄未来の時間の次元』および、幸福感を単次元ではなくポジティブとネガティブに分けて考える、③『肯定的⇄否定的の心理機能の次元』の3次元とし、両概念を区別することが今後の研究には不可欠であろうと結論づけた。津田[2009]は、生きがいを、「ひとりひとりが日々の生活を送っていく上で、生きる意味や目的を見出す重要な意味をもっており、生きがいの特徴から、個別性があり、主体的な生活を送っていく上で生きる喜びにつながる概念」とした。鶴若[2012]は、高齢者の語りから浮かび上がる生きがいを総括して、①連帯感(家族、友人、社会、地域などとの連帯)、②充実感・満足感・幸福感(現在の生活、今までの人生の満足など生活全般から得られる安定や充実)、③達成感・追求感(自己の向上を促すような学習、奉仕活動、創造的活動、仕事などにおける達成または追求)、④有用感(自分の能力を発揮して役に立っていると思える感情・感覚)、⑤価値(個人の生き方、信念、生活信条に関係する領域)という5つを示し、各要素が独立した実在ではなく、相互にかかわりをもっているとした。熊野(2008)は、生きがいを日常語として、人生を豊かに生きる重要な概念とした。藤崎[2004]は、生きがいの「対自的側面」と「対他的側面」に注目していた。和田[2004]は、生きがいの本質を精神の働きに属する事象であり、内面的化された社会的意味における人生の意味的位置づけを内容とする意識であるとした。安藤[2007]は、生きがいとして「人生の浮き沈み」について尋ねて調査を行っていた。

上記の定義をそれぞれ引用して進めた研究は、数編を認めた。長谷川ら(2001, 2003b)の定義に基づいたのは、長谷川ら(2003a, b, 2007)や長谷川(2010)であった。近藤ら(2003)の定義に基づいたのは、近藤(2003)と近藤ら(2004)であった。今井ら(2009)の定義に基づいたのは、今井ら(2012)であった。伊熊ら[2006]は、長谷川ら(2001)などの定義を参照しながらも、生きがいの定義や概念を統一することは困難であるとして研究を進めていた。

一方で胡ら[2007]は、精神的健康調査票(General Health Questionnaire)の中の質問項目を用いることで定義としていた。

引用文献などに明記していないが1966年に執筆された神谷(1980)からの引用と思われる文献を認めた(芳賀, 2010b)。神谷は「生きがい」を「生きがい」の源泉、

または対象となるものを指している場合と、「生きがい」を感じている精神状態を意味するときの2つの要素に分けて考えている。前者を「生きがい対象」とし後者を「生きがい感」とする（長谷川ら，2001）。

生きがい感を定義に含めていたのは，9編あった〔木寺，2000；金子，2004，2013；井上，2004；藤本ら，2004；蘇ら，2004；遠藤，2007；神部，2008；千葉，2009〕。また広く生きがい感に含める概念として，長谷川ら（2001）が「生きがい意識」と定義した海外の類似した概念である主観的幸福感を生きがいとする定義で進めた研究は，12編，報告されていた〔大國，2001；杉澤ら，2001；坂田ら，2002；福田ら，2002；山本ら，2002；直井，2004；松岡，2005；長谷川ら，2005；一柳，2007；岩井，2007；小澤，2009；芳賀，2012〕。

生きがい対象を定義に含めていたのは，16編の報告があった。それらは生きがいを趣味と同等に捉えていたり〔内濱ら，2000；竹田ら，2005；岡本ら，2006；小川，2006；越谷，2006；三觜ら，2006；染谷，2010；内田，2011〕，生きがいと楽しみを同等に捉えていたり〔川辺ら，2001；淵田ら，2004；山岸，2006；星ら，2009；星，2012，2014〕した可能性がある。熊野（2007）は，仕事を生きがい対象として集中させるよりも，仕事や余暇に生きがい対象を分散させる方が生活満足度を高めることが示唆され，生きがいの定義として引用した見田（1970）とは逆の結果を報告していた。中本ら〔2000〕は，基本的な活動，社会的な活動，創造的な活動を生きがい対象としていた。

古谷野〔2009〕は，心理学者が，主観的な生きがい感に関心をもち，社会学者が，特定の時代や特定の対象を生きがいとするなどの社会的な背景に関心をもつ傾向があることを指摘していた。生きがいを社会や集団の中や，個と個の間にあるものと捉えて「役割」としたり，「役割」をもつこととしたりしたのは，5編あった〔江上，2000；森谷，2005；山上ら，2007；小川，2008；長嶋，2009〕。生きがいを，人々の生を意味づけるものとしたり，生きる意味を探究しようとしたりするものとして定義したのは3編あった〔安達，2004；木下，2005；デーケン，2005〕。生きがいを個人差が大きいものであり定義をしなかったり，個人の感じ方に基づくとしたり，個人が創造していくものとしたものが3編あった〔関，2001；岩上，2007；岡本ら，2008〕。

Successful agingとProductivity, Worth Living, spiritualを生きがいと類似しているとして研究を進めたり〔柴田，2002；野村，2005；熊谷ら，2008〕，Not playing a useful partを「生きがいを感じない」として〔川本ら，2004〕，外国語や海外の尺度との並記で生きがいを定義したりしたものが4編あった。

デイサービスを利用している対象者を取り上げた研究が7編あった〔中本ら, 2000; 内濱ら, 2000; 早坂ら, 2002; 齋藤ら, 2003; 古田ら, 2004; 堀内ら, 2005; 山上ら, 2007〕。施設に入所している対象者を取り上げた研究が8編あった〔川辺ら, 2001; 山下ら, 2001; 小川, 2006; 越谷, 2006; 山岸, 2006; 流石ら, 2007; 津田, 2009; 鶴若, 2012〕。

農村地域や山間部や漁村部を調査対象地域とした研究は17編あり〔佐藤ら, 2000; 水戸, 2000; 松岡, 2000; 関, 2001; 坂田ら, 2002; 長谷川ら, 2003b; 湊田ら, 2004; 川本ら, 2004; 藺牟田ら, 2004; 二宮ら, 2004; 島貫ら, 2005; 松岡, 2005; 岡本ら, 2006; 長谷川ら, 2007; 白川, 2009; 長谷川, 2010; 岡田ら, 2014〕, 東京, 名古屋, 大阪といった大都市圏やその周辺地域だけでなく, 地方の都市部で調査を行った研究が14編あった〔小野寺, 2003; 近藤, 2003; 近藤ら, 2003, 2004; 安達, 2004; 岡本, 2004; 蘇ら, 2004; 長谷川ら, 2005; 岩上, 2007; 遠藤, 2007; 星ら, 2009; 星, 2012, 2014; 大場, 2014〕。居住地の規模あるいは種類が不明な研究が10編あった〔福田, 2002; 中村ら, 2002; 本田ら, 2002, 2003; 藤本ら, 2004; 竹田ら, 2005; 今井ら, 2009, 2012; 石原ら, 2011; 青木, 2014〕。長谷川ら(2003b)は, 農村地域と大都市近郊地域の都市間比較を行った。後藤ら〔2005〕は, 全国20市区町村に居住する高齢者を対象とし, 星(2006)は, 全国16市町村の高齢者を対象としていた。

生きがいの文化比較や国際比較, 少人数の集団を取り上げた論文は7編あった。森〔2000〕は, イタリア, サンマリノ, フランス, 台湾, 韓国にて, 江上〔2000〕は, デンマークと沖縄でそれぞれ調査を行った。神部〔2008〕は, 中国で天津市の老年大学に通う高齢者を対象とした調査を行い, 鄭ら〔2010〕は, 中国の北京市と上海市の在宅者を対象にして, 彼らの以前の調査と比較した。胡ら〔2007〕は, 第二次世界大戦前に中国に在住していた邦人で, 戦後に居住地を追われるなどして生活の拠点を日本に戻した中国帰国者とその配偶者を調査対象者にした。文ら〔2009〕は, 大阪市に居住する在日コリアンと日本人を比較し, 杉澤ら〔2001〕は, 日米比較を行っていた。

介護家族を対象とした研究は2編あった〔山本ら, 2002; 岡本ら, 2008〕。また教育の一環で看護学生を対象としたものは3編あった〔古村ら, 2003; 流石ら, 2004; 内田, 2011〕。さらにホームヘルパー, 社会福祉士, 介護福祉士や介護福祉士養成教員を対象とした文献は3編あった〔石橋ら, 2004; 染谷, 2010; 安, 2014〕。

その他, 特定の対象を取り上げて研究目的に沿って研究が展開されていた。例えば, 笠原ら〔2003〕は, スポーツ・運動活動を継続している高齢者を対象としたり,

伊熊ら [2006] は、スポーツ・運動への関与度との関連を取り上げたりしていた。針金ら [2009] は、シルバー人材センターに所属する会員のデータを用いて性や年齢階級の違いによる就業実態を検討した。直井 [2004] は、家族関係を見るために夫婦や親子のデータを首都圏と周辺地域で調査していた。藤崎 [2004] は、過去に行った面接調査の資料を焼き直して高齢期への移行を取り上げた。井上 [2004] は、第二次大戦後に都会に住んで核家族をつくり、家族成員が逝去した後の伝統儀礼の変容に注目していた。鈴木ら [2004] は、一人暮らしの高齢者を対象とし、岡村 [2012] は、過疎地における一人暮らしの女性高齢者の調査を行っていた。浅川 [2005] は、地方都市と大都市郊外に居住する女性高齢者と近隣関係について取り上げていた。木下 [2005] は、群馬県桐生市で行われている多世代協働プロジェクトを紹介していた。高橋ら [2005] は、スピリチュアリティの意味を探るために大学生を起点に、その親世代、その祖父母世代という3世代の調査を行っていた。熊野(2008)は、大学生、中年層、高齢者層に、熊谷ら [2008] は、若年群、中年群、高年群にそれぞれ調査を行っていた。中俣ら [2005] は、鹿児島県内の市町村の基本検診を通じてうつスクリーニングを実施したり、和泉ら [2007] は、大阪府下44市町村に居住する「軽度要介護認定」高齢者のうつに関連する要因を検討したりした。三髯ら [2006] は、都市部、旧産炭過疎地、都市近郊農村を取り上げてソーシャルサポート・ネットワークと在宅高齢者の検診受診行動の関連性を比較していた。安藤 [2007] は、沖縄県本島中南部3町村の高齢者のコーホートの違いを取り上げてライフコースの分析を行った。佐藤 [2008] は、静岡県志太郡岡部町朝比奈地域の中高年女性を対象として、同一の対象者を2時点以上で比較分析して、三世代、四世代で暮らす多世代同居家族の世代間関係の変化と、家族内における異世代間の交流の諸相を明らかにした。久保ら [2012] は、加齢によってバランス能力や移動能力の低下が生じ、閉じこもりや転倒リスクが高まった状態である運動器不安定症に該当する高齢者を取り上げた研究を行った。山登 (2012) は、「パソコンお絵描き教室」の事例を取り上げた。小野 [2014] は、50歳代と60歳以上の労働者を取り上げていた。

展望論文が5編あった。長谷川ら (2001) は、社会老年学、老年社会科学といった学術誌を中心に2001年3月までに発表された「生きがい」と表題のついた文献と同時に「生きがい」と関連があるといわれている「人生満足度」、「モラル尺度」や「主観的幸福感」に関する国内外の論文を45編取り上げていた。野村 [2005] は、生きがい研究の動向を把握するため、1980年以降2003年までの国内文献の原著論文22編と書籍類11編、海外文献として書籍1編の合計34編を対象としていた。小松ら [2010] は、

そして効果的な活動プログラムの根拠を提供することにもなる参加型アクションリサーチ等の視点がますます重要となることを指摘した。芳賀（2010a, 2012）は、研究者自らがフィールドに出て、住民、行政と協働しながら計画・実践・評価に携わるという方法論の重要性と、研究者の役割をこれまでと変えることについて強調していた。芳賀（2010b）は、身体活動について高齢者の生きがい感を増す仕組みを検証することが今後の課題と指摘し、最後まで介入プログラムに参加できた者のみを分析対象とするのではなく、ベースライン調査に参加した全対象者について評価をすべきであるとしていた。

長谷川ら（2001）は、2000年時点で関連文献を概観して、生きがいの構成要素を検討し、「生きがい」構造モデルを示した(図1)。長谷川ら(2003a)は、長谷川ら(2001)の「生きがい」構造モデルについて自己(主体)が基盤となった上での「生きがい」の対象や伴う感情への影響を男女差や各要素の強さについて共分散構造分析を用いて、生きがいの構造を実証的なデータで示した。長谷川ら(2003b)は、高齢者における「生きがい」の地域差を検討し、農村地域と大都市近郊地域の間で「生きがいあり」の割合に有意差を認めなかったが、「生きがい」の関連要因として、両地域共に健康度自己評価、知的能動性ならびに社会的役割が示されたことを述べた。農村地域では家族構成が強い関連を認め、性別や世代によって関連の強さが異なった。また大都市近郊ニュータウン地域では、男性において入院経験の有無が「生きがい」の有無に強い関連があり、世代によって正負の関連が変動したことを報告した。長谷川ら(2005)は、都市近郊地域に居住する高齢者の「生きがい」の有無について関連要因を検討し、総合的な観点から性別や世代による特徴を示した。長谷川(2010)は、農村地域における女性の前期および後期高齢者では、交友活動と「生きがいあり」の間に正の関連が認められ、性別に関係なくすべての世代において、散歩・運動・趣味などの余暇活動ならびに知的能動性は、「生きがいあり」との間に正の関連が示されたことを報告した。長谷川ら(2007)は、高齢者のための生きがい対象尺度を開発し、その下位尺度は「過去の間人関係」「現在の状態と役割」「未来の間人関係」「現在の子どもと孫」「配偶者(現在と未来)」から構成されていた。さらにクラスタ分析によって回答者をグループ分けして「生きがいの型」を示し、本尺度が生きがいを定量化する尺度として有効であるだけでなく、生きがいの型による差異を表す尺度としても有用な可能性を示した。

本田ら(2002, 2003)は、一人暮らし高齢者を対象として自立度やそれに関連する要因について検討し、要介助予備群が、自立群と比較して抑うつ傾向にある高齢者が

有意に多く、生きがいをもつ高齢者が有意に少なかったものの、要介助群と比較すると有意差を認めなかったとした。さらに、一人暮らしとなった理由で、配偶者・家族との死別を死別以外の群（91.2%）と比較すると、生きがいをもつ高齢者の割合が76.1%となり、有意に低く、配偶者や家族と死別して一人暮らしになった高齢者に対する精神的な支援の重要性を指摘していた。

星（2006）は、全国16市町村に調査を行った結果、地域の後期高齢者では、家事やお祭りを含む地域の文化活動で役割が発揮されやすいために役割が保持され、生きがいの維持に関連している可能性を示唆していると述べた。星ら（2009）は、東京都内のニュータウンの調査を行い、楽しみや生きがいの対象とした園芸と家庭菜園が、どの年齢階級でも有意差なく選択されることを示し、緑に関連する楽しみと生きがいが高まることが結果的に生存維持に寄与する可能性を推測した。星（2012, 2014）は、生きがいと生存率の因果関係を検討し、高齢者が生きがいをもつことが、その後の生存を維持し、要介護になりにくい状況を直接に規定するのではないが、生きがいをもてるような状況であれば、そのような集団が結果的に健康寿命を維持していることを示唆していた。さらに、楽しみと生きがい要因で、身体を動かすことと仕事を選択した人の生存が統計学的に有意に維持されていた。楽しみと生きがい要因であるサークル活動と緑に関する生きがい得点は、生存維持にとって弱い有意な要因であったとしていた。生きがいと生存維持との関連は社会経済的要因や健康三要因を交絡とする偽相関である可能性は再現性が待たれることを指摘していた。

今井ら（2009）は、60歳以上退職者の生きがいの構造を実証的に検討した上で、生きがい概念と主観的幸福感が異なるものであり、今後、両概念を区別して研究を進めていくことを提案した。今井ら（2012）は、9項目で構成される生きがい意識尺度（Iki-gai-9）を開発した。

金子（2004）は、生きがいについて高齢者類型を示し、「市部・健康・男性」「市部・健康・女性」「町部・健康・女性」「町部・非健康・男性」「町部・非健康・女性」の5類型が「友人交際・趣味活動・ボランティア」が因子1を構成し、「社会参加」が因子2に属し、「家族団らん」が因子3に含まれる生きがいパターンをもつ高齢者が一番多かったという。金子（2013）は、高齢者の生きがい研究の帰結と展望をまとめ、生きがいを「生きる喜び」としても、その内容には将来への希望軸とするもの、人生の意味を強調するもの、日々の力が溢れた生活充実感を指すものなどさまざまであったとした。

近藤（2003）は、高齢者の生きがい感測定におけるセルフ・アンカリングスケール

の有効性を示した。近藤ら（2003）は、高齢者向け生きがい感スケール（K-I式）を作成し、生きがい感を定義した。近藤ら（2004）は、都市部高齢者の生きがい感に影響する性別と年代からみた要因を検討し、男性では退職後に職場や仕事上の人間関係から離れ、女性では配偶者の喪失を体験する時期には、外向性の高さによって新しい人間関係を得られることが生きがい感を保つ上で重要であるとした。

熊野（2007）は、定年前後の男性を対象に、生きがい対象の集中・分散による満足度を検討し、生きがい対象を分散させておくと生活満足度が高くなって、精神的ストレス反応が低くなり、生活満足度を高めることが示唆されたと報告した。熊野（2008）は、都市部の大学生、中年期、高齢期の生きがいの要素と対人関係を取り上げて検討し、(1)“人生肯定”と“コミットメント”が、高齢者が他より高くなり、“存在価値”と“人生の意味”は、高い順に、高齢、中年、大学生となり、“目標・夢”は年齢層の差が認められなかったという。(2)大学生は対人関係以外の要因が生きがいに影響し、中年期は他者からの承認が生きがいに最も影響し、高齢期は他者との交流が生きがいに最も影響していたと報告した。

松岡（2000, 2005）は、農村居住の高齢者を対象として、高齢者たちが日々のなかにも楽しみを見出しており、最も多いのが家族に関するものであった。「孫と過ごすとき」「孫の成長」「孫のスポーツ大会」「子や孫が来たとき」「団らん」「家族との食事」「夫との話し」「夫婦で旅行や温泉」を挙げ、次いで田や畑に関するもので、「畑作業」「農業」「田の仕事」「作業が終わったとき」「収穫」「子どもに野菜を送るとき」を挙げ、その次に「地区や集落の行事」と「仲間」「友人」「近所」がくるとしていた。

岡本（2004）は、都市部の在宅高齢女性の活動における活動意向の充足状況に関連する要因を検討し、散歩や運動が社会活動や学習活動よりも充足されやすく、活動に関する情報を知らない社会活動や学習活動が充足されにくいとしていた。岡本ら（2006）は、農村部高齢者の社会活動における活動参加意向の充足状況に関連する要因を検討し、IADL、抑うつ傾向が関連しているとした。IADLが低かったり、抑うつ傾向が高かったりと、社会活動における活動参加意向が充足されにくくなっているとした。

流石ら（2004）は、『健康高齢者実習』という看護師養成科目の実習終了後レポートの分析をし、学習内容の検討を行った。流石ら（2007）は、終末期を介護老人福祉施設で暮らす後期高齢者のQOLとその関連要因を検討し、生きがい・喜び・張りをどれくらい感じるかを尋ねた結果、「非常に感じる」の割合が高いのは、「家族・友人等の面会」で82.0%と最も高くなり、「若い頃得意だったことができたとき」65.1%、

「まわりの人の役に立ったとき」53.2%の順であったという。

柴田 (2002) は、サクセスフル・エイジング (Successful aging) の構成要素を、長寿、生活の質 (QOL)、Productivity (社会貢献) で成り立っていると考えていた。柴田 (2004) は、長寿のためにも心の健康のためにも、魚に近い量の肉類を摂取することは必須であるとしていた。

山登 (2012) は、パソコンを活用した高齢者の生きがい健康づくり事業の事例について、「パソコンお絵描き教室」を展開する「do beくらぶ」の活動を報告した。山登 (2013) は、『生きがい研究』にみる高齢者の生きがい健康づくり事業の動向を取り上げ、高齢者の生きがい健康づくり事業に関する記事23本を紹介した。

4 考察

21世紀を目前とした1998年にSeligmanは「人の強み (Human Strengths)」に注目した新しい科学の構築に向けた取り組みについて、アメリカ心理学会会長に就任した演説で表明している (Seligman, 1998)。その中で、Seligmanは、心理学が過酷な状況下でどのように生き延びるのかについて理解してきたが、良好な (benign) 状況下で普通の人々がどのように元気であるのかをあまり取り上げてこなかったことを指摘している。これが後に「ポジティブ心理学 (Positive Psychology)」と呼ばれ、心理学に限らず、医学においても病理といったネガティブな側面に注目して学問が発展してきたが、新しい科学としてこれまであまり取り上げてこなかった肯定的な面や長所、つまりポジティブな側面を今後は取り上げ、人々の生活をより良くしていく研究を始める運動となった (島井, 2006)。生きがい研究は、日常語としての生きがい (長谷川ら, 2001) を取り上げ、まさにポジティブ心理学の理念に沿って展開している。本研究で指摘したように2000年以降10編前後の研究が報告され続けている。Seligmanがポジティブ心理学を提唱するときに、新しい科学の構築を目指していくと表明しているが、過去の研究の蓄積の上で展開されているところは、まさに生きがい研究と重なっている。

生きがいの定義の仕方については、神谷 (1980) の研究に端を発する形で、「生きがい対象」と「生きがい感」という要素に分けた定義 (長谷川ら, 2001) に基づいた研究が多く行われている。「生きがい対象」に注目した場合は、その内容によって特定の対象や時間軸や社会情勢を考慮に入れ、個人や集団での生きがい対象の変容などを研究対象として研究を展開していくことが可能となっていくであろう。長谷川ら

(2003b)が農村地域で家族構成が強い関連を示したと報告したり、長谷川ら(2007)が高齢者のための生きがい対象尺度を作成して、時間軸と家族世代による違いが「生きがい」の1つの特徴となりうると指摘したり、松岡(2000, 2005)、金子(2004)の研究からも同様に生きがい対象に家族が含まれていることから、生きがい対象として家族がどの程度該当するかについて検証することが求められる。また、長谷川ら(2007)が指摘するように家族が生きがいの対象となることが日本独自のものなのかどうか、国際比較して検討することも必要となろう。「生きがい感」については、今井ら(2009)が生きがい概念と主観的幸福感とが異なると指摘しており、さらなる追試が求められよう。

生きがいの測定の仕方について論じると、長谷川ら(2001)は、2000年までの「生きがい」と主観的幸福感などを含む「生きがい意識」に関する総説の中で、生きがいの測定法の変遷について3つの段階があるとしていた。第1段階は、各々の研究者が生きがいの概念を定義して調査やその有無を尋ねて測定していた時期であり、第2段階は1980年代に海外で開発された主観的幸福感の尺度を翻訳した上で生きがい尺度として国内の調査に使用した時期であり、第3段階として生きがいそのものを測定する尺度が開発されつつあり、これらを用いる調査が望まれる時期であるとしていた。2014年時点では、近藤ら(2003)の「高齢者向け生きがい感スケール」、長谷川ら(2007)の「高齢者のための生きがい対象尺度」、今井ら(2012)の「生きがい意識尺度」という3つの生きがいを測定する尺度が開発されて、長谷川ら(2001)のいう第3段階に到達したと考えられる。今後は第4段階として、生きがい研究の「ルネッサンス」の到来があったともいえそうで、生きがい測定尺度の使用と追試によって生きがいの特徴を検証したり、研究参加者を研究目的に沿って限定して、在宅や施設入所者、居住地域、特定の活動に従事している人などを取り上げたりして、本論の冒頭で述べたように施策の評定を含むプログラム評価研究(安田ら, 2008)が求められる時期になってきていると考えられる。第5段階は、日本独自と言われる「生きがい」の特徴を、日本発の研究成果として海外に向けて発信していく時機となるのではなかろうか。

研究デザインについて論じると、関(2001)、坂田ら(2002)、星(2006, 2012, 2014)が縦断調査研究によって、生きがいと生命予後の因果関係を取り上げた報告をしており、今後、生命予後を検討する研究が増大することを期待する。また横断調査研究が圧倒的に多いものの、生きがいの構造を取り上げた研究は、長谷川ら(2003a)、今井ら(2012)のみであり、生命予後と同じく研究の蓄積が求められる。

まとめ

本論では、2000年から2014年の15年間の日本における生きがい研究の動向を総括した。今後の生きがい研究の課題は、日常語である「生きがい」に注目して、多くの人がどのような生活の中でより良い人生を歩むのかを検証することであろう。21世紀になって開発された生きがいを測定する尺度を用いて、日本独自と言われる生きがいの特徴を検証していき、いずれ海外に発信していけるような研究の蓄積が求められる。生きがい研究の「ルネッサンス」とも呼べる時機が到来したとも言えるのかもしれない。

【引用文献】

本論文の趣旨から資料に掲載した論文を示す場合に、論文を本文中に [] で示した。それ以外の引用文献の表記は一般的な方法に依拠した。

- ・デーケン, アルフォンス「高齢者の生きがいとユーモア」『老年歯科医学』20(2): 107~112頁, 2005
- ・デーケン, アルフォンス「よく生き, よく笑い, よき死と出会う: 超高齢社会の死生観」『老年精神医学雑誌』23(10): 1175~1180頁, 2012
- ・芳賀博「高齢者保健・福祉(5): 健康・生きがいづくり」『日本公衆衛生雑誌』55(1): 48~50頁, 2008
- ・芳賀博「介護予防の現状と課題」『老年社会科学』32(1): 64~69頁, 2010a
- ・芳賀博「高齢者の運動と生きがい」『老年社会科学』32(2): 143頁, 2010b
- ・芳賀博「アクションリサーチによる健康長寿のまちづくり」『日本老年医学会雑誌』49(1): 33~35頁, 2012
- ・長谷川明弘・藤原佳典・星旦二「高齢者の「生きがい」とその関連要因についての文献的考察—生きがい・幸福感との関連を中心に—」『総合都市研究』第75号, 147~170頁, 2001
- ・長谷川明弘・藤原佳典・星旦二「「生きがい」の構造; 「生きがい」の対象と伴う感情の共分散構造分析」『日本ケアマネージャー学会誌』2: 65~79頁, 2003a
- ・長谷川明弘・藤原佳典・星旦二・新開省二「高齢者における「生きがい」の地域差; 家族構成, 生活機能ならびに身体状況との関連」『日本老年医学会雑誌』40(4): 390~396頁, 2003b
- ・長谷川明弘・星旦二「都市近郊在宅高齢者における「生きがい」と関連要因」『日本ケアマネージャー学会誌』3: 58~67頁, 2005
- ・長谷川明弘・宮崎隆穂・飯森洋史・星旦二・川村則行「高齢者のための生きがい対象尺度の開発と信頼性・妥当性の検討—生きがい対象と生きがいの型の測定—」『日本心療内科学会誌』11(1): 5~10頁, 2007
- ・長谷川明弘「農村地域在宅高齢者における「生きがい」と身体・心理状況, 生活機能, 生活習慣

- および社会活動性との関連』『Hearty（金沢工業大学心理科学研究所年報・金沢工業大学臨床心理センター報）』6：15～23頁，2010
- ・本田亜起子・斉藤恵美子・金川克子・村嶋幸代「一人暮らし高齢者の自立度とそれに関連する要因の検討」『日本公衆衛生雑誌』49(8)：795～801頁，2002
 - ・本田亜起子・斉藤恵美子・金川克子・村嶋幸代「一人暮らし高齢者の特性：年齢および一人暮らしの理由による比較から」『日本地域看護学会誌』5(2)：85～89頁，2003
 - ・星旦二「高齢者の健康づくりにおける主観的健康感のすすめ（日本社会の高齢化と生きがい問題の諸相）」『生きがい研究』12：46～72頁，2006
 - ・星旦二・栗盛須雅子・猪野由起子・高橋俊彦・長谷川卓志・巴山玉蓮・山本千紗子・櫻井尚子・長谷川明弘「都市在宅高齢者における緑に関連する楽しみと生きがいの実態と主観的健康感との関連」『厚生指標』56(4)：16～21頁，2009
 - ・星旦二「都市在宅高齢者における生きがいと3年後の健康長寿との因果構造」『生きがい研究』18：35～64頁，2012
 - ・星旦二「都市在宅高齢者における楽しみと生きがいの実態とその三年後の累積生存率との関連（『生きがい研究』創刊20周年記念表彰論文）」『生きがい研究』20：25～36頁，2014
 - ・今井忠則・長田久雄・西村芳貢「60歳以上退職者の生きがい概念の構造：生きがい概念と主観的幸福感の相違」『老年社会科学』31(3)：366～377頁，2009
 - ・今井忠則・長田久雄・西村芳貢「生きがい意識尺度（Ikigai-9）の信頼性と妥当性の検討」『日本公衆衛生雑誌』59(7)：433～439頁，2012
 - ・神谷美恵子『生きがいについて』みすず書房，1980
 - ・金子勇「高齢者類型ごとの生きがいを求めて」『生きがい研究』10：4～18頁，2004
 - ・金子勇「高齢者の生きがい研究の帰結と展望（『生きがい研究』の成果と課題：分野別の整理・分析）」『生きがい研究』19：74～91頁，2013
 - ・近藤勉「高齢者の生きがい感測定におけるセルフ・アンカリングスケールの有効性」『老年精神医学雑誌』14(3)：339～344頁，2003
 - ・近藤勉・鎌田次郎「高齢者向け生きがい感スケール（K-I式）の作成および生きがい感の定義」『社会福祉学』43(2)：93～101頁，2003
 - ・近藤勉・鎌田次郎「高齢者の生きがい感に影響する性別と年代からみた要因—都市の老人福祉センター高齢者を対象として—」『老年精神医学雑誌』15(11)：1281～1290頁，2004
 - ・古谷野亘「モラル・スケール，生活満足度尺度および幸福度尺度の共通次元と尺度間の関連性（その2）」『老年社会科学』5：129～142頁，1983
 - ・厚生労働省「地域包括ケアシステム」（http://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/hukushi_kaigo/kaigo_koureisha_chiiki-houkatsu/）2013（2015年3月1日閲覧）
 - ・熊野道子「生きがい対象の集中・分散による満足度・ストレス反応の相違：定年前後の男性の場台」『高齢者のケアと行動科学』13(1)：32～40頁，2007
 - ・熊野道子「大学生・中年層・高齢者における生きがい—生きがい要素と対人関係の観点から—」

- 『教育福祉研究』34：7～16頁，2008
- ・前田大作・浅野仁・谷口和江「老人の主観的幸福感の研究；モラール・スケールによる測定を試み」『社会老年学』11：15～31頁，1979
 - ・松岡昌則「高齢者の生きがいと地域社会関係—秋田県南秋田郡大湯村の事例（特集地域福祉ネットワークの課題）」『社会学年報』29：17～33頁，2000
 - ・松岡昌則「農村高齢者の楽しみと地域の社会関係—秋田県山本郡藤里町米田地区の事例（研究発表高齢者の生きがいと地域社会）—」『生きがい研究』11：22～40頁，2005
 - ・見田宗介『現代の生きがい—変わる日本人の人生観—』日本経済新聞社，1970
 - ・岡本秀明「在宅高齢女性の高齢期の活動における活動意向の充足状況に関連する要因：大阪市N区における生きがいづくり委員会の調査から」『社会福祉学』45(2)：91～99頁，2004
 - ・岡本秀明・白澤政和「農村部高齢者の社会活動における活動参加意向の充足状況に関連する要因」『日本在宅ケア学会誌』10(1)：29～38頁，2006
 - ・坂田清美・吉村典子・玉置淳子・橋本勉「生きがい，ストレス，頼られ感と循環器疾患，悪性新生物死亡との関連」『厚生指標』49(10)：14～18頁，2002
 - ・流石ゆり子・亀山直子「『健康高齢者実習』の意義：学生の実習終了後レポートの分析による学習内容の検討」『老年看護学』9(1)：65～75頁，2004
 - ・流石ゆり子・伊藤康児「終末期を介護老人福祉施設で暮らす後期高齢者のQOLとその関連要因」『老年看護学』12(1)：87～93頁，2007
 - ・関奈緒「歩行時間，睡眠時間，生きがいと高齢者の生命予後の関連に関するコホート研究」『日本衛生学雑誌』56：535～540頁，2001
 - ・Seligman M. E. P. 「The President's Address」(<http://www.ppc.sas.upenn.edu/aparep98.htm>) 1998（2006年11月8日閲覧）
 - ・柴田博「サクセスフル・エイジングの条件」『日本老年医学会雑誌』39(2)：152～154頁，2002
 - ・柴田博「高齢者の長寿・生きがいと豚肉」『日本養豚学会誌』41(2)：97～99頁，2004
 - ・島井哲志「ポジティブ心理学の背景と歴史的経緯」島井哲志編『ポジティブ心理学—21世紀の心理学の可能性—』ナカニシヤ出版，3～21頁，2006
 - ・山登一輝「高齢者と子どもをつなぐパソコンお絵描き教室：NPO法人do beくらぶの活動（生きがい健康づくり事業報告）」『生きがい研究』18：119～145頁，2012
 - ・山登一輝「『生きがい研究』にみる高齢者の生きがい健康づくり事業の動向（『生きがい研究』の成果と課題：推進機構・助成団体等の事業動向）」『生きがい研究』19：94～109頁，2013
 - ・安田節之・渡辺直登『プログラム評価研究の方法』新曜社，2008

資料 2000年から2014年10月まで日本で報告された「生きがい」研究 論文一覧
(刊行年順)

表1 2000年から2014年10月まで日本で報告された「生きがい」研究

著者 (発表年)	論文名 〔雑誌〕 巻(号), 頁	目的	生きがいの定義
佐藤秀紀, 鈴木幸雄, 松川敏道 (2000)	地域高齢者の社会活動 への参加状況 〔日本の地域福祉〕 14, 81-89	「社会活動への参加状況は、性別と年齢によって差異がある」との基礎的な仮説のもとに、青森県内に在住する高齢者を対象に、彼らの社会活動に着目し、その活動と性および年齢との関連性について検討すること。	特になし
中本朱美, 小西美智子 (2000)	高齢在宅療養者の生きがいと療養生活の受け止め方に関する研究 〔日本地域看護学会誌〕 211, 87-92	高齢在宅療養者の生きがいの構造と療養生活の受け止め方との関連性を明らかにし、その関連性をみることに、高齢在宅療養者の生きがいの内容と療養生活の受け止め方との関連性を明らかにし、看護職が高齢在宅療養者のQOLを高めること、つまり生きがいを持って生活できるような支援方法について検討すること。	基本的な活動(身体の清潔を保つ、身体を動かす、好みの物を飲食する、在宅を希望する) 社会的な活動(テレビ等より情報を得る、別居している家族親戚と話す、近隣者友人知人と話すなど) 創造的な活動(買い物へ行く、身辺を整理する、園芸をする、詩吟を習う、読書する、銭湯へ行き大浴場につかるなど)
水戸美津子 (2000)	高齢者の活動状況および生活意識にみる地域差 〔老年社会科学〕 2211, 72-82	高齢者の活動状況と生活意識にみられる地域差を検出することにより、高齢者保健活動および地域活動促進のための基礎資料とすること。	特になし
松岡昌則 (2000)	高齢者の生きがいと地域社会関係-秋田県南秋田郡大潟村の事例(特集 地域福祉ネットワークの課題) 〔社会学年報〕 29, 17-33	地域の特性のなかでの高齢者の日常生活の満足の態様を捉え、高齢者をめぐる社会関係の課題について考察すること。	特になし
森俊太 (2000)	高齢者の生きがい-通文化的な分析モデルを求めて(特集 近代社会における自我と生きがい) 〔社会学年誌〕 41, 15-29	イタリア、サンマリノ、フランス、台湾、韓国で得たインタビューによるデータを中心に、調査グループが他国で収集したデータも参照しつつ、生きがいの通文化的な分析モデルを作り上げること。	高齢者の生きがいが社会問題であると考えられる言説そのものを、分析対象としている。他の国では日本と同じように、高齢者の生きがいが社会問題として語られているかどうか、もしそうであれば、どのような類似点、相違点があるのかなどを調べることができる。
江上涉 (2000)	家族・地域社会と高齢者の生きがい(特集 近代社会における自我と生きがい) 〔社会学年誌〕 41, 31-46	海外・圏内の調査のうち、デンマークと沖縄での高齢者インタビューの概要を示し、その知見を検討した上で現代日本の都市社会において高齢者の生きがいが問題となる状況について考察していく。	生きがいを相互性という社会的観点からとらえようとする場合、「個」と「個」の関係が重要になる。
内濱京子, 並木一子 (2000)	在宅の進行性難病利用者を家族と共に支える為の実践 〔高齢者のケアと行動科学〕 71, 7-16	治療不能の進行性難病に罹患し、家族との生活の中で本人の葛藤と、介護にあたる家族の戸惑いの中で、本人は徐々に病識を得、意欲的に今を生きる姿勢を示しつつあった。デイサービスを初めとする施設利用の中で、家族の精神的、肉体的な介護の軽減に繋げていける様にする為の実践報告をすること。	生きがいを趣味と同等に捉えていた可能性がある。生きがいとしている趣味的な活動、水墨画の制作の継続を支援し、発表の機会を設定し、目標に向かって意欲的に行えるよう励ましていく事にした。

生きがいの測定の仕方	研究参加者・研究対象 [調査方法・研究デザイン]	研究成果・要約
なし	青森県内67市町村とし、調査対象は層化多段無作為抽出法により65歳以上の高齢者3,000名を抽出した。調査は食生活改善委員による配票留置法によって実施。 [横断調査研究] (関連要因)	社会的活動領域、学習的活動領域および個人的活動領域のすべての領域ともに女性が男性に比して活動的であることが示された。高齢者の社会活動は、性別、年齢と密接に関連している。高齢者にとっても社会活動への参加は、生きがいや充実した生活につながると同時に、世代間の交流を促し、地域の連帯や社会活動そのものを高める意義は大きいものと考えられる。
なし	日県看護協会の訪問看護ステーションを利用しており、コミュニケーションがとれる高齢在宅療養者で、研究の同意が得られた34名となった。 [質的研究]	「創造的な活動があり療養生活を肯定的と否定的に受け止める」「創造的な活動を求め療養生活を肯定的と否定的に受け止める」「創造的な活動がなく療養生活を否定的に受け止める」には、対象者の希望が何なのか明確にして、その望みを実現できるよう支援していくことが必要であると考えられる。そのためには身体的状態に対する訪問看護師の看護ケアやヘルパーによる生活援助に加え、保健師の継続的な指導、その他利用しているサービスのスタッフによるケア等の専門的な支援が不可欠であると思われる。
日常生活で感じている生きがい・充実感を5件法で尋ねた	上越市内3地域の老人クラブ加入の65歳以上の者で、分析対象者は381人となった。 [横断調査研究] (関連要因)	同一市内の3地域間で年齢、居住年数、同居形態、対象者の健康度、日常生活行動、生活意識で有意差を認めたが、生活満足度と生きがい感については3地域間に有意な差はなかった。
なし	秋田県南秋田郡大湯村の老人クラブ会員に対する面接調査の結果である。対象者254名のうち回答者数は155名であった。 [質的研究]	大湯村の高齢者は生きがいを集団・仲間参加とそこでの活動に多く見出しているようである。日常のつきあい関係が希薄なことから、日常的な個人的行き来は多くなく、自ずと仲間や村のなかに用意された場所を見つけ、生きがいを感じている。
分析単位は逸脱や社会問題などの社会的なカテゴリーが形成され変化していく過程そのもの	現地調査は、各国に調査グループのメンバーが数日間滞在し、10人から20人前後の対象者に通訳を介してインタビューするという形が多かった。 [質的研究]	今回調査した国々でも幾つか既に実施されていることが確認できた。しかし、高齢者の生きがいがか社会問題化していて、かつ様々な調査が行われている国は、日本しかなかった。各国の調査結果を見ても、高い生きがいを持つ高齢者は、職業、趣味、家庭生活などを合わせた総合的な個人の生活パターン(ライフスタイル)に加齢やライフイベントに左右されない。継続性があり、また、様々な人間関係のネットワークを持ち、かつ自分なりに納得した信仰や、哲学的なビジョンをもった人であるという結果が出た。軸を糸と見なすと、生きがいはネットワークである糸、ライフスタイルである糸、そして精神性である糸の3本から織り成された図柄と言える。
生きがいをパーソナル・ネットワークという分析概念を用いて分析する	デンマークと沖縄での高齢者調査 [質的研究]	わが国の場合、生きがいを「特定の対象」の中に見いだそうとする傾向が強いのではないかということである。パーソナル・ネットワークの構造の日本的な特色があって、それゆえに所属集団やそこに生じる関係性への非常に強いコミットメントを求めてさらに生きがいを求めるようになる。
なし	進行性難病に罹患したデイサービス利用の在宅療養男性68歳であった。 [実践報告]	対象者は、難病の進行に伴って、生きる意欲を失い始め、家族に対する不満を募らせていった。入院中や、ショートステイ利用中でも、生きがいとしての活動だけは続けていきたいと希望したり、在宅支援サービスの趣味活動、水墨画や演劇等、それを支えて支援してくれる人達との出会いは、対象者にとって、残された人生を有意義に生きようと思う強い信念を生むきっかけとなったと考えられる。

著者 (発表年)	論文名 [雑誌] 巻(号), 頁	目的	生きがいの定義
木寺博子 (2000)	高齢者の健康・生きがい・食生活に寄せて－世代間交流を高めるために－ [家庭科教育] 74(6), 29-37	高齢者と食生活と生きがいとの関係で、世代間交流を高めるため提案をすること。	生きがいの意味について、サラリーマンや65歳以上では「生きる喜びや満足感」であった。
大國美智子 (2001)	女性高齢者の社会参加と生きがい [臨床精神医学] 30(7), 881-885	女性高齢者の社会参加と生きがいを論考すること。	生きがい、あるいは幸福感・満足感・充足感などといわれるものは、古くから、①健康、②経済的、時間的ゆとり、③よい人間関係(家族、仲間など)、④意識や考え方の4要素で決まってくるとされている。
杉澤秀博, 秋山弘子 (2001)	職域・地域における高齢者の社会参加の日本比較 [日本労働研究雑誌] 487, 20-30	日本の男性高齢者の職域を中心とした社会参加をめぐる論点について実証データに基づき検討すること。	生きがいの一つの指標といわれている生活全体を評価する満足度(以下「生活満足度」)を取り上げた。
浅海奈津美 (2001)	生活行為別にみたまちづくりのポイント 旅行する－障害者・高齢者の旅行支援とまちづくり(増大特集 福祉のまちづくり 暮らしづくり・生きがいづくり)－(暮らし・生きがい・社会参加) [作業療法ジャーナル] 35(6), 555-561	人生を再建する力をもつ「旅行」という魅力的な作業を、障害者が安心して楽しく遂行するために、作業療法士はどのような支援ができるのかを考えてみたい。	特になし
川辺郁代, 川辺善久, 稲庭千弥子 (2001)	障害別にみたまちづくりのポイント 痴呆高齢者の笑顔がある暮らしづくり(増大特集 福祉のまちづくり 暮らしづくり・生きがいづくり)－(暮らし・生きがい・社会参加) [作業療法ジャーナル] 35(6), 603-606	認知症を持った高齢者が生きがいをもって暮らせるまちとはどのようなところなのだろうか。そのためにわれわれ医療・福祉に携わる者はどのような援助ができるのかを当院の痴呆高齢者を通して考えること。	生きがいと楽しみを同等に捉えていた可能性がある。生を肯定的に捉え、残存能力を引き出し(手続き記憶を刺激するなど)、たとえば現在作業しているものの完成の時期・利用方法・楽しみ方をより具体的に示すこと
秋山哲男 (2001)	高齢者・障害者対応のコミュニティ交通計画(増大特集 福祉のまちづくり 暮らしづくり・生きがいづくり)－(福祉のまちづくりの取り組み) [作業療法ジャーナル] 35(6), 623-627	高齢者・障害者に配慮した公共交通のあり方を考えること。	特になし

生きがいの測定の仕方	研究参加者・研究対象 [調査方法・研究デザイン]	研究成果・要約
財団法人健康・生きがい開発財団『現代社会と中高年—中高年と健康・生きがい』p.78, p.81, 1998	文献 [論考]	定年になって暇が出来てからでなく、若いうちから、健康とともに生きがいづくりを心掛けておきたいものである。高齢になっても、社会参加活動に積極的な人は、生きがいを強く持ち、食生活にも知恵と経験から賢く豊かな食生活を送る例がある。地方の郷土色豊かな料理も地域イベントなどで伝承しながら世代間交流へと生かしてほしい。
なし	文献 [論考]	今後の男女共同参画社会の中では、こうした家族を意識した専業主婦型、自営業支援主婦型の社会参加に限らず、長年の就労や社会での活動を基盤に、どちらかといえば、職業的経験・技術・知識・趣味・好み・人脈などの人生経験を十分に活用しようとする高齢期の社会参加が増え、主体的に活動できる高齢女性が自分の意思で参加する本格的な社会参加が増えるであろう。
なし	米国のデータベースは(America's Changing Lives (初回調査は1986年, 追跡調査は1989年に実施), 日本のデータベースは「高齢者の生活と健康に関する縦断的・比較文化的研究(初回調査は1987年, 追跡調査は1990年に実施)」によって収集された。 [横断ならびに縦断調査研究](日米比較)	日本の男性について、高齢者の就労意欲や就労率が高いことから、高齢社会のあり方の一つとして就労を通じた生きがい対策、経済基盤の確保が考えられる。しかし、他方では、「生きがい就労」、あるいは引退の悪影響は、日本の男性よりもむしろ米国の男性そして日本の女性にみられることが明らかにされ、日本の男性高齢者は、就労が生きがいの中心であったり、引退後への適応が困難であるという問題をかかえているという、一般的な認識に再考をせまる内容となっている。
なし	資料と取材 [論考]	作業療法士の立場から、当事者への直接支援とまちづくりに関して「旅は最高のリハビリテーション」とする論考が展開された。
なし	施設入所者 [論考]	作業療法士の立場から、対象者に関わる中での論考が展開された。
なし	文献 [論考]	公共交通の現状と新しく発展しつつある海外の取り組みや国内で取り組みの紹介が行われた。

著者 (発表年)	論文名 〔雑誌〕 巻(号), 頁	目的	生きがいの定義
山下昭美, 近藤亨子, 田中隆, ほか (2001)	施設高齢者の生きがい 感とQOLとの関連に ついて 〔厚生指標〕 48(4), 12-19	高齢者を対象に生きがいの自覚と QOLを面接および質問票を用いて調 査し, 両者の関連を検討すること。	特になし
関奈緒 (2001)	歩行時間, 睡眠時間, 生きがいと高齢者の生 命予後の関連に関する コホート研究 〔日本衛生学雑誌〕 56, 535-540	健康憎悪の最終段階が死亡であるとい う捉え方を基に, 歩行, 睡眠, 生きが いの3因子と生命予後の関連について 約7年半の追跡調査を用いて検討する こと。	生きがいを1つの具体的なものとし て表現することは困難であり, また 個人差が大きいため実際に集約的な 対策がとりにくいのも事実である。
長谷川明 弘, 藤原佳 典, 星旦二 (2001)	高齢者の「生きがい」 とその関連要因につ いての文献的考察: 生 きがい・幸福感との関 連を中心に 〔総合都市研究〕 75, 147-170	本論文の目的は, 国内外の「生きが い」研究で報告された定義や関連要因 を含めた研究成果を整理し, 新しく 「生きがい」の定義を概念規定し, 今 後の課題と研究の方向を考える際の資 料とすること。	考察で論じている。
柴田博 (2002)	サクセスフル・エイ ジングの条件 〔日本老年医学会雑誌〕 39(2), 152-154	「サクセスフル・エイジングの条件」 という題目での教育講演	欧米には, 良い人生を送り天寿を まっとうすることをSuccessful ag ingとよぶ, これに相当する日本語 は存在しないので, とりあえず, 生 活の質(QOL), サクセスフル・エイ ジングとProductivity (社会貢献) という用語を用いることにしてい る。サクセスフル・エイジングと類 似的の日本の用語として「生きがい」 がある。

生きがいの測定の仕方	研究参加者・研究対象 [調査方法・研究デザイン]	研究成果・要約
<p>生きがい感の質問は面接者が対象者に、まず、「あなたは現在、生きがい、生きる張り合い、生きる喜びがありますか」と尋ね、「ない」と回答した場合には「以前はあったかどうか」を聞き取った。さらに、「現在ある」または「現在はないが以前はあった」と回答した場合には、その回答の堅固さを確認する目的で「具体的な生きがいは何か」を尋ねた。</p>	<p>大阪の某養護老人ホームに入所する施設高齢者262人中、自立歩行が可能で、調査に同意が得られた84人（男34、女50）であった。 [横断調査研究] (関連要因)</p>	<p>心理的・精神的領域のQOLにおいて、生きがいがある場合はスコアが高いが、生きがい以前にあって現在ない場合はスコアが低いという明らかに生きがいの有無とQOLとは強い関連を認め、生きがいをなくしたことと心理的・精神的領域のQOLとは関連が深いことを示した。しかし、生きがい以前も現在もない場合にはこのような関連は認められなかった。</p>
<p>生きがいは「『生きがい』や『はり』をもって生活していただけますか」の問いに対し、「非常にある」「ある」と回答したものを「生きがいあり」とし、生きがいの有無の2群で検討した。</p>	<p>平成2年（1990年）7月に新潟県農村部の人口約6,400名のA村において行われた調査のうち、特に60歳以上75歳未満である1,291名（男性540名、女性751名）の中の1,065名をコホートとし、平成9年（1997年）12月末まで約7年半の生命予後を追跡した。 [縦断調査研究] (因果関係)</p>	<p>高齢者の生命予後に対し、歩行習慣、睡眠時間、生きがいの3要因が重要であることが明確に示された。本研究で高齢者にとって生きがいが重要な因子であると考えられた。高齢者の生命予後には、今回検討した3要因以外の因子の存在も示唆しうる。例えば、食生活・栄養などはがんや脳血管疾患等の生活習慣病と深い関連があることがこれまで指摘されており、今回これらの因子の関与について深く検討できなかった。</p>
<p>日本においては、文献調査が多く、実証調査によって測定された研究数は10にも満たない。つまり国内における「生きがい」の先行研究はほとんどが思弁的で特定の価値観や恣意的な意味合いが混じり合った報告が多かった。</p>	<p>社会老年学、老年社会科学といった学術誌を中心に2001年3月までに発表された「生きがい」と表題のついた文献と同時に「生きがい」と関連があるといわれている「人生満足度」、「モラル尺度」や「主観的幸福感」に関する国内外の論文が小計45編を用いた。 [文献調査]</p>	<p>「生きがい」とは、「あなたの生きがいは何か」と尋ねられた時に、その人が過去の経験、現在の出来事、未来のイメージといった「（『生きがい』の）対象」を心に思い浮かべ、同時に伴って湧いてくる自己実現と意欲、生活充実感、生きる意欲、存在感、主動感といった種々の感情、つまり「（『生きがい』の対象に）伴う感情」を統合した自己の心の働きである。「生きがい」は日常語であるとしている。「生きがい」には健康と年齢、受診状況、教育年数、最長の職種、同居者あるいは同居予定者、居住形態、地域差との相互関連性の高さを実証しており、「生きがい」研究を進めていく上では、これらの側面からの調査を総合的に把握する必要がある。「生きがい」を測定できる簡便な尺度や定型化された質問が完成すれば、医療・保健・福祉・老年学領域だけでなく日本文化を探る独創的な研究が可能となってくるであろうし、国内外の居住地域による違いも検討できるようになる。また「生きがい」は個人の生き方の指針ともなりうるので心理学・教育学・哲学など学際的な研究課題といえる。</p>
<p>なし</p>	<p>特になし [論考]</p>	<p>サクセスフル・エイジングの構成要素は、長寿、生活の質（QOL）、Productivity（社会貢献）で成り立っていると考えている。この概念枠組みはさまざまな学者によって提唱されており、この枠組みをすべての学者が承認しているわけではないことはいうまでもない。</p>

著者 (発表年)	論文名 [雑誌] 巻(号), 頁	目的	生きがいの定義
坂田清美, 吉村典子, 玉置淳子, ほか (2002)	生きがい, ストレス, 頼られ感と循環器疾 患, 悪性新生物死亡と の関連 [厚生指標] 49(10), 14-18	生きがい, ストレス, 頼られ感が循環 器疾患, 悪性新生物死亡に及ぼす影響 について明らかにすること。	生きがい, ストレス, 頼られ感は, 主観的な人生観または健康観であ る。
早坂信哉, 多治見守 泰, 大木い ずみ, ほか (2002)	在宅要援護高齢者の主 観的健康感に影響を及 ぼす因子 [厚生指標] 49(15), 22-27	在宅要援護高齢者の主観的健康感に影響を及ぼす因子を明らかにすること。	特になし
福田寿生, 木田和幸, 木村有子, ほか (2002)	地方都市における65歳 以上住民の主観的幸福 感と抑うつ状態につい て [日本公衆衛生雑誌] 49(2), 97-105	北東北の一地方都市住民の特定年齢の 大多数を対象として, 実際にモラール 得点とZung指数に関連が認められる かどうかということを明らかにすること。	改訂版モラールスケールは「幸福な 老い」の指標としてわが国で広く使 用されており, 日本語に翻訳された ものは, 日本の高齢者においてもそ の信頼性, 妥当性が示されている。

生きがいの測定の仕方	研究参加者・研究対象 調査方法・研究デザイン	研究成果・要約
生きがいの有無	<p>農林業を主要産業とした和歌山県中部のM村および漁業を主要産業とした南部のT町を対象地域とした。M村については、1988年12月末現在40歳以上80歳未満の全住民1,543人を対象として、ベースライン調査を実施した。1989年までにベースライン調査を完了し、1,369人(88.7%)から協力が得られ、コホートを設定した。T町については、1992年12月末現在40歳以上80歳未満の全住民2,261人を対象として1992年にベースライン調査を実施し、1,590人(70.3%)から協力が得られ、コホートを設定した。M村については1999年12月末まで10年間の追跡を完了し、T町については1999年11月末まで7年間の追跡を完了した。 〔縦断調査研究〕 (因果関係)</p>	<p>生きがい、ストレス、頼られ感が循環器疾患、悪性新生物死亡に及ぼす影響について検討した結果、生きがいがあるとはっきりいえないと答えた者ではそうでない者に比べ、男では循環器疾患死亡、脳血管疾患死亡の相対危険が有意に上昇していた。女では、心疾患死亡と有意な関連のみ見られた。循環器疾患予防のためには、生活習慣による危険因子だけでなく、心理社会的要因についても配慮して地域社会づくりをしていく必要があると考えられた。</p>
<p>16の項目(デイサービス・デイケアへの参加、ホームヘルパーの訪問、働くこと、家事や家族の世話、学習や教養を高めるための活動、運動・散歩・スポーツ、勝負事・ギャンブル、ボランティア活動・社会奉仕活動、家でのもんびりすること、趣味の活動、家族との団らん・交流、テレビやラジオ、食べたり飲んだりすること、ペットや小動物の世話、宗教への信仰、政治活動)に対する生きがいの感じ方を4件法で尋ねた。</p>	<p>全国18の市町村で、65歳以上の在宅で暮らす認知症を有さない要介護高齢者528人を任意に抽出した。 〔横断調査研究〕 (関連要因)</p>	<p>生きがいを感じる項目との関係は、多くの項目で、生きがいを感じる者ほど主観的健康感が高い傾向が見られた。特に「働くこと」や「運動、散歩、スポーツ」などの能動的な活動で高いオッズ比が観察された。一方、「ホームヘルパーの訪問」という受動的な活動に生きがいを感じるという群では主観的健康感が低かった。本研究ではホームヘルパーの訪問のどの点に生きがいを感じるか、詳しい調査はなされていないため、議論には限界がある。しかし、介護保険で提供されるサービスに生きがいを感じることによって、主観的健康感が低下する可能性があるなら、ホームヘルパーの訪問の問題点を詳細に調査し検討する余地があると思われる。</p>
<p>改訂版PGCモラールスケール(morale scale)の全17項目(前田ら、1979)</p>	<p>平成10年8月に北東北の一地方都市に在住している65歳以上の全員(31,674人)のうち、郵送するまでに死亡、転居、もしくは住所不明であった者を除く31,090人 〔横断調査研究〕 (関連要因)</p>	<p>H市に在住する65歳以上の男性はどの年代も、女性に比べてモラール得点が高くZung指数が低いことが認められた。健やかに老いるためには、健康状態や、活動水準、経済状況等が重要な要素の一つであると思われる。</p>

著者 (発表年)	論文名 [雑誌] 巻(号), 頁	目的	生きがいの定義
中村好一, 金子勇, 河村優子, ほか (2002)	在宅高齢者の主観的健康観と関連する因子 [日本公衆衛生雑誌] 49(5), 409-416	わが国における在宅高齢者の主観的健康感と関連する因子を明らかにすること。	特になし
山本則子, 石垣和子, 国吉緑, ほか (2002)	高齢者の家族における介護の肯定的認識と生活の質(QOL), 生きがい感および介護継続意思との関連: 続柄別の検討 [日本公衆衛生雑誌] 49(7), 660-671	高齢者を介護する家族の介護に関する肯定的な認識と介護者の心身の生活の質(QOL), 生きがい感, および介護継続意欲との関連を続柄別に検討すること。	介護者の生きがいに関する過去の質的インタビューに基づいて項目を設定し, 得点, 分布の広い項目を選び, 因子分析の結果から項目を最終決定した。
本田亜起子, 齊藤恵美子, 金川克子, ほか (2002)	一人暮らし高齢者の自立度とそれに関連する要因の検討 [日本公衆衛生雑誌] 49(8), 795-801	地域の在宅の一人暮らし高齢者を対象に, 一人暮らし高齢者の実態を把握し, さらに自立度による身体的特性, 精神的特性, 社会的特性を明らかにすること。	特になし
小野寺理佳 (2003)	別居祖母の育児支援満足度をめぐる一考察 [家族社会学研究] 14(2), 77-87	孫と別居する祖母の育児支援の満足度および支援頻度・内容を把握したのち, 祖母世代と子世代の関係に注目しながら, どのように支援がなされる世代間関係において満足度が高くなるのかを検討すること。	特になし
近藤勉 (2003)	高齢者の生きがい感測定におけるセルフ・アンカリングスケールの有効性 [老年精神医学雑誌] 14(3), 339-344	在宅高齢者である福祉センターに通う高齢者を対象に生きがい感を測るスケールとしてセルフ・アンカリング・ストライビングスケールを用いて測定を行い, 信頼性と妥当性の検討を行うこと。	生きがい感を「何事にも目的をもって意欲的であり, 人の役に立つ存在であり, 責任感をもって生きていく張合い意識である。また何かを達成した, 向上したと思えるとき, 恵まれていると感じられるときにももてる意識」とした(近藤・鎌田, 2003)。
堀田力 (2003)	高齢者の社会参加の現状と課題 [老年精神医学雑誌] 14(7), 853-858	高齢者の社会参加を考えていくこと。	特になし

生きがいの測定の方法	研究参加者・研究対象 [調査方法・研究デザイン]	研究成果・要約
改訂版PGCモラルスケール(morale scale)の全17項目(前田ら, 1979)	2000年に全国20の市町村(東京都特別区を含む)の協力を求め、住民を対象とした調査を実施した。各市町村で住民基本台帳より65歳以上の高齢者を無作為抽出しその中から医療機関に入院中の者や施設入所者を除外して調査対象者を決定した。最終的な全対象者数は6,094人となった。 [横断調査研究] (関連要因)	生きがいを感じる項目は、単変量解析では多くの項目で統計学的に有意な結果が得られた。種々の項目に生きがいを感じる者が主観的健康感が高いのも、合理的な結果といえる。その中で、「家で、のんびりすること」「テレビやラジオを見たり聞いたりすること」「ペットや小動物の世話」の3項目が主観的健康感と関係がない、またはこのような項目に生きがいを感じる者では主観的健康感が低い、という結果であったことには、注目したい。前2者は消極的、あるいは受け身的な活動であり、主観的健康感に関連しないのは当然かもしれない。しかしペットや小動物の世話は積極的な活動であり、前2者と同じ捉え方はできない。動物の世話は、自分が行いたい時だけ行う、というのではなく、毎日の義務的な側面もあり、このような結果になったのかもしれない。なお、多変量解析では動くことと飲食のみが有意なものとして抽出されたが、後者については特に手が掛らず、いつでも手軽にできる、ということで主観的健康感と関連があるのかもしれない。
「生きがい感」は「私の今の人生を良いと感じる」「毎日の生活の励みになるものがある」「私の今の人生に満足している」「私は今の生活に『生きがい』を感じている」に対し「まったくあてはまらない=0」から「とてもよくあてはまる=3」の4段階で、回答を得る形で尋ねた。	調査対象の基準を満たす高齢者は21施設で1,608件あり、そのうち381家族が抽出された。この381家族のうち、44家族が調査拒否・高齢者の入院および死亡・その他の事情で除外され、残る337件の家族から回答を得た(回収率88.5%)。 [横断調査研究] (関連要因)	生きがい感はいずれの場合も介護の肯定的評価が有意に関連しており、夫・息子別個の分析でも同様の結果が得られた。生きがい感は人生に対する意味感や意味をもたらす活動の存在、それに伴う肯定的な情緒に焦点をあてており、介護に関する肯定的認識との概念上の類似性が高い。生きがい感と肯定的認識の強い関連は、このために得られたものと思われる。介護者の心理的QOLや生きがい感、介護継続意思の検討には、その介護者が介護からどのように喜びや満足感を得ているか-肯定的認識-の把握が、否定的認識の把握とともに重要であること、心理的QOLなどに対する肯定的認識の重要性の検討には、統柄の違いに配慮する必要があることが示された。
生きがいの有無	I県T町に居住する65歳以上の在宅の一人暮らし高齢者全数を対象とした245人から分析対象者が101人(男性20人、女性81人)となった。 [横断調査研究] (関連要因)	要介護予備群は、自立群と比較して抑うつ傾向にある高齢者が有意に多く、生きがいをもつ高齢者が有意に少なかったが、要介護群と比較すると有意差が認められなかった。
現在の生活の楽しみや生きがいについて	1998年に北海道の人口180万人規模の都市部で配布調査「育児支援をめぐる世代間関係の実態調査」を実施した中での回答者である祖母11人を対象として、2001年6月に実施したインタビューによるものである。 [横断調査研究] (関連要因)	孫と別居する祖母の支援満足度は、認知される精神的支援量が多いほど高くなる。子育て支援の負担感を見て、現在の生活の楽しみや生きがいとしてあげられているのは、「学生時代からの友人との外食や旅行」「仕事、社交ダンス、友人との麻雀・温泉旅行」「野菜づくり、鉢花、老人クラブ、友人とのつきあい」であり、3ケースとも支援とうまく両立されて、祖母に認知される精神的支援量が増える。
「生きがい感」を10とし、まったくない状態を0とするなら、あなたはどのくらいだと思いますか」と尋ねてハシゴ状の図に回答を求めた。	1999年7月上旬に大阪府老人福祉センター3か所に通う高齢者306人(男性60歳代75人、70歳代70人、女性60歳代74人、70歳代87人、全体、平均年齢69.79歳、SD=5.19) [横断調査研究] (関連要因)	再検査を行ったその結果、高い信頼性推定値が得られた。このスケールは単独のスケールとしてもまた併存的妥当性の基準値としても有効であると考えられた。
なし	特になし [論考]	相互扶助活動をするNPO・ボランティア団体へ的高齢者の参加は、かなり目覚ましい。高齢者本人に生きがいを与え、活動の対象者や地域社会一般にプラスの効果をもたらす高齢者の社会貢献活動であるが、日本の現状をいえば、まだまだ受け皿が少ない。日本のNPO活動やボランティア活動は、相当強い意思と生かすべき能力をもった人が、特別な意思力を振り絞って飛び込まないと、参加できない。

著者 (発表年)	論文名 [雑誌] 巻(号), 頁	目的	生きがいの定義
長谷川明弘・藤原佳典・星旦二 (2003a)	「生きがい」の構造－「生きがい」の対象に伴う感情の共分散構造分析－ [日本ケアマネジャー学会誌] 2, 65-79	在宅高齢者の「生きがい」の構造を実証的に明確にすること。	長谷川ら (2003b) は、「生きがい」を、「今ここで生きているという実感、生きていく動機となる個人の意識」と定義した。「生きがい」とは、自己あるいは主体が今ここで実感している「生きがい」感、「生きがい」意識、あるいは「生きがい」の対象に伴う感情と呼ばれる「生きがい」を感じている精神状態と、それらが生じてくる「生きがい」の対象もしくは「生きがい」の源泉との総和あるいは相乗の結果とした (長谷川ら, 2003a)。
河内尚明 (2003)	介護保険と高齢者医療：2002東京－介護保険は機能しているか；介護保険と法的側面－法律家の立場から [日本老年医学会雑誌] 40(3), 252-253	市民公開講座「介護保険と高齢者医療 2002東京－介護保険は機能しているか」の記録となっており、執筆者の取り組みを報告すること	特になし
長谷川明弘・藤原佳典・星旦二、ほか (2003b)	高齢者における「生きがい」の地域差：家族構成、身体状況ならびに生活機能との関連 [日本老年医学会雑誌] 40(4), 390-396	高齢者における「生きがい」の有無と家族構成や生活機能ならびに身体状況との関連について、農村地域と大都市近郊ニュータウン地域において比較検討すること	長谷川ら (2003b) は、「生きがい」を、「今ここで生きているという実感、生きていく動機となる個人の意識」と定義した。「生きがい」とは、自己あるいは主体が今ここで実感している「生きがい」感、「生きがい」意識、あるいは「生きがい」の対象に伴う感情と呼ばれる「生きがい」を感じている精神状態と、それらが生じてくる「生きがい」の対象もしくは「生きがい」の源泉との総和あるいは相乗の結果とした (長谷川ら, 2003a)。
近藤勉、鎌田次郎 (2003)	高齢者向け生きがい感スケール (K-I式) の作成および生きがい感の定義 [社会福祉学] 43(2), 93-101	わが国の高齢者の生きがい感を調査し、その結果を基に生きがい感スケールを作成し、生きがい感を操作的に定義すること。	考察で論じている。これまでの生きがいの定義は、いずれも研究者の経験から直感的に導き出されたものであり、それがいかに綿密に思考されたものであっても、調査に照らしていない以上、やはり恣意的であり、特定の価値観や人生観が含まれているのではないかと批判を免れることはできない。

生きがいの測定の仕方	研究参加者・研究対象 [調査方法・研究デザイン]	研究成果・要約
<p>「生きがい」を感じる程度として、1)働くこと、2)学習や教養を高めるための活動、3)スポーツやレクリエーション活動、4)趣味の活動、5)ボランティア活動、6)老人クラブ活動、7)近所の人や友人、知人とのつきあい、8)孫の世話や家族との団らん、9)買い物や旅行に出かけること、10)自治会などの活動、11)これまで蓄えてきた知識や技術、12)配偶者、13)子ども、14)孫、15)健康、16)ペット、17)家庭での役割、18)社会での役割、19)その他の19項目について「『生きがい』になる』から、『どちらかといえば『生きがい』になる』、『あまり『生きがい』にならない』、『まったく『生きがい』にならない』までの4件法で尋ねた。</p>	<p>農業と漁業が盛んな佐賀県日町に在住する65歳以上の全高齢者1,498名とした。調査期間は、2001年12月1日から12月20日であった。調査の結果1,354名(男:545人;女:809人)から回答が得られた(応答率90.4%)。 [横断調査研究] (関連要因)</p>	<p>共分散構造分析を用いて分析した結果、長谷川ら(2001)の「生きがい」構造モデルについて自己(主体)が基盤となった上での「生きがい」の対象や伴う感情への影響を男女差や各要素の強さについて実証的なデータで示せた。</p>
なし	<p>特になし [論考]</p>	<p>連続・全体的なかかわりをもつ支援に向けて、名古屋では、井口昭久教授ら名古屋大学老年科の医師らと弁護士・弁護士会が中心になって、研究者、医師、地域病院、MSW、福祉学者ら福祉関係者、行政、弁護士、社会学者、記者、消費生活相談員その他幅広い参加者を含めた研究会を発足させ、共通認識・共通言語・共同検討・ネットワーク化に向けた取り組みを始めた。</p>
生きがいの有無	<p>農村地域として2000年10月現在、新潟県Y町に居住している65歳以上の住民で回答が得られた1,544名であり、大都市近郊ニュータウン地域として2001年1月現在、埼玉県H町ニュータウン区域に居住している65歳以上の住民で回答が得られた1,002名であった。 [横断調査研究] (関連要因)</p>	<p>農村地域と大都市近郊地域の間で「生きがいあり」の割合に有意差を認めなかった。「生きがい」の関連要因として、両地域共に健康度自己評価、知的能動性ならびに社会的役割が示された。農村地域では家族構成が強い関連を認め、性別や世代によって関連の強さが異なった。また大都市近郊ニュータウン地域では男性において入院経験の有無が「生きがい」の有無との間に強い関連があり、世代によって正負の関連が変動した。</p>
生きがい感尺度を開発することが目的である。	<p>予備調査は1999年4月上旬に60歳以上の都市部の在宅高齢者162人(男性102人、女性60人)、平均年齢68.56歳(SD=5.31)。本調査は、1999年7月上旬、大阪府下都市部に位置する老人福祉センター3か所にて、391人(男性190人、女性201人)平均年齢72.96歳(SD=7.77)に対し、個別面接で18の質問項目を「はい」「どちらでもない」「いいえ」の3件法でたずねた。 [尺度構成]</p>	<p>項目分析の結果、16項目による高齢者向け生きがい感スケールを構成した。このスケールは信頼性と妥当性が高いスケールであることが分かった。このスケールの構造から高齢者の生きがい感を「毎日の生活の中で何事にも目的をもって意欲的であり、自分は家族や人の役に立つ存在であり、自分がいなければとの自覚をもって生きていく張り合い意識である。さらに何かを達成した、少しでも向上した、人に認めてもらっていると思えるときにも、もてる意識であるといえる」と定義した。</p>

著者 (発表年)	論文名 [雑誌] 巻(号), 頁	目的	生きがいの定義
本田亜起子, 斉藤恵美子, 金川克子, ほか (2003)	一人暮らし高齢者の特性: 年齢および一人暮らしの理由による比較から [日本地域看護学会誌] 5(2), 85-89	一地域の在宅の一人暮らし高齢者全数を分析対象とし, 一人暮らしの前期高齢者(65~74歳)と後期高齢者(75歳以上)の身体的・心理社会的特性を明らかにすること。	特になし
笠原和恵, 鄭漢忠, 上野尚雄, ほか (2003)	自立高齢者の摂食・嚥下障害と生きがい・社会活動性との関連 [日本口腔科学会雑誌] 52(5), 219-226	日常スポーツを実践している自立高齢者を対象に, 口腔状態, 摂食・嚥下機能, 食習慣, 生きがいならびに社会活動性を調査し, それらの関連を明らかにすること。	特になし
齋藤茂子, 江角弘道, 小田美紀子, ほか (2003)	テレビ電話を活用した在宅虚弱高齢者のネットワーク形成過程におけるコーディネーター介入の有効性 [日本在宅ケア学会誌] 6(3), 44-50	介護保険制度の非該当となった在宅虚弱高齢者の生きがいや心理社会的側面の助長を図ることを目的として, コーディネーター介入によるテレビ電話を活用した在宅虚弱高齢者同士14名のネットワーク形成を15か月間試みた。	特になし
古村美津代, 中島洋子 (2003)	健康な高齢者とのふれ合いを通しての実習の学び: 実習記録の分析から [老年看護学] 8(1), 78-85	地域で生活する高齢者とのふれ合いを通して, 高齢者の特性を学生がどう捉え学んだかを明らかにすること。	特になし
直井道子 (2004)	高齢者の生きがいと家族(高齢者の生きがいと家族) [生きがい研究] 10, 20-40	日本の高齢者の生きがいと家族の関係を分析していくこと。	一般論としては生きがいは幸福感の一部といえるが, 高齢者の場合には地の生きがい, 居がいに重心が移るために生きがいと幸福感はかなり重なるものとなっている。

生きがいの測定の仕方	研究参加者・研究対象 [調査方法・研究デザイン]	研究成果・要約
生きがいの有無	I 県 T 町に居住する65歳以上の在宅の一人暮らし高齢者全数を対象者とし、245人から分析対象者が101人(男性20人, 女性81人)となった。 [横断調査研究] (関連要因)	一人暮らしとなった理由で配偶者・家族との死別は死別以外の群(91.2%)と比較して、生きがいをもつ高齢者の割合が76.1%となり、有意に低かった。配偶者や家族との死別により一人暮らしになった高齢者は、それ以外の高齢者と比較して、抑うつ傾向が示唆される高齢者の割合が有意に高く、生きがいをもつ高齢者が有意に少なかった。家族との死別は避けたい出来事であるが、とくに配偶者との死別は高齢者の心身の健康に大きな影響を与え、配偶者と死別後の健康問題を緩和する要因としてソーシャルサポートが重要であることが指摘されている。本研究の結果からも、配偶者や家族と死別して一人暮らしになった高齢者に対する精神的な支援の重要性が示唆された。
改訂版PGCモラールスケール(morale scale)の全17項目(前田ら, 1979)	平成13年現在、北海道 T 町保健センターのバレーボールクラブに参加している65歳以上の高齢者の男女55名と、S 市に在住している剣道愛好家の高齢者(以下、剣道高齢者とする)の男性16名の計71名であった。 [横断調査研究] (関連要因)	71名の生きがい(モラール得点)の平均点は13.3、中央値14と、性別の有意差はなかった。そのうち剣道高齢者では中央値15.0と高いモラール得点であった。摂食・嚥下障害および咀嚼能力は、生きがいと有意な関連を示した。調査対象の自立高齢者では、良く咬めて問題なく飲み込めることが、栄養バランスのとれた良好な食生活を可能とし、それにより健康を維持し社会活動を高め、生きがいにつながっているものと考えられた。
なし	「出雲市生きがい対応型デイサービス事業」の参加者35名のうち、視覚・聴覚が日常生活に支障なく、テレビ電話で交流が可能な高齢者を無作為に抽出し、本人と家族の承諾を得た14例であった。 [実践報告]	デイサービス事業に並行してテレビ電話による新たな高齢者同士のネットワークが形成されることによって、特に友人や社会関係を促進し、生きがいづくりの一端を担うことができると考えられる。在宅虚弱高齢者のネットワーク形成には、対象者全員の状況把握と理解によるコーディネーターが必要であり、コーディネーターがデイサービス事業とテレビ電話活用を並行して役割遂行すれば、在宅虚弱高齢者支援サービスの質の向上に寄与できるであろう。
なし	平成12年度老年看護学実習Iを実施した3年生(111名)。分析対象者は、同一の高齢者大学およびサークル活動に参加した学生の老年看護学実習Iのレポートであり、女性88名、男性8名の計96名である。 [実践報告]	学生の高齢者とのふれ合いを通して感じたこと、学んだことの自由記述を内容分析した結果、「高齢者の健康的側面」「高齢者の特性」「サークル参加時の高齢者の特徴」「社会資源」「老年看護の方向性」「高齢者の健康段階」「イメージの変化」「自分の将来」の8カテゴリーに分類された。「高齢者の健康的側面」では、高齢者の意欲、豊かな経験・価値・信念、生きがいをもっている、強み・英知などの学びの記述が多く、実習の学びを確認できた。
改訂版PGCモラールスケール(morale scale)の全17項目(前田ら, 1979)	夫婦関係の方は山梨県下 K 市に居住する、少なくとも一方が70歳以上の夫婦世帯493組の男女を対象とした郵送留め置き調査である(1997年実施、回収率88.6%)。親子関係についてのデータは東京都(島嶼を除く、1996年実施)と山梨県(1997年実施)で行った面接調査のデータが用いられる。対象者は住民台帳から二段無作為抽出法で選んだ65歳以上の男女である。有効回答率は東京都73.4%、山梨県75.9%、それぞれ881,531を得た。 [横断調査研究] (関連要因)	配偶者を失うことは老後の出来事として非常に大きな生きがい喪失の危機であり、特に1年間はかなり困難な時期を過ごすことがデータから立証された。男女とも配偶者がいないことには子どもとの同居が高齢者の幸福感に寄与していることが読み取れる。男性では配偶者がいる場合、子どもとの別居者の幸福感が有意に高い。すなわち、男性については、子どもとの同居は有配偶の場合と無配偶の場合で反対の効果をもつ。配偶者のいない者にとっては子どもとの同居はやはり幸福感を増大させること。大多数の高齢者の生きがいには、ライフステージに沿って三つの段階が認められる。第一に元氣な前期高齢者の場合には、仕事、友人、余暇活動などがかなり大きな生きがいの源泉となっており、夫婦関係はいわば「地の生きがい」として背景においていられている場合も多い。第二の段階は、仕事や活発な余暇活動からやや引退気味になり、活動範囲が限定されてきた段階である。ここで夫婦関係が改めて「絵の生きがい」に移行し始め、配偶者が「大切な人間関係」となり、しみじみとありがたく思うという感がある。第三段階では配偶者を失ってから初めて淋しさのなかで子どもへの期待が強くなる。

著者 (発表年)	論文名 【雑誌】 巻(号), 頁	目的	生きがいの定義
金子勇 (2004)	高齢者類型ごとの生きがいを求めて 【生きがい研究】 10, 4-18	高齢者研究や高齢社会研究のよりいっそうの前進にとっては、一大勢力となった高齢者層を一定の基準によって分類して、高齢者類型ごとの特性を把握すること。	生きがいを「生きる喜び」として定義した。そのうえで「安定した私生活のなかで、自分を活かし、人生の意味を確認して、自由な関わりとの社会関係をもち、未来への展望が可能だ」と感じる意識状態」とする観点を堅持して、オリジナルな中間的な総括を行った。
藤崎宏子 (2004)	高齢期への移行と「生きがい」(高齢者の生きがいと家族) 【生きがい研究】 10, 41-51	現代の高齢者たちは、どのようなライフコースを歩み、どのような高齢期を生活しているのか。そして、現在の生活のなかでどのような「生きがい」を感じているのだろうか。とりわけ中年期から高齢期へのステージ移行に注目しつつ、そのプロフィールを描き出すこと。	生きがいの「対自的側面」とは、ある対象に無条件に打ち込めるとか、ある状態を快適で好ましいものと感じられるといった、個々人の主観的評価を問題にする。「対他的側面」とは、人々が実際に生きがいと感じるものの多くは他者とのかわりが必要とするという経験的事実に注意を喚起する。
安達正嗣 (2004)	高齢者の生きがいとしての家族・親族・地域関係の再構築(高齢者の生きがいと家族) 【生きがい研究】 10, 52-64	高齢期において家族・親族・地域関係を再構築していくことが、高齢者自身の生きがいとして、さらには現代のような高齢社会にとって、どのように重要なことなのかについて考察すること。	人が生活のなかで生きる意味を見いだすことができれば、生きがいのある人生を過ごしている。また役割取得による高齢者の生きがい形成は活動理論とよばれ、逆に役割から退くことによって精神的な安定を得るという生きがい形成は離脱理論とされている。
井上治代 (2004)	配偶者喪失と核家族の死者祭祀-遺骨との対話が「生きがい」(高齢者の生きがいと家族) 【生きがい研究】 10, 65-84	本研究は配偶者喪失におけるグリーフワークとしての死者祭祀が「生きがい」になっているということを実例に即して論証すること。	「生きがい」は、生きていくはりあり、生きているという実感のこと。
渕田英津子, 安梅勅江 (2004)	保健福祉サービスにおけるエンパワメント環境の整備に関する研究: 訪問面接とグループインタビューによる当事者主体のニーズ把握 【日本保健福祉学会誌】 10(2), 31-40	在宅高齢者が住みなれた環境で、健康で生きがいをもって生活を送ることができる生活条件を当事者のニーズに基づき明らかにすることで、保健福祉サービスにおけるエンパワメント環境の整備のあり方について検討すること。	生きがいや楽しみ

生きがいの測定の仕方	研究参加者・研究対象 [調査方法・研究デザイン]	研究成果・要約
①働くこと, ②家事や家族の世話, ③仲間とおしゃべり, ④学習教養活動, ⑤運動・スポーツ, ⑥ギャンブル, ⑦ボランティア, ⑧家でのおんびり, ⑨趣味活動, ⑩家族団らん, ⑪テレビ・ラジオ, ⑫飲食を程度で尋ねている。	「高齢者の生きがい」について質問紙調査票を利用した計量調査とインタビューに依存した事例研究法の両者を用いて, 多方面から具体的に理解しようとしてきた。2002年の日本健康開発財団の全国調査 [横断調査研究] (関連要因)	「市部・健康・男性」「市部・健康・女性」「町部・健康・女性」「町部・非健康・男性」「町部・非健康・女性」の5類型が「友人交際・趣味活動・ボランティア」が因子1を構成し, 「社会参加」が因子2に属し, 「家族団らん」が因子3に含まれる生きがいパターンをもつ高齢者が一番多かった。「市部・非健康・男性」「町部・健康・男性」が「社会参加」が「友人交際・趣味活動・ボランティア」と一緒になって, 因子1を構成する因子Bグループが検出できた。この場合, 因子2には「家族団らん」がきて, 因子3には再度「友人交際・趣味活動」が含まれ, 因子4に「ギャンブル・ボランティア」が同居するパターンになった。一番複合的な因子構成を示した「市部・非健康・女性」の反応であり, すべての因子項目に融合が認められた。因子1が「社会参加・友人交際・趣味活動・ボランティア」, 因子2は「社会参加・家族団らん」, 因子3も「友人交際・趣味活動・家族団らん」, そして因子4も「ギャンブル・ボランティア」が同居した。すなわち, 従来からの分類項目であった社会参加, 家族団らん, 友人交際, 趣味活動が因子4までに2回ずつ含まれるという複雑さがみてとれた。
なし	筆者がこれまでに行ってきたインタビュー調査の資料 [横断調査研究] (関連要因)	「生きがい」とは, もっと広がりをもつ持続的な感覚であるとして, それを「点」に対する「面」の関係になぞらえて語った。かれらが大切にしている「趣味」も「夫婦関係」も「友人関係」も, 生きがい探求のプロセスを構成する一つの要素とみなすことができるだろう。そして「生きがい」そのものは, こうした一つひとつの要素をとおして自己の存在を意味あるものと感じられる, そのような感覚のなかに潜んでいるのではないかと思われる。
なし	2000年10月の名古屋市郊外にある高蔵寺ニュータウンで高齢期をむかえた夫婦への面接調査の結果から3事例を提示 [横断調査研究] (関連要因)	現在のニュータウンに居住する高齢者が家族・親族・地域関係を再構築している姿は, 都市部のサラリーマン家庭を中心にした膨大な高齢者予備軍である団塊の世代にとっては, 生きがいをもって過ごすための新たな指針を示してくれるものなのである。わが国が超高齢社会を乗りきっていくには, いかにか高齢者が主体となって家族生活や地域生活をつくりなおすことを生きがいにできるのか, さらには高齢者が参加したうえで, IT技術などに対応した支援制度・政策がどのように策定されて, どのくらい的確に実行されていくのかにかかっていると看做しても, 過言ではないであろう。
なし	第二次世界大戦後に故郷から都会へ移動して核家族をつくった人が近年亡くなり, その死者の遺骨でプレートやペンダントをつくって家に置く家族の事例を取り上げ, 伝統儀礼から核家族に親和的な死者祭祀へと移行していく実態 [横断調査研究] (関連要因)	本論文では「死者からのまなざし」「死者との対話」が生きがいで, 配偶者喪失後も故人の遺骨と対話し, 死者となった配偶者との間で夫婦の伴侶性は継続している様子が捉えられた。遺骨は, これまで一緒に暮らした「故人の一部である」という確かな存在感と, その「分配性」「携帯性」において, 夫婦を単位とした核家族の死者祭祀に親和性が生じることは事例研究から明らかになった。
なし	中部地区大都市近郊農村T村在住の健常高齢者39名(男性18名, 女性21名)と虚弱・要介護高齢者54名(男性23名, 女性31名)。2003年7月上旬に調査 [横断調査研究] (関連要因)	訪問調査とグループインタビュー調査の複合分析の結果, 在宅高齢者のエンバウメント環境の整備に向け, 「個の条件」では, 生きがい・楽しみ, 社会貢献の場や機会の活用, 健康な生活への主体的な取り組み, 保健医療福祉サービスの活用, 「相互の条件」では人との交流, 相互支援体制の整備, 「地域システムの条件」では, 安全で安心できる環境の整備, 緊急時の支援システム, 参加型の多種多様な保健福祉サービスの充実などの具体的なエンバウメント環境条件が得られた。

著者 (発表年)	論文名 [雑誌] 巻(号), 頁	目的	生きがいの定義
前田雅也, 佐藤新 (2004)	単身高齢者の抱える問題: 自殺とうつを中心 に [老年精神医学雑誌] 15(2), 162-168	自殺とうつに関連して見いだされる 高齢者の抱える問題を論じること。	特になし
近藤勉, 鎌田次郎 (2004)	高齢者の生きがい感に影響する 性別と年代からみた要因-都市の 老人福祉センター高齢者を対象 として [老年精神医学雑誌] 15(1), 1281-1290	生きがい感にはどのような要因が 影響するのか、しかも、それは性別 や年代によってどのように違うの か、さらに要因の重みについても 検討を行うこと。	生きがい感とは何事にも目的をも って意欲的であり、家族や人の役 に立つ存在であり、自分がいなく ればという自覚をもって生きてい く張り合い意識である。さらに何 かを達成した、向上した、認め てもらったと思えるときにもも てる意識である(近藤・鎌田, 2003)。
柴田博 (2004)	高齢者の長寿・生きがいと豚肉 [日本養豚学会誌] 41(2), 97-99	高齢者の長寿ならびに生きがいと豚肉 について論ずること。	特になし
川本龍一, 吉田理, 土井貴明 (2004)	地域在住高齢者の精神的健康 に関する調査 [日本老年医学会雑誌] 41(1), 92-98	平成10年度から始まった65歳以上 を対象とした地域在住高齢者にお ける健康調査に合わせて平成12 年度は精神的健康に関する横断 的調査を行った。本報告では65 歳以上を65-74歳(高齢前期) 、75-84歳(高齢後期)、85歳 から(超高齢期)の3群の年齢層 に分けて検討し、精神的健康度 と背景的特徴との関係について 興味ある結果が得られたので 報告する。	Not playing a useful partを「 生きがいを感じない」としていた。
岡本秀明 (2004)	在宅高齢女性の高齢期の活動 における活動意向の充足状況に 関連する要因:大阪市内N区 における生きがいづくり委員会 の調査から [社会福祉学] 45(2), 91-99	在宅高齢女性の高齢期における 活動についての活動意向の充足 状況に関連する要因を明らかに すること。	特になし
石橋智昭, 佐久間志保子, 滝波順子, ほか (2004)	ホームヘルパーの就業実態: 都市部の指定訪問介護事業 従事者 [厚生指標] 51(1), 7-11	都市部の一自治体において訪問 介護事業に従事するヘルパーを 対象に調査を行い、介護保険 施行後のホームヘルパーの 就業実態を明らかにすること。	特になし

生きがいの測定の仕方	研究参加者・研究対象 [調査方法・研究デザイン]	研究成果・要約
なし	厚生労働省の人口動態統計から得た数値 [論考]	わが国の自殺死亡者数全体に占める高齢者の割合は約25% (7,500人)と依然として高率である。少なからぬ高齢者が慢性的な身体疾患、うつ病、喪失体験や孤独感に悩んでおり、単身高齢者では加えて役割意識の希薄化、生きがいの喪失も起こりやすい。身体問題、うつ病、社会・環境的問題、心理的問題といったさまざまな問題に多面的に対応することが高齢者の自殺予防につながるが、その際に単身高齢者の増加を念頭に適切な対応が必要である。
近藤・鎌田(2003)が作成した「高齢者向け生きがい感スケール(K-I式)」	1999年7月上旬、大阪府下都市部に位置する老人福祉センター3か所にて391人(男性190人、女性201人、平均年齢72.96歳(SD=7.77))。 [横断調査研究] (関連要因)	全年代男女全体には、80歳以上の回答者が少なかったことにより、60歳以上で平均年齢72.96歳(SD=7.77)の老人福祉センター来所者の傾向としてとらえることができる。この平均的傾向として、外向性得点の高さが最も強い説明変数として現れた。男性では退職後に職場や仕事上の人間関係から離れ、女性では配偶者の喪失を体験する時期には、外向性の高さによって新しい人間関係を得られることが生きがい感を保つうえで重要な点であろう。実際、配偶者や友人の有無も、生きがい感得点の重要な説明変数として現れたが、喪失の時代であるこの時期には、新しい人間関係を得るために外向的性格が重要な要因となるのであろう。男女とも人間関係喪失の時代であるがゆえに、女性は友人を得て何らかの活動を続けられること、男性は熱意を向けられる活動をさらに年齢を重ねた後に見つけられることが最後には重要となるようである。そして、おそらくこれが達成できるためにも、外向的性格が男女とも重要であることはまちがいないようである。
なし	特になし [論考]	長寿のためにも心の健康のためにも、魚に近い量の肉類を摂取することは必須である。日本人の脳卒中の減少と、それともなう寿命の伸延にもっとも貢献したのは食肉である。
General Health Questionnaire12 (GHQ-12)	野村町は、愛媛県西南部の山間地域に位置し農林業を主産業とする人口11,561人(1999年7月現在)、うち65歳以上は3,432人(29.7%) (65-74歳:高齢前期1,983人(17.2%), 75-84歳:高齢後期1,119人(9.7%), 85歳~:超高齢期330人(2.9%))の町である。対象は、1999年7月の住民基本台帳から得られた65歳以上の町内在住者。 [横断調査研究] (関連要因)	GHQ-12の「集中できない」「生きがいを感じない」「物事を決定できない」「問題を解決できない」「生活が楽しくない」「問題に積極的に取り組めない」「自信を失うことがある」「役立たずと考えたことがある」といった項目では年齢層が高いほど肯定頻度が高かった(各々 $p < 0.01$)。
なし	大阪市N区に居住する2002年10月から2003年5月までの期間に調査を実施して、最終的に調査協力が得られた計375人の65歳以上の女性。最終的な分析対象者は249人となった。 [横断調査研究] (関連要因)	第1に、社会的活動や学習活動と比較して散歩や運動についての活動意向は充足されやすい傾向がみられた。第2に、活動に関する情報を知らない者は社会的活動や学習活動における活動意向が充足されにくく、また、活動に関する情報をもっと知りたいという意識が低い者は学習活動における活動意向が充足されにくかった。
なし	東京都町田市内の指定訪問介護事業所27か所に在籍し就業中のすべてのホームヘルパー1,264人を対象として、1,068人から回答を得た(回収率84.5%)。 [横断調査研究] (関連要因)	現在の就業理由(択一)では、「生きがい・社会参加のため」が37.9%と最も多く、収入を目的とした「家計の足しにするため」と「生活費のため」は合わせて36.5%にとどまった。パート(社保あり)と常勤では半数近くが収入を目的としていたのに対して、登録型とパート(社保なし)では3割に留まり、「生きがい・社会参加のため」を選ぶものが多かった。

著者 (発表年)	論文名 〔雑誌〕 巻(号), 頁	目的	生きがいの定義
藤本 弘一 郎, 岡田克 俊, 泉俊男, ほか (2004)	地域在住高齢者の生きがいを規定する要因についての研究 〔厚生指標〕 51(4), 24-32	地域在住高齢者の生きがいを規定する要因を明らかにし, 充実した高齢者の生きがいづくりを行っていくための基礎的な知見を得ること。	生きがいについては, 「生活に『生きがい』や『はり』がありますか」と尋ねた。
蘇珍伊, 林 曉淵, 安壽 山, ほか (2004)	大都市に居住している在宅高齢者の生きがい感に関連する要因 〔厚生指標〕 51(13), 1-6	大都市に居住している在宅高齢者の生きがい感の現状を調査・把握し, 生きがい感に影響を与えている様々な要因を明らかにすること。	生きがい感を「人生にかかわって生きる生きるよるこびや生存充実感といった心の状態であり, また, その心の状態をもたらす対象から得られる感情」と定義し, これを「個人の心の充実としての生きがい感」および「充実感を与える事柄を通じての生きがい感」の2つに概念化してとらえることにした。
鈴木修治, 畑山明美, 横田節子, ほか (2004)	仙台市宮城野区内T地区における独居高齢者の健康と生活実態に関する調査 〔厚生指標〕 51(13), 33-37	高齢化が顕著となった大都市の住宅団地において, 必ずしも明確にされていない高齢者の身体状況や家庭と地域社会における生活の実態を明らかにし, 高齢者の健康づくりや生活の質の向上を図る事業展開を考えるために, ひとり暮らし高齢者世帯を調査して日常生活活動や家庭および社会環境についての実態を把握すること。	特になし
蘭 牟田 洋 美, 安村誠 司, 阿彦忠 之 (2004)	準寝たきり高齢者の自立度と心理的QOLの向上を目指したLife Reviewによる介入プログラムの試行とその効果 〔日本公衆衛生雑誌〕 51(7), 471-482	準寝たきり高齢者の自立度と心理的QOLを向上させるために, Life Reviewを用いた介入プログラムを試行し, その評価を行うこと。	特になし
和田修一 (2004)	高齢者の生きがいと経済(特集現代社会における社会保障制度) 〔都市問題研究〕 56(1), 48-60	「高齢者の生きがい」という視点から高齢者と経済の関わりについて述べてみたい。	生きがいの本質は心理的満足とは異なってひとびとの意識あるいは精神の働きに属する事象であり(反省作用の意識対象である), それは個人に内面化された社会的意味世界(「生活世界」とも呼ばれる)における人生の意味的位置付けを内容とする意識である。

生きがいの測定の仕方	研究参加者・研究対象 [調査方法・研究デザイン]	研究成果・要約
「5)非常にある」「4)ある」「3)ふつう」「2)ない」「1)はつきり言えない」のいずれかを選択してもらった。5と4を便宜的に「生きがいを持つ」群とし、3、2と1を便宜的に「生きがいを持たない」群とした。また古谷野(1989)が作成した「生活満足度尺度K」と生きがいを持っている群と持っていない群を合わせて尋ねている。	愛媛県重信町の60歳以上の住民5,660人を対象とする生活実態調査を行い、対象者本人から回答が得られ、かつ、調査時点で寝たきりでなかった4,081人であった。 [横断調査研究] (関連要因)	男性では、職業があること、主観的健康感が良好であること、運動やスポーツを実施していること、保健行動を多く行っていること、同居家族以外の情緒的サポート得点が高いこと、生活満足度尺度K得点(LSIK)が高いこと、健康ボランティアへの参加意志があること。女性では、低年齢であること、主観的健康感が良好であること、老年用うつスケール得点が高いこと、よく眠れること、運動やスポーツを実施していること、同居家族内情緒的サポート得点が高いこと、LSIK得点が高いこと、健康ボランティアへの参加意志があることであった。
生きがい感については、4項目を設定した。1)生きがいを感じて生活していると思う。2)今までで人生で得ることが多かったと思う。3)何事に対しても積極的に取り組んでいこうと思う。4)毎日やることがたくさんあると思う。回答選択肢は、「かなりそう思う」(4点)から「ほとんどそう思わない」(1点)までの4点尺度とし、合計得点を生きがい感(信頼性係数 $\alpha=0.74$)とした。	大阪市A区に居住している65歳以上の高齢者選挙人名簿(2002年版)から1,000人を無作為に抽出した。調査期間は、2003年2月18日から3月12日までとなり、質問紙の回収数は、627通(有効回答率62.7%)であった。 [横断調査研究] (関連要因)	都市在宅高齢者の生きがい感は、第1に、社会参加、世代間の交流、サポートの提供といった人々とのかかわりの中で生じやすいものであることがうかがえた。人とのかかわりの中で自己の役割を明確に位置づけることができ、その中で何をなすべきかについて自覚できる状況にあるとき、高齢者は、充実感をもち、生きがいを感じることができると考えられる。第2に、心身が健康であり、経済的にも安定した状況にあるとき、高齢者は充実した高齢期を送っていると実感することができると考えられる。
なし	仙台市宮城野区内の住宅団地T地区に居住している65歳以上でひとり暮らしの667名の対象者中、465名(69.7%)から回答を得た。 [横断調査研究] (関連要因)	高齢者の健康寿命を延ばし、QOLの向上を図っていくために、介護予防や生活支援の観点で健康と生きがいづくりを考慮した事業の実践が大変に重要であり、身体的活動と精神的あるいは心理的状态との総合的な向上を目標とする必要があると考える。
生きがいの有無	山形県内2市2地区在住の65歳以上の住民を対象とした調査をベースにして、介入対象者を各市別に無作為に性と年齢(±3歳)をマッチさせた結果、男性9人と女性14人、計23人が介入調査群(以下、介入群と略す)に、同数の男女が対照群に割り付けられた。介入群への介入は1999年の8月から開始した。 [介入・プログラム研究]	介入群に計6回の介入プログラムを実施した。その結果、介入による身体・心理・社会的側面に有意な効果は認められなかった。しかし、今回用いたLife Reviewという心理的技法は今回とりあげた身体・心理・社会的特徴に対してマイナスの影響はもたらさないことが示され、今後、地域におけるこの介入プログラムの実行可能性が示された。なお介入群は対照群と比べて、聴力、ADLの食事、着脱衣、物忘れ、主観的健康感、生きがい、認知症の判定基準において維持・改善の割合が高率であった(いずれも統計的な有意差は認めない)。
なし	特になし 論考	個人高齢者の生きがい視点からすると、高齢者は年金に依存しながら自律的な生活を営むという一種のパラドクスをどう解決するかが問題点である。その解としては、老後の経済生活を支える中核には年金が当てられるとしても、なにがしかの所得をとまなう(あるいはそれと同等の)社会参加をとまなう活動が生きがいのある生活を支える上で重要な意味を持つように思われるのである。

著者 (発表年)	論文名 〔雑誌〕 巻(号), 頁	目的	生きがいの定義
二宮一枝, 難波峰子, 北園明江, ほか (2004)	中山間地域における中 高年の地域活動と定住 願望・生きがいとの関 係 〔日本地域看護学会誌〕 7(1), 75-80	中山間地域のA町に在住する中高年の 地域活動について勤労, 生きがいおよ び定住願望との関係を明らかにするこ と。	特になし
古田加代 子, 流石ゆ り子, 伊藤 康児 (2004)	在宅高齢者の外出頻度 に関連する要因の検討 〔老年看護学〕 9(1), 12-20	高齢者が「閉じこもり」に至る経過の 中で, 外出頻度が少なくなることに着 目し, 障害老人の日常生活自立度判定 基準(厚生労働省)の「ランク」に 該当するが, 相対的に外出頻度が週2 ~3回以下と少ない, いわゆる「閉じ こもり」予備軍において, その特徴的 な身体・社会的要因および心理的要因 を総合的に検討すること。	特になし
流石ゆり 子, 亀山直 子 (2004)	『健康高齢者実習』の 意義: 学生の実習終了 後レポートの分析に よる学習内容の検討 〔老年看護学〕 9(1), 65-75	『健康高齢者実習』終了後レポートに おける学生の学習内容を分析し, 実習 の意義と今後の課題について明らかに すること。	特になし
松岡昌則 (2005)	農村高齢者の楽しみと 地域の社会関係-秋田 県山本郡藤里町米田地 区の事例(研究発表, 高 齢者の生きがいと地域 社会) 〔生きがい研究〕 11, 22-40	過疎山村における高齢者の日々の楽し みと, それをつくり出している地域社 会関係との関連を探ること。	生きがいの場面や契機については, 高齢者の日常生活における楽しみや 満足, そして安心の重層した構造と して捉える。
森谷健 (2005)	高齢者の地域社会関与 と老人をめぐる信念 (研究発表, 高齢者の 生きがいと地域社会) 〔生きがい研究〕 11, 41-55	高齢者の地域社会への関与態度を, 群 馬県高齢者のデータも交えて考察し, 地域社会への関与を阻害している老人 をめぐる信念について検討すること。	役割を保持することが生きがいに通 じるとした。

生きがいの測定の仕方	研究参加者・研究対象 [調査方法・研究デザイン]	研究成果・要約
「仕事、子ども・孫の成長、家族との団らん、友人・近所づきあい、学習・教養、趣味、スポーツ、旅行、地域活動、ボランティア活動」が生きがいとなるか否か	中山間地域のA町に在住し、平成14(2002)年10月1日時点で40から64歳の全住民1,801名である。性別は男性907名(50.4%)、女性894名(49.6%)である。 [横断調査研究] (関連要因)	中山間地域の中高齢の7割が地域活動に参加し、「住み続けたい」という定住願望を有していた。生きがいの第1位が男女とも「仕事」であることは特徴であった。今後は、趣味やスポーツなど、多様な生きがい形成を考慮した中高年の健康づくりを推進する必要がある。
「(日常生活の中で)今、生きがいはありますか」と「ある」(3点)、「まあある」(2点)、「ほとんどない」(1点)と尋ねた。また古谷野(1996)が作成した「生活満足度尺度K」を合わせて尋ねていた。	A県T市の在宅虚弱高齢者を対象とした地区ごとで開催される自立支援事業や、地域参加型機能訓練事業に参加している高齢者である。今回は市の中心部と山村部から、計9地区を偏りのないように選定した。調査期間は平成14(2002)年8月から平成15(2003)年5月まで [横断調査研究] (関連要因)	単変量では、外出頻度が多い(ほぼ毎日外出)群のほうが、そうでない群に比べ、有意に生きがい得点が高くなっていた(p=0.009)。しかし多重ロジスティックで外出頻度を従属変数とした場合、生きがいは除外され、「外出サポートの有無」「役割意識の高低」の2変数が残った。とはいえ、「生きがい」が外出頻度に関連する結果となった。人によって生きがいの内容はさまざまであるが、生きがいがあると回答した者は、人との交流や自分を刺激する機会をもち、外出する機会を作っていると考えられる。よって、高齢者が生きがいをもつような支援策を考えていくことも必要だと考える。役割意識が「生きがい」を生み、また、現在の体調が良いと感じるからこそ、人の役に立つことができるという役割意識が芽生えるとも考えられ、これらの心理的要因には、相互の関連性が強いと予想される。その結果、「役割意識」がこれらの要素を代表したと捉えることもできる。
なし	平成15年度「健康高齢者実習」を終了した看護系大学2年生47名が作成した実習終了後のレポートである。47名全員から研究協力が得られた(回収率100%)。 [実践報告]	地域での健康高齢者を対象とする実習からの学びに関連する学習内容の記述は「高齢者の生きがいと健康の秘訣」「高齢者・老年期の特性」「高齢者支援システム」「高齢者支援のポイント」「イメージの変化」「高齢者の豊富な経験知に感動」他5つあり、計11のカテゴリーに分類された。また高齢者疑似体験からの学びに関連する記述内容は「高齢者の特性の理解」「老年期の生き方の基本姿勢」「生きるうえで大切な家族や周囲のサポート」「高齢者援助の基本姿勢」「新たな高齢者イメージの獲得」他2つの、計7カテゴリーに分類できた。
なし	秋田県山本郡藤里町米田地区は、2002年現在173戸、男306人、女320人、計626人の地区である。高齢化率(2003年1月現在)は35.2%で町の平均を多少上回っている。一人暮らしは15人、高齢者世帯が18である。 [横断調査研究] (関連要因)	高齢者は普通の日々のなかにも楽しみを見いだしている。同調査で高齢者の楽しい生活場面を聞くと、延べの人数であるが、もっとも多いのが家族に関するものである。孫と過ごすとき、孫の成長、孫のスポーツ大会が11人、孫が来たとき、子や孫が来たときが12人、団らん、家族との食事、夫との話、夫婦で旅行や温泉が8人となっている。次いで田や畑に関するもので、畑作業、農業、田の仕事、作業が終わったとき、収穫、子どもに野菜を送るときが11人と高齢者ににおける農作業のもつ大きさをうかがわせている。そして地区や集落の行事と仲間、友人、近所がくるときである。高齢者の楽しみ方の見出し方一人でもできるときというのは、農作業や炭焼き、仕事という何かに打ち込んでいるときの充実感であろう。しかし多くの高齢者は、家族や日常の近隣交際、仲間との活動に楽しいときを感じている。高齢者が楽しく住み続けることのできる地域社会をつくるために、要援護者のみならず、地域に暮らす高齢者の日常生活を補完するシステムを総合的な視点から確立することが求められている。
なし	NHK放送文化研究所の1998年に調査された「現代日本人の意識構造」(第5版)と上毛新聞社・2004年11月に調査をした群馬大学社会学部地域研究会による20歳以上の群馬県民世論調査 [文献調査]	老人に対して、社会はどのような態度をとり、どのような信念を抱くかは、老人の身体状況や生きてきた時代に制約された彼らの知識・技能の状態に直接由来するものではなく、それらを非高齢者が評価した結果である。高齢者が相互行為場面において文脈から乖離した奇異な言動をとるとき、「認知症老人」と評価することができるが、「神と交信できる偉大な者」と評価することもできるだろう。高齢者の技術を「時代遅れの使い物にならない技術」と評価することができるが、「過去の貴重な遺産」と評価することもできる。役割を保持することが生きがいに通じるとした場合、高齢者にとって地域社会がその舞台となることが考えられた。しかも、高齢者は、地域社会に関与する態度を、少なくとも群馬県内のデータでは有していた。そして、その関与は、第2の生活様式の成立を支持すると考えられた。

著者 (発表年)	論文名 [雑誌] 巻(号), 頁	目的	生きがいの定義
浅川達人 (2005)	女性高齢者と地域社会 (研究発表 高齢者の 生きがいと地域社会) [生きがい研究] 11, 56-77	女性高齢者の近隣関係を分析すること によって、女性高齢者が地域社会でど のような社会関係を構築しているのか を明らかにすること。	特になし
木下征彦 (2005)	地域社会における 「老・壮・青」の協働 と高齢者の生きがいー 群馬桐生市の文化伝 承プロジェクト「新・ あすへの遺産」を事例 として(研究発表 高 齢者の生きがいと地域 社会) [生きがい研究] 11, 78-104	地域社会におけるコミュニティ的な人 間関係のネットワークは高齢者の生き がいにどのようにつながるかが本稿の 問題意識であり、そのために、地域社 会における新たなネットワークと高齢 者の生きがいづくりに取り組む活動事 例を検討し、その成果と意義を整理す ること。	生きがいを「人々の生を意味づける もの」とひとまず規定する。
デーケン, アルフォン ス (2005)	高齢者の生きがいと ユーモア [老年歯科医学] 20(2), 107-112	平均寿命の延長につれて、定年退職後 20年あるいは30年間も生きる時代に入 り、いかに意味ある老年期をおくる か、人生の3分の1を占めるこの期間 に何が生きがいとなりうるかという テーマで、人生に深く寄与するユー モアの役割についてもふれて、考えるこ と。	生きがいを通して真の成熟への道を 探求したい。
野村千文 (2005)	「高齢者の生きがい」 の概念分析 [日本看護科学会誌] 25(3), 61-66	「高齢者の生きがい」の概念の用法に ついて分析し概念の構造を明確化する ことで、看護学をはじめ各分野での高 齢者支援対策の実践や研究における有 用性を検討すること。	「生きがい」「高齢者(65歳以上)」「 IKIGAI」「Worth Living」をキー ワードとして検索した。

生きがいの測定の仕方	研究参加者・研究対象 [調査方法・研究デザイン]	研究成果・要約
なし	<p>(地方都市) 1999年度から3年間にわたり、岐阜県中津川市と同市にある三菱電機中津川製作所をフィールドとして実施された。調査は、2001年5～6月に、中津川市に居住する60～79歳の高齢者のうち無作為に抽出した1,000名(一般)と三電中津川の退職者(OB)478名を対象に、有効回収率は一般調査で79.1%、OB調査では88.1%であった。(大都市郊外) 2004(平成16)年9月に横浜市青葉区あざみ野と川崎市宮前区菅生に居住する30歳以上の女性より無作為に抽出した400人を対象にし、有効回収率は、あざみ野126票、菅生119票の計245票であり、有効回収率は61.3%であった。2004(平成16)年9月調査実施 [横断調査研究] (関連要因)</p>	<p>①地方都市よりも大都市郊外の方が、近隣関係は稠密であることが示された。また、②近隣関係は、居住年数にも左右されるが、それ以上に、その地に暮らし始めた世代によっても規定されることが示唆された。</p>
なし	<p>2002年度から始まった群馬県桐生市をフィールドとする「新・あすへの遺産」プロジェクトという桐生市老人クラブ連合会、特定非営利活動法人桐生地域情報ネットワークとそこに集う大学生たち(群馬大学工学部を中心とした学生)の「老・壮・青」多世代協働による地域の文化伝承・記録のプロジェクトであった。 [実践報告]</p>	<p>「新・あすへの遺産」プロジェクトを検討し、コミュニティ・アーカイブズを通じた多世代の協働による共同性の紡ぎ出しが、地域において顔の見える人間関係「新しい隣組」を作り出すことで、高齢者の生きがいづくりを後押ししているプロセスを認めた。</p>
なし	<p>特になし [論考]</p>	<p>生きがいを持って心豊かに生きるために大切なのは、ユーモア感覚を磨くこと。ユーモアの役割を今一度、すべての人に見直してほしい。</p>
なし	<p>近年の高齢者の生きがいに関する研究の動向を踏まえ分析を行うため、国内文献は1980年以降2003年までの原著論文22件と書籍類11件、海外文献は書籍1件の合計34件を対象とした。 [文献調査]</p>	<p>1.「高齢者の生きがい」の概念の属性には、「生きるために見出す意味や価値」と「生きることに對する内省的で肯定的な感情」が抽出される。よって、「高齢者の生きがい」とは「高齢者が生きるために見出す意味や目的、価値であり、生きることに對する内省的で肯定的な感情の創出により実感される」と定義される。2.「高齢者の生きがい」の概念の先行要件には、「生きがいを追求する内在的な力」と「生きがいの源泉・対象」があり、生きがいを獲得することで、精神の安寧、継続させるための行動、生活のほりあいや活力等に帰結する。3.「高齢者の生きがい」の概念の観察資料には、「生きがいの源泉・対象」ならびに「生きがい感」を測定する方法がある。4.高齢者は生きがいを喪失しやすいものの再獲得できる力をもつことから、看護をはじめ各分野での高齢者支援対策に、「高齢者の生きがい」の概念を活用することは有用であると考えられる。</p>

著者 (発表年)	論文名 [雑誌] 巻(号), 頁	目的	生きがいの定義
高橋正実, 井出訓 (2005)	スピリチュアリティの 意味:若・中・高齢 者の3世代比較による 霊性・精神性について の分析 [老年社会科学] 26(3), 296-307	わが国の高齢者がスピリチュアリティ(精神性・霊性)をどのようにとらえているのかを明らかにすること。また9つのキーワード(宗教的である, 信念がある, 知識がある, 精神的・霊的である, 思いやりがある, 知恵・叡智がある, 超越的である, 生きがいがある, 苦難の経験がある)を手がかりに, 世代の違う人々がどのように言葉の意味合いを関連づけているかを分析すること。	特になし
長谷川明 弘・星旦二 (2005)	都市近郊在宅高齢者 における「生きがい」と 関連要因 [日本ケアマネジャー 学会誌] 3, 58-67	大都市近郊ニュータウン地域に居住する高齢者の「生きがい」の有無の関連要因を身体面, 心理面, 生活機能ならびに社会活動性をあわせた総合的観点から性別, 世代別にその特徴を明らかにすること。	PGCモラルスケールをはじめとする主観的幸福感を広義の「生きがい」の概念に含めて論じていく。
竹田徳則, 近藤克則, 吉井清子, ほか (2005)	居宅高齢者の趣味 生きがい-作業療法士 による介護予防への 手がかりとして [総合リハビリテー ション] 33(5), 469-476	作業療法士が居宅高齢者を対象とした介護予防事業に寄与する意義と課題を明らかにするために, 趣味や生きがいに関する地域横断調査データを分析した。	生きがいを趣味と同等に捉えていた可能性がある。生きがいとしている趣味的な活動, 水墨画の制作の継続を支援し, 発表の機会を設定し, 目標に向かって意欲的に行えるよう励ましていく事にした。

生きがいの測定の仕方	研究参加者・研究対象 〔調査方法・研究デザイン〕	研究成果・要約
なし	調査ボランティアに応じたS市内の大学生(若年群n=53)と、その父母(中年群n=61)、祖父母(高齢群n=40)のいずれかである。宗教などの従属変数をコントロールする意味で3世代の肉親にしかっての選出を試みた。調査票は、学生ボランティアとして応じた90人に、父母、祖父母への郵送分を含めた合計270部を配布した。回収数は156部(57.8%)であり、うち不完全票は2部であった。 〔横断調査研究〕 (関連要因)	若年群では「精神的 霊的、宗教的」という言葉が、存在意義的な意味合いが強いと考えられる「生きがいがある」「信念がある」と密接なつながりをもって示された。中・高齢群ではこの関係が薄れていった。また高齢群では「精神的/霊的」と「宗教的」の意味合いに距離がおかれ、「超越的」という言葉が「精神的 霊的、宗教的」のクラスターから分化する結果となった。これらことは、わが国の高齢者がスピリチュアリティと宗教性を同一視せず、他の世代よりも具体的な概念としてとらえていることの結果であると考えられた。
生きがいの有無	2001年1月1日現在埼玉県H町のニュータウン区域に在住する65歳以上の全高齢者1,213名を対象とし、1,002名から回答が得られ(応答率82.6%)、「生きがい」の有無に対する回答に不備のなかった967名(男447名;女520名)を分析対象とした。 〔横断調査研究〕 (関連要因)	都市近郊地域に居住する高齢者の「生きがい」の有無について関連要因を検討し、総合的な観点から性別や世代による特徴を示すことができた。男性の前期高齢者には入院や転倒の経験といった身体状況が「生きがいあり」と負の関連を有する可能性が示唆され、さらに社会活動性の中の近所や友人づきあいの頻度の高さと正の関連を認めた。男性の後期高齢者は社会活動性の中の集団活動への参加の高さと正の関連を認めた。また性別や世代を問わず高齢者用うつ尺度(GDS)の得点が高くなる、つまり心理状況の中のうつ状態が強まると「生きがいあり」との間に負の関連を有することも示された。社会活動性に関して男性の後期高齢者、男女をあわせた全体において地域での町内会や老人会の活動を中心にした集団活動に参加することと正の関連を認めた。また男性の前期高齢者と男女をあわせた全体において、「生きがいあり」の場合に、近所づきあいや友人との交流との間に正の関連を認めた。
生きがいや趣味の有無	名古屋から電車や車で一時間ほどに位置する愛知県知多圏域のA町65歳以上の全居宅高齢者4,994名(2000年1月時点)を対象にして、回答が3,596名(回収率72.0%)から得られた。内訳は、男性が1,506名(41.9%)、女性が1,745名(48.5%)、不明が345名(9.6%)、平均年齢は72.6±6.1歳であった。 〔横断調査研究〕 (関連要因)	趣味や生きがいとして挙げられたのは、自然に関与する活動(花の栽培、家庭菜園、旅行、グランドゴルフ、読書、書道・習字、釣りなど)と仕事・社会貢献活動(畑仕事、仕事、ボランティア、庭仕事)であった。趣味や生きがいの「ある」高齢者は、「ない」者に比べ、生活満足度や主観的健康感、主観的幸福感が有意に「高く」、うつやうつ傾向が有意に「少なく」、元気づけや気遣いしてくれる者が有意に「多く」、心理・社会的なQOLとの関連が大きかった。

著者 (発表年)	論文名 [雑誌] 巻(号), 頁	目的	生きがいの定義
堀内敏行, 小林義雄, 細井孝之, ほか (2005)	骨粗鬆症患者における QOL尺度の信頼性, 妥当性の検討:EO- QOLによる高齢骨粗 鬆症QOL評価 [日本老年医学会雑誌] 42(2), 229-234	高齢者の骨粗鬆症患者のQOL評価を 可能とする評価表 (Elderly Osteo- porotics's QOL; EOQOL) 作成を試 みること。	特になし
後藤康彰, 金子勇, 坂野達郎, ほか (2005)	高齢者の「日常生活活 動における関心の志向 性」尺度作成の試み [日本公衆衛生雑誌] 52(3), 246-256	高齢者が日常生活において、どのよう なことにどの程度関心を持って活動を 行っているかについて評価構造を検討 し、尺度の構成を試みること。	特になし
中俣和幸, 相星壮吾, 西宣行, ほか (2005)	うつ1次スクリーニン グにおける「初期陽性 反応」と「1次陽性確 定」との比較・検討 [厚生指標] 52(7), 14-20	基本健康診査の場を活用して実施した うつスクリーニングは受診者数が最も 多い。基本健診での状況を分析するこ とが最も有用であると考え、性・年齢 別の分析と各設問の回答状況の分析を 行うこと。	特になし
島貫秀樹, 植木章三, 伊藤常久, ほか (2005)	転倒予防活動事業にお ける高齢推進リーダー の特性に関する研究 [日本公衆衛生雑誌] 52(9), 802-808	転倒予防活動プログラムに参加希望し た高齢推進リーダーの特性について明 らかにすること。	特になし

生きがいの測定の仕方	研究参加者・研究対象 [調査方法・研究デザイン]	研究成果・要約
<p>生き甲斐への影響を評価した。あなたの楽しみにしていることや生きがいは何ですか？いくつでもお答え下さい。1)健康であること, 2)旅行や外出をすること, 3)家族とだんらんすること, 4)趣味やごらくを楽しむこと, 5)友人・知人と交際すること, 6)その他(料理等), 7)特になし</p> <p>あなたが最も大切にされている楽しみや生きがいには、今どのくらい満足されていますか？ 1)最高に満足している, 2)かなり満足している, 3)満足している, 4)少しだけ満足している, 5)全く満足していない</p>	<p>慢性期の圧迫骨折がある骨粗鬆症患者101名(男2名, 女99名)および圧迫骨折発症2週間以内の急性期の骨粗鬆症患者30名(男4名, 女26名)それぞれの、慢性期骨粗鬆症患者では平均年齢は73.5±6.8歳, 平均体重は45.6±7.8kg, 平均身長は145.7±6.1cmであり, 急性期では79.6±7.3歳, 45.5±7.9kg, 149.7±7.8cmであった。 [尺度構成]</p>	<p>各下位尺度の信頼性を示すα係数は、いずれの下位尺度についてもα係数の値が0.7以上の十分な信頼性が確認された。また、妥当性検討の環として、急性期の患者と慢性期の患者の各得点の平均値を比較したところ、感情的な気分や不安については2群の間には有意な差異は見られなかったが、痛み、動作の制限、移動の制限、生理的行動の制限、義務的行動の制限、余暇的行動の制限、生活の満足度の各下位尺度において、両群に統計的有意差が見られた(p<0.05)。</p>
なし	<p>全国20の市区町村に居住する65歳以上の男女であり、1市区町村あたり約300人、合計6,094人を無作為抽出した。2000年9月～11月に実施。 [横断調査研究] (関連要因)</p>	<p>「家族と一緒に楽しめる」「身体を動かす」「家族の役に立つ」「友人と一緒に楽しめる」「自然と親しむ」では、「非常に重要」「重要である」とする回答比率が90%以上であった。年齢群・性別に共通する4つの因子を抽出し、それぞれ「人間交流志向」「自己実現志向」「社会的認知志向」「安楽悠々志向」と命名して、16項目で関心の志向性尺度を構成した。本尺度は高齢者個々の関心の志向性を把握することに役立つとともに、高齢者が参加しやすい生きがい活動や社会活動プログラムづくりを考える上での参考に寄与することが期待された。</p>
なし	<p>鹿児島県内の市町村において平成14～15年度に基本健診の場を活用してうつスクリーニングを実施した中の受診者5,492人とした。 [横断調査研究] (因果関係)</p>	<p>全体の「1次陽性確定率」は7.1%で、性・年齢別では4.8%から13.6%までの幅があった。40歳代・50歳代を除いた年代で、陽性者率は女性の方が男性よりも高かった。男女ともに年齢が増すにつれて陽性者率は低下する傾向が認められた。うつスクリーニングの8調査項目ごとの「初期陽性反応率」は1.3%から20.2%の範囲であった。特に高かった項目は、「自分は役に立つ人間だと考えることができない」(20.2%)で、「以前は楽にできていたことが、今ではおっくうに感じられる」(19.4%)と続いていた。8項目すべてによる総合的な評価である「1次陽性確定率」の評価と共に、各設問ごとの「初期陽性反応率」を求めることにより、より詳しい「このころの健康」状態の把握が可能となると考えられた。性・年代によって「生きがい維持を主としたアプローチ」「身体機能維持を主としたアプローチ」などを適宜組み合わせるプログラムを企画するなどの工夫が、対策を考える際により効果的であろうとの示唆を得た。</p>
<p>近藤・鎌田(2003)が作成した「高齢者向け生きがい感スケール(K-I式)」</p>	<p>宮城県の北部に位置する米山町に居住する70～84歳に限定した1,867人であった。調査対象者は、このうち介護保険の要支援・要介護認定者を除く1,709人であった。2003年8月から9月に調査が行われた。 [横断調査研究] (関連要因)</p>	<p>転倒予防推進リーダーのような高齢者は、地域の介護予防の担い手としてのマンパワーや参加者自身の健康の維持および増進を目的としてさらに注目されると考えられる。本研究では、男性であることや年齢が若いこと、さらに人生に対する前向きな態度や姿勢で表される高次の生活機能を維持し、主観的に健康であり、さらに生きがい感が高いことが参加希望を促す要因であることが示唆された。</p>

著者 (発表年)	論文名 〔雑誌〕 巻(号), 頁	目的	生きがいの定義
佐藤眞一 (2006)	団塊世代の退職と生きがい 〔日本労働研究雑誌〕 550, 83-93	団塊世代を含む中高年期を対象として実施された各種調査データに基づいて、彼らの退職前後の生きがいに関連した生活実態と意向を検討すること。	特になし
岡本秀明, 白澤政和 (2006)	農村部高齢者の社会活動における活動参加意向の充足状況に関連する要因 〔日本在宅ケア学会誌〕 10(1), 29-38	農村部在宅高齢者を対象に、社会活動への活動参加意向が充足されているかどうかに関連する要因を検討すること。	生きがいを趣味と同等に捉えていた可能性がある。
小川弘美 (2006)	入所後より出現した被害妄想的言動により、他入居者とトラブルが生じた事例 〔高齢者のケアと行動科学〕 11(2), 1-7	ADLが自立した対象者の被害妄想的言動、他入居者とのトラブルから日常生活に支障をきたす大きな問題へ発展してしまった事例を検討すること。	生きがいを趣味と同等に捉えていた可能性がある。
伊熊克己, 鈴木一央, 長屋昭義, ほか (2006)	高齢者のスポーツ活動と健康・生きがいに関する研究-北海道K市の老人クラブ会員を事例として 〔運動とスポーツの科学〕 12(1), 87-99	老人クラブ会員を対象に、一つには、高齢者がどのような健康生活の中でスポーツ活動を行っているのか、その実態を把握することであり、二つ目には、高齢者のスポーツ活動が高齢者の体力感や健康状況、生きがいにどのような影響を及ぼしているのかを明らかにし、今後の高齢者の運動・スポーツのあり方を検討するための基礎資料を得ること。	「生きがい」という言葉の定義や概念を統一することは困難であるが、長谷川ら (2003b) は、「今ここで生きているという実感、生きていく動機となる個人の意識」と定義したり、高橋 (2005) は「幸福と不幸、快と不快、満足と不満足に揺れ動きながら生活の中で体験される充実感とそれをもたらすもの」と述べている。
星旦二 (2006)	高齢者の健康づくりにおける主観的健康感のすすめ (日本社会の高齢化と生きがい問題の諸相) 〔生きがい研究〕 12, 46-72	高齢者の健康づくりにおける主観的健康感の意義をまとめ、同時に主観的健康感の関連要因を構造的にみてみたい。また、地域較差とともに累積生存との関連について検討し、これからの健康支援のあり方における主観的健康感の意義を明確にすること。	特になし

生きがいの測定の仕方	研究参加者・研究対象 [調査方法・研究デザイン]	研究成果・要約
なし	シニアプラン開発機構「サラリーマンの生活と生きがいに関する研究」(1991, 1996, 2001)、朝日新聞社総合研究本部「定期国民「生きがい」意識調査」(2006)など各種資料や文献 [文献調査]	生きがい感は時代の影響を受けるだけでなく、加齢とともに上昇することがわかった。何を生きがい対象にするかには個人差があるものの、高齢になるほど趣味等の個人的な活動を生きがいとする比率が高まり、一方で、他者への有用感を生きがいの意味として挙げる者も増加した。ワークシェアリングなどによる緩やかな退職が可能になることによって、従来とは異なる退職後のあり方が実現する可能性がある。その生活が幸福なものとなるためにも、さまざまな支援と自助努力による生きがいの実現が目指されるべきであろう。
なし	宮城県の農村部であるA地域8町の在宅高齢者1,575人を対象とし、有効回答数は1,136人(72.1%)であり、最終的な分析対象者は502名となった。調査時期は1999年1-2月。 [横断調査研究] (関連要因)	集まりへの活動参加意向の充足状況に関連していた要因は、IADL、抑うつ傾向であった。趣味や娯楽においては、年齢、性別、IADL、抑うつ傾向、交通手段の利便性が関連していた。IADLの得点が低い者や抑うつ傾向の得点が高い者は、社会活動における活動参加意向が充足されにくくなり、これらの得点が一定の水準に達した者は、活動参加意向の未充足率が急激に高くなっていった。
なし	平成15(2003)年4月から特別養護老人ホームに入居している女性。要介護度I [実践報告]	今までのケアを見直すとともにQOL(生活の質)、メンタルケア(心理的介護)に着目し、A氏の生活歴から手がかりを見つけることで、趣味活動(大正琴や水彩画)への援助を始めることとなる。結果、この取り組みがA氏の「生きがい」となり「その人らしく、安らかに生活を送って頂く」という施設理念へと結びつく第一歩ともなった。
生きがいの有無と内容 (働くこと、社会奉仕、信仰、音楽鑑賞、孫の成長、テレビを見る、手芸・演芸・工芸、囲碁・将棋・麻雀、パチンコなど)	北海道K市の老人クラブ連合会(加盟団体55クラブ、会員総数4,622名)から11のクラブを無作為に抽出し、その会員780名を対象にし、回収率は83.7%(653名)であり、有効回収率は69.7%(544名)であった。調査期間は2005年10月から12月。 [横断調査研究] (関連要因)	スポーツ活動と日常生活での生きがいとの関連は、全体で、生きがいを「もっている」群は、スポーツ活動の「ある」者は96.0%を占め、「ない」者は89.7%と低率を示し、一方、「もっていない」群は、スポーツ活動の「ある」者は4.0%に対して、「ない」者は10.3%と高率を示し、両者に有意な差が認められた($p < 0.01$)。これを性別でみると女性では同様な傾向がみられたが($P < 0.05$)、男性では有意な差は認められなかった。またスポーツ活動頻度と生きがいとの関連では、全体および性別ともに有意な差は認められなかった。
なし	1998年7月より全国16市町村に調査が行われた。2001年6月30日までの死亡年月日の確認を行った。分析対象者は、回答の得られた1万4,375人から属性と調査内容に不備のある者533人を除いた1万3,842人であった。 [縦断調査研究] (因果関係)	[都市高齢者]の方が比較的若い世代向けのエンターテインメントを享受しやすい機会に恵まれている一方、高齢者就業率や家族同居率は[地域高齢者]に比べて低い傾向がある。地域の後期高齢者では、家事やお祭りを含む地域の文化活動における役割が発揮されやすいために役割が保持され、生きがいの維持に関連している可能性が示唆される。主観的健康感が生命予後を規定する妥当性の高い指標である可能性を提示した。また、主観的健康感の関連要因として、制御できない年齢は別として、地域活動や趣味活動により規定される可能性が高いことを示した。

著者 (発表年)	論文名 [雑誌] 巻(号), 頁	目的	生きがいの定義
越谷美貴恵 (2006)	後期高齢者の自己効力感に関する研究 [介護福祉学] 13(1), 58-67	Bunduraの社会的学習理論に基づき、私たちの意欲を決定づける要因のひとつとなる「自己効力感」に焦点をあて、後期高齢者の生きる意欲に影響を与える要因について明らかにすること。	生きがいを趣味と同等に捉えていた可能性がある。
森悦朗 (2006)	認知症治療のGOALを考える：「治す」という観点から [老年精神医学雑誌] 17 (特別号Ⅱ), 78-82	認知症治療のゴールをエンドポイントと置き換えて、アウトカムに求められる条件、代用エンドポイント、患者のQOLと介護者負担について論じること。	特になし
山岸裕美子 (2006)	「知的満足感」を伴うおしゃれによる「生きがい」と介護予防-「文化」を背景とした自己表現 (特集 高齢者と衣服) [日本衣服学会誌] 50(1), 23-26	施設に入居している高齢者に対して成果の見られた働きかけを事例とし提示して、現在、元気に過ごしている人たちにとってはさらに有効性があり、介護予防の観点からは大いに役立つものとなること。	生きがいと楽しみを同等に捉えていた可能性がある。全国社会福祉協議会は高齢者の生きがいづくりと介護予防を目的として、集いの場である「ふれあい・いきいきサロン」を推奨している。
象川美紀, 堀田明裕 (2006)	高齢者の生きがいデザインに関する研究：行政による生きがい対策の分析 [デザイン学研究] 53(1), 29-36	行政が行っている高齢者の生きがい対策について、主に文献調査によって歴史的分析および現状把握を行い、行政による生きがい対策の限界と、今後あるべき生きがいデザインの方向を考察すること。	特になし
三鶯雄, 岸玲子, 江口照子, ほか (2006)	ソーシャルサポート・ネットワークと在宅高齢者の検診受診行動の関連性：社会的背景の異なる三地域の比較 [日本公衆衛生雑誌] 53(2), 92-104	在宅高齢者の検診受診行動とソーシャルサポート・ネットワークとの関連性について、社会的背景の異なる三地域で男女別・地域別に検討すること。	生きがいを趣味と同等に捉えていた可能性がある。

生きがいの測定の仕方	研究参加者・研究対象 [調査方法・研究デザイン]	研究成果・要約
なし	宮崎県内の老人保健施設入所者（女性19人；平均年齢87.00±5.45）と特別養護老人ホーム入所者（男性3人、女性20人；平均年齢84.09±6.28）、デイサービス通所在宅高齢者23人（男性5人、女性18人；平均年齢86.22±4.84；以下在宅群とする）の合計65人（男性8人、女性57人）で、平均年齢は85.69歳（SD=5.65）、男性86.88歳（SD=6.85）、女性85.53歳（SD=5.52）であった。2003年3月から6月に調査を行った。 [横断調査研究] (関連要因)	後期高齢者の生きる意欲を規定する要因として、これまでの人生と自分自身を肯定的に受け止め、生きがいとなる趣味をもち、家族関係を肯定的に評価する前向きなパーソナリティが確認された。人生および自己の受容が、不安の少ない情緒的な安定をもたらし生きる意欲を支えていると考えられる。
なし	文献・資料 [論考]	認知症疾患のQOLは概念から再検討してみる必要がある。たとえQOLの概念は妥当だとしても、QOLスケールでそれが計測できているかどうか、またQOLスケールの妥当性はどうか確認したらよいのかななどの技術的な問題も残っている。認知症治療のエンドポイント、すなわちゴールは1つではない。重要なのは、正しい診断のもとで適切な治療法を選択することである。それぞれの治療法が行われたら、それぞれの治療法に合ったエンドポイントが決まる。それを評価すればよい。苦痛や不便が減じ、さらには、生きがいや人間関係が取り戻せたかどうか重大な関心事である。
なし	ケアハウスなどの施設利用者80歳の女性2名や老人ホーム入所中の高齢者であった。 [実践報告]	実践事例は教養体験や文化に基づく、いわば“いわく付き”のおしゃれであるともいえる。名画や古典文学をおしゃれに取り入れることは、享受した芸術美を表現することであり、つまりは「文化」を装うことである。そして表現が巧みになればなるほど装いの動機はより普遍性を増し、知的満足感を充足させることができる。
なし	1965年から2003年までの厚生白書および厚生労働白書等やウェブ検索による情報を基に、82の自治体が行っている生きがい対策の具体策とした。 [文献調査だけでなくクラスター分析等による統計手法]	国が行っている高齢者の生きがい対策は、個別の高齢者が望む生きがいと乖離し、十分な活性効果が見られないことが予想された。高齢者の多様な要求に対応した生きがいデザインのためには、高齢者を一括りに捉えずに、個人の潜在要求を抽出し、デザインに生かすことが望まれる。各自治体が行っている具体的な対策について数量化Ⅲ類およびクラスター分析によって類型化した。その結果、過疎地-都市部軸、集団-個人軸、身体-精神軸、交流-学習軸、受動-能動軸が抽出された。寄与率が低いため、解釈を一般化することは難しいが、これらは現状の生きがい対策の特性を捉えていると考えられる。
生きがいの有無	北海道内の社会的背景の異なる3地域、都市部（札幌市）・旧産炭過疎地（夕張市）・都市近郊農村（鷹栖町）を取り上げた。 [横断調査研究] (関連要因)	社会的活動性と検診受診行動との関連において、男性にのみ趣味・生きがいの有・無が有意な関連を認めたことを見出した。

著者 (発表年)	論文名 [雑誌] 巻(号), 頁	目的	生きがいの定義
長谷川 明弘, 宮崎隆穂, 飯森洋史, ほか (2007)	高齢者のための生きがい対象尺度の開発と信頼性・妥当性の検討: 生きがい対象と生きがいの型の測定 [日本心療内科学会誌] 11(1), 5-10	高齢者のための生きがい対象尺度を作成し, その特徴を明らかにすること。	長谷川ら (2003b) は, 「生きがい」を, 「今ここで生きているという実感, 生きていく動機となる個人の意識」と定義した。
流石 ゆり子, 伊藤康児 (2007)	終末期を介護老人福祉施設で暮らす後期高齢者のQOLとその関連要因 [老年看護学] 12(1), 87-93	終末期を介護老人福祉施設で暮らす後期高齢者のQOLとその関連要因について明らかにすること。	生きがいを喜び・張りと同等として捉えていた。
岩上真珠 (2007)	社会変動とライフコース-高齢者が生きた時代を見つめて (ライフコースからみる高齢者の生きがい) [生きがい研究] 13, 24-46	65歳以上にあたる出生コホートに属する人たちによって語られたライフコース (誕生から死までの生涯にわたる個人の人生の軌道) の事例をいくつか紹介すること。	多様な高齢者の生きがいの模索をめぐっては, ステレオタイプや思い込みを排し, 「当事者の目線」を大切にしてなされることが基本である。生きがいとは, 当の個人が人生の函数として創造していくほかはないように思われる。
岩井八郎 (2007)	高齢者の社会的地位の変化と幸福感-「ライフコースと階層」研究の視点から (ライフコースからみる高齢者の生きがい) [生きがい研究] 13, 47-72	1970年代から現在までの高齢者の社会的地位の変化を, 特に不就業層の収入と家族形態に注目しながら検討し, 最後に「幸福感」を取り上げて, 社会的地位のタイプとの関係を明らかにしておきたい。	生きがいと幸福感を同等とした。
安藤由美 (2007)	高齢者の人生浮沈評価へのライフコース・アプローチ-沖縄高齢者の家族との死別経験をめぐって (ライフコースからみる高齢者の生きがい) [生きがい研究] 13, 73-96	人が自分の人生の浮き沈みについて下す主観的な評価 (良かった時・悪かった時) が, ライフコース上の経験, とりわけ家族メンバーの喪失体験と, これに関係した歴史的出来事によって, どのように影響されるのかについて, 沖縄を事例とする実証データをもとに考察すること。	生きがいについて直接質問した調査データを持ち合わせていないので, 代替的に人生の浮き沈みについてたずねた調査結果を用いる。

生きがいの測定の方法	研究参加者・研究対象 [調査方法・研究デザイン]	研究成果・要約
生きがい対象尺度を開発することが目的である。その妥当性の測定のために近藤・鎌田(2003)が作成した「高齢者向け生きがい感スケール(K-I式)」を使用した。	静岡県中川根町の在宅65歳以上の高齢者605名に質問紙を郵送し、回答に不備の無かった424名のデータ [尺度構成]	高齢者のための生きがい対象尺度は、妥当性ならびに信頼性がある程度高いことが確認された。下位尺度は、「過去の人間関係」「現在の状態と役割」「未来の人間関係」「現在の子どもと孫」「配偶者(現在と未来)」となっており、全体で24項目で4件法で尋ねる形式を取っている。クラスター分析によって回答者をグループ分けし、老研式活動能力指標、高齢者用うつ尺度短縮版、生きがい感尺度との回答の特徴を明らかにした。本尺度は、生きがいを定量化する尺度として有効であるだけでなく、生きがいの型による差異を表す尺度としても有用な可能性が示唆された。さらに本尺度は、個人から集団へ、また集団から個人へとどちらにも有用なデータを提供しうる尺度となる可能性がある。
「施設生活における生きがい・喜び・張り」は、「趣味や余暇」「同僚とのつきあい」「スタッフのおしゃべり」「家族・友人との面会」「まわりの人の役に立ったとき」「若い頃得意だったことができたとき」「ボランティアの訪問」について4件法で尋ねた。	Y県下の介護老人福祉施設48施設のうち、施設長より研究承諾が得られた26施設に暮らす75歳以上の後期高齢者で施設で最期を迎えることを本人が意思決定している者および家族が最期を迎えることを意思決定し本人がそれを了解している者210名を対象とした [横断調査研究 (関連要因)]	生きがい・喜び・張りをどれくらい感ずるかを尋ねた結果では、非常に感じるが最も高率だったのは、「家族・友人等の面会」で82.0%と最も高く、次いで「若い頃得意だったことができたとき」65.1%、「まわりの人の役に立ったとき」53.2%の順であった。「家族・友人等の面会」については、誰の面会が一番うれしさを自由回答で尋ねた結果、174名より回答を得た。「子ども」が53.4%で最も多く、内訳は娘が群を抜いて高かった。一方、「同僚とのつきあい」や「スタッフのおしゃべり」は、非常に感じるとの回答が33.0%、41.1%と低率であった。
なし	早稲田大学人間総合研究センターの「社会変動と人間発達」プロジェクト(代表正岡寛司・早稲田大学教授(当時))が所有している1991(平成3)年時点で東京都新宿区に住む65歳以上の男3名、女4名のデータ [論考]	紹介したこれらの事例では、家族経歴、教育経歴、職業経歴、地域移動、知人・友人との交わり、健康状態、そして、その時々を主観的にどのように受け止めたか、といったライフコースの要素が語られているが、それらを然り合わせる、激動の時代を今日まで生きてきた、一人ひとりの高齢者の「物語」が見えてくる。高齢者は誰もが、こうした固有の「物語」を紡いできたことを知ったうえで、いま、そしてこれからの、豊かな高齢期のあり方を模索することが必要なのではないだろうか
OGSS-2002には、人々の幸福感を「あなたは、現在幸せですか」という一般的な質問を用いて、「幸せ」から「不幸せ」までの5段階で尋ねている。	「社会階層と社会移動」全国調査(SSM調査:1975, 1985, 1995年)、日本版General Social Survey OGSS, 2002 [論考]	高齢者の現在の生活に対する主観的な評価を「幸福感」から検討すると、世帯収入によって幸福感が規定される傾向が強かった。健康が前提だが、子どもと同居する高齢女性において、世帯収入の差異が幸福感と強く関連していた。一方、子どもと別居する高齢女性では、世帯収入と幸福感との関係はない。世帯収入の低い同居では、高齢女性が妻として、母として生活の負担を担っていると考えられる。
調査員が面接で、対象者に対して、これまでの人生で「良かった時または悪かった時(浮き沈み)」を用意したグラフ上に多くの点(あるいは線)で表してもらおうよう依頼した。	沖縄県本島中南部に位置する3つの町村に在住する、出生が1914~18(大正3~7)年、ならびに1924~28(大正13~昭和3)年にわたる、二つの出生コーホートの男女である。 第1次調査は、1994~95年に、全体で346名の有効回答者を得た(有効回収率56.9%) 第2次調査は、1996~97年に、第1次調査の回答者の中から一定の基準で絞り込み、51名の回答を得た。 [横断調査研究 (関連要因)]	主観的ライフコース評価と歴史的脈絡の関係について、一体何が明らかになったのであろうか。おそらく、戦争期に落ちこみを経験した人たちの事例から、過去のつらい経験は、ライフコースを通じた変化をより認識させやすいという仮説は成り立つかもしれない。では、逆に、過去においてつらい経験をしていないことが直線型の人生評価をもたらした要因といえるだろうか。言い換えれば、直線型の人の先行するライフコース経験は、順風だったのだろうか。このことは十分に検証することはできなかった。ただ、少なくとも、女性の家族喪失経験が、変動型をもたらしがちであることは、ある程度確かめられたといえる。男性の場合、現時点では、人生曲線の形状や水準に影響する要因を見いだすことはできていない。少なくとも、家族喪失体験は、人生曲線評価にはあまり影響しないようである。

著者 (発表年)	論文名 [雑誌] 巻(号), 頁	目的	生きがいの定義
遠藤忠 (2007)	高齢者の生きがいを規定する主観的QOLと健康面との関連性を中心とした横断的アプローチによる心理学的検討(ライフコースからみる高齢者の生きがい) [生きがい研究] 13, 97-116	首都圏都市部に在住する高齢者を対象として、生きがいを規定すると考えられる主観的QOLと、その関連要因、特に健康状況を中心にADL・IADLや外出状況について測定すること。	生きがいは満足感、生活のハリ、心理的安定感に起因するものと捉える。
熊野道子 (2007)	生きがい対象の集中・分散による満足度・ストレス反応の相違:定年前後の男性の場合 [高齢者のケアと行動科学] 13(1), 32-40	定年前後の男性を対象として生きがい対象を集中させて持つ場合と、生きがい対象を分散させて持つ場合について、満足度とストレス反応の相違を検討すること。	幅広い年齢層の人たちを対象に調査した結果、“仕事こそ生きがい”と生きがい対象を集中させておく方が、仕事にも余暇にも生きがい対象を分散させておくより、全体としての生きがい感が強いという報告がある(見田, 1970)。
山上徹也, 細井順子, 妹尾陽子, ほか (2007)	脳活性化リハビリテーションによる認知症の進行予防の可能性:長期介入例の検討 [老年精神医学雑誌] 18(4), 1105-1112	外来認知症高齢者を対象に脳活性化リハビリテーションの快刺激プログラムが、認知症高齢者の意欲-生きがいを創出し、進行予防に有効であるか検討すること。	役割を持つ事が生きがい創出に繋がりがり、また意欲と生きがいを同等に捉えている可能性があった。
一柳歩美 (2007)	高齢者の生きがいと役割(特集 環境の変化と人生観-どのように環境の変化をとらえ、生きるか) [キャリアと人生観] 2(1), 7-13	高齢化の現状や介護状況から今日の日本の現状を捉え、高齢者の生きがい、役割からみる個々の尊厳について考えていくこと。	高齢者の生きがいや主観的健康観について調査したものによると、社会活動への参加や生きがいを感じている者ほど主観的健康観が高い傾向がみられることが言われている(早坂, 2002)。

生きがいの測定の仕方	研究参加者・研究対象 〔調査方法・研究デザイン〕	研究成果・要約
<p>高齢者の生きがいを規定すると考えられる主観的QOLに関する尺度は石原・内藤・長嶋(1992)を用いた。本尺度は3つの下位尺度(“現在の満足感”“生活のハリ”“心理的安定感”), 12の質問項目から構成されている。そして評定に際しては“はい”“どちらともいえない”“いいえ”から最も当てはまるものを選択するように求めた。</p>	<p>2001年10月31日において、東京都A区の3地域に在住の65歳以上80歳以下の高齢者3,555名であった。 〔横断調査研究〕 (関連要因)</p>	<p>分析対象者の主観的QOLは高く、良好であることが考えられたが、特に下位尺度の“生活のハリ”は、高年齢群は低年齢群に比べて生活のハリがより低くなり、女性は男性に比べて生活のハリの評価が低くなることから、年齢群および性別で異なることが考えられる。本研究の分析対象者の現状として“外出頻度”は概ね良好であると考えられたが、分析の結果、主観的QOLと有意に関連していなかった。このことから、外出については、要因として頻度でとらえるよりも、外出の内容や、外出に対する満足度等の視点でとらえていくことが重要であると考えられる。すべての年齢群と性別の組合せにおいて主観的QOLと有意に関連していたのは、健康状況の主観的側面である自覚健康度、ADL・IADL、“段取りと実行”であり、健康状態の自己評価を高めること、段取りと実行が行えると自己評価できるような、高齢者に対する働きかけや支援が重要であると考えられる。特にADL・IADL、“段取りと実行”に関しては、高齢者の有能感や自信を高めるような働きかけや支援を考案することが重要であると考えられる。</p>
<p>生きがい対象については、「何をしているときに生きがいを感じるかをいくつかつづけて○をつけるように9つの項目について回答を求めた。「仕事に打ち込んでいるとき」「ボランティア活動をしているとき」「地域活動に参加しているとき」「趣味など自分の好きなことと団らんの時を過ごしているとき」「何もしていないとき」「親しい友人と話をしていないとき」「その他」「生きがいを感じることはない」</p>	<p>株ニッセイ基礎研究所から“暮らしと生活設計に関する調査”のデータを提供いただき2次解析を行った。2001年11月に全日本の54~68歳の男性を無作為に抽出し、回答を得られた910名を調査対象者とした。 〔横断調査研究〕 (関連要因)</p>	<p>生きがい対象の数が多いほど、生活満足度が高く、精神的ストレス反応が低かった。すなわち、定年前後の男性は、生きがい対象を集中させておくよりも、分散させておく方が生活満足度が高く、精神的ストレス反応が低かった。“仕事は仕事、余暇は余暇”と両方に生きがいをわりきって配分している人たちより、“仕事こそ生きがい”として、仕事に生きがいの焦点をはっきりとおいている人たちのほうが、全体としての生きがい感が強いという報告がある(見田, 1970)。これは、本研究とは逆の結果である。生きがい対象の項目の有無をダミー変数で説明変数とし、満足度・ストレス反応を従属変数とする重回帰分析を行った。仕事、地域活動、趣味、家族のそれぞれの生きがい対象が生活満足度に同程度に関与している、さまざまな生きがい対象を持つことが生活満足度を高めることが示唆された。</p>
<p>なし</p>	<p>伊勢崎福島病院のもの忘れ外来を受診し、研究に同意が得られ2回以上評価ができた9人(男性5人、女性4人)で平均年齢79.6±3.9歳であった。脳活性化リハ参加前と参加4.5か月後、7から10か月後、15から20か月後の各時点での評価結果について統計学的な分析を行った。 〔介入・プログラム研究〕</p>	<p>統計学的には開始前と比較して介入後の経過の中で各項目の有意な悪化はなかった。長期介入者5人については、2人で症状が維持・改善し、3人で症状が進行した。脳活性化リハが認知機能の向上を図るだけでなく、認知症高齢者がくつろげる居場所の提供や家族との関係の再構築など、認知症があっても家族と楽しく生活できるという当初の目標を達成できたと感じた。</p>
<p>なし</p>	<p>文献・資料 〔論考〕</p>	<p>高齢者の現状。「おばあちゃんたちの葉っぱビジネス」にみられる高齢者の生きがいと役割から“個々を尊重した暮らし”が大切な基盤となっていると考える。高齢者のみならず、個々の生きがいや役割を支え、ライフサイクルや環境の変化と調和・協働し、地域をエンパワメントしていく町づくりが大変重要である</p>

著者 (発表年)	論文名 [雑誌] 巻(号), 頁	目的	生きがいの定義
和泉京子, 阿曾洋子, 山本美輪, ほか (2007)	「軽度要介護認定」高齢者のうつに関連する要因 [老年社会科学] 28(4), 476-486	2004年度に介護保険制度で要支援および要介護1と認定された65歳以上の在宅高齢者のうつの実態およびうつに関連する要因を明らかにし、うつ予防の示唆を得ること。	特になし
胡秀英, 石垣和子, 山本則子 (2007)	帰国10年以上の中国帰国者1世およびその中国人配偶者の精神的健康とその関連要因 [日本公衆衛生雑誌] 54(7), 454-464	帰国(来日)10年以上の中国帰国者1世およびその中国人配偶者における精神的健康問題の実態とその関連要因を明らかにすること。	精神的健康調査票 (General Health Questionnaire) 12項目版の中の質問項目であった。
岡村清子 (2008)	世代間交流が高齢者にもたらす生きがい (世代間交流がもたらす高齢者の生きがい) [生きがい研究] 14, 26-54	従来の世代間交流をレビューし、現在さまざまな分野で進んでいる地域での世代間交流の実態と今後の課題についてみること。	特になし
小川全夫 (2008)	世代間交流がもたらす高齢者の生きがい (世代間交流がもたらす高齢者の生きがい) [生きがい研究] 14, 55-75	普遍主義的な論理を用いた生きがい研究を推進するためには、欧米の言語だけでなく東アジアの言語による概念の共有化を図ったうえで、現実を測定する国際的な比較研究が必要になるだろう。	高齢者の生きがい活動のなかで、世代間交流というプログラムがある。日本で高齢者の生きがいを語る際には、必ず言及されるプログラムであるが、必ずしも生きがい論には裏打ちされていないが、高齢者に対する社会サービス・プログラムとしては国際的に共通しているものである。高齢者の生きがいは、集団への関与、さらに踏み込んで、コミュニティへの貢献が強調されている。
藤原佳典 (2008)	世代間交流がもたらすシニア世代の健康と生きがい (世代間交流がもたらす高齢者の生きがい) [生きがい研究] 14, 76-101	世代間交流がもたらすシニア世代の健康と生きがいについて多角的に検討し、実践上および研究上の課題と展望を述べること。	特になし

生きがいの測定の仕方	研究参加者・研究対象 〔調査方法・研究デザイン〕	研究成果・要約
生きがいの有無	2004年11月に大阪府下44市町村(2004年11月現在)の介護保険主管課へ調査依頼し、承諾を得た22市町村の要介護認定において2004年8～12月に要支援と認定された5,130人、要介護1と認定された5,734人の合計10,864人。2004年12月～2005年3月に調査実施。 〔横断調査研究〕 (関連要因)	生きがいなしは、うつ傾向に対するオッズ比の値がもっとも大きかった。一方、地域在住高齢者の生きがいを規定する要因についての横断研究では、男女共にGDS得点が低いほうが生きがいをもっており、本研究結果と一致している。生きがいの要因に関しては、社会参加、ソーシャルサポート、良好な健康状態などが挙げられ、うつ要因とも共通しており、軽度認定者に対しても生きがい支援を行うことがひいてはうつ予防につながると考えられる。
「生きがいを感じる」に対して「はい」か「いいえ」	関東圏A県在住の中国帰国者を支援する会に登録している中国帰国者1世とその中国人配偶者99名であった。 〔横断調査研究〕 (関連要因)	本研究に参加した対象者の7割ほどに、精神的健康問題が疑われた。具体的な問題としては、生きがいを感じない、不幸せ感、ストレス、物事を決定できない、憂うつ気分、不眠などの症状が多くみられた。この結果は日本人の地域高齢者や中国における地域高齢者などのGHQ12の結果と比較しても悪く、中国帰国者1世とその中国人配偶者の置かれた状況の厳しさを示している。
なし	文献・資料 〔文献調査〕	世代間交流を通じて、つながりの効果や意義については理解されており、人々は地域社会に自分自身の居場所をつくり、知己を広げている。そして、頼り、頼られるという社会関係資本が指し示している「個人間のつながり、すなわち社会的ネットワーク、およびそこから生じる互酬性と信頼の規範」の関係を構築しており、コミュニティ形成という視点からもとらえることができる。
なし	文献・資料 〔論考〕	世代間交流プログラムがどのように「生きがい」の増進に効果があるかを検討するといった場合、まずは生きがい概念を、どのように操作概念に加工するかが問われる。素朴に、「あなたは生きがいを感じますか」というような質問文に対して、「感じる」「感じない」という回答文を用意して答えてもらうということもできるだろう。しかし、これを国際比較研究に拡大しようとする、生きがいを「subjective well-being」「What makes life worth living」「self realization」「commitment to group」「a meaning in life」「生活有意義」など、どのような表現が適切なのかをさらに検討しなければならない。
なし	文献・資料 〔論考〕	日米の相違点を考慮し、世代間交流ボランティアプログラムを長期的に継続・展開していくためには、何らかの行政のシステムに組み込まれる必要がある。そのためにはプログラムの有効性および実行可能性・継続性に関するエビデンスは不可欠である。

著者 (発表年)	論文名 〔雑誌〕 巻(号), 頁	目的	生きがいの定義
佐藤宏子 (2008)	多世代同居家族における世代間交流の諸相 (世代間交流がもたらす高齢者の生きがい) [生きがい研究] 14, 102-129	1982年から2007年までの25年間、静岡県志太郡岡部町朝比奈地域の中老年女性を対象として、同一の対象者を2時点以上で比較分析するパネル調査法や事例調査法などを用いて、茶生産の変動過程と家族を取り巻く状況の変化が家族内の世代間関係に影響を及ぼした過程を分析し、この分析結果を用いて、三世代、四世代で暮らす多世代同居家族の世代間関係の変化と、家族内における異世代間の交流の諸相を明らかにしたい。	特になし
忽滑谷和孝 (2008)	高齢化と精神障害：高齢者の自殺 [老年精神医学雑誌] 19(5), 549-555	高齢者の自殺の特徴を挙げ、各地域で、行われている活動を交えながら、予防対策について概説する。高齢者医療に携わる医師が自殺率の減少を目指すこと。	特になし
神部純一 (2008)	諸外国の生涯教育 中国における高齢者の学習と生きがいに関する研究-天津市老年人大学を事例として [日本生涯教育学会年報] 29, 175-190	中国の代表的な老年大学の一つである「天津市老年人大学」で学ぶ高齢者を対象とした調査結果を基に、高齢者の「生きがい」の中でも「生きがい感」の方に焦点をあてて「生きがい」と「学習」の関係について検討すること。	「生きがい」は、これらのうち、「生きがいを感じている状態」、あるいは「個人の心の充実感」を意味するもの、すなわち「生きがい感」として捉えたい。
熊野道子 (2008)	大学生・中年層・高齢者における生きがいー生きがい要素と対人関係の観点から [教育福祉研究] 34, 7-16	大学生、中年層および高齢者が感じる生きがいはどのように異なるかを生きがいの5つの要素(人生肯定、存在価値、人生の意味、目標・夢、コミットメント)と対人関係の観点から検討すること	生きがいは、「いかに生き生きと生きるか」といった人生の核心となる問題である。生きがいは日常生活でよく用いられる言葉であり、人生を豊かに生きるために重要な概念であろう。
石井利幸 (2008)	余暇活動場面上における作業活動ー認知症高齢者に対する作業の考え方(特集 暮らしに活かす作業活動ー生きがいや豊かさを求めて) [臨床作業療法] 5(2), 131-134	認知症の症状特性を概説したうえで、グループホームに代表される小規模ケアの効用を、主に「生活環境」と「作業」の2つの視点から考察し、それを大規模施設における余暇活動にどのように応用できるかを考えたい。	特になし
芳賀博 (2008)	高齢者保健・福祉(5):健康・生きがいづくり [日本公衆衛生雑誌] 55(1), 48-50	地域でのいわゆる「元気高齢者」を対象とした社会参加や役割及び健康・生きがいづくりに視点をあて述べること。	特になし

生きがいの測定の仕方	研究参加者・研究対象 [調査方法・研究デザイン]	研究成果・要約
1982年と2005年の調査では「これまでのあなたの人生を振り返って、一番嬉しかったことはどんなことですか」という質問をしている。2005年調査では、「現在のあなたの一番の生きがいは何ですか」と尋ねている。	1982年から2007年までの25年間、静岡県志太郡岡部町朝比奈地域の中高年女性を対象として、同一の対象者を2時点以上で比較分析するパネル調査法や事例調査法の分析結果であった。 [文献調査]	「これまでの人生を振り返って一番嬉しかったこと」では、「子どものこと」「孫・ひ孫のこと」「家庭生活に関すること」を答えた対象者が1982年には67.3%、2005年には69.4%である。これに「自分のこと」の「結婚・出産・子育て」を加えると、「家族員や家庭生活に関すること」が1982年には71.0%、2005年には76.1%を占めており、両時点での回答は近似している。また、1982年と2005年の回答を比較すると、子どものことでは「暮らし・交流・会話・旅行」が減少して「結婚・独立」が増加し、孫・ひ孫のことでは「誕生・成長・入学・卒業・結婚」が増加しており、23年間の対象者のライフステージの進行に合わせて「家族員や家庭生活に関すること」の内容は変化している。大多数の調査対象者たちが人生のなかで「一番嬉しかった」「一番つらかった・悲しかった」と感じていることは、23年という年月を隔てた2時点ともに「家族員や家庭生活に関すること」であり、対象者のライフステージの進行に合わせてその内容に変化がみられることが明らかになった。対象者の人生において「家族」はきわめて重要な位置を占め続けているといえよう。対象者の生きがいの第1位は「農業や勤めなどの仕事」(27.7%)、第2位は「趣味や余暇を楽しむこと」(25.3%)、第3位は「孫の成長」(21.7%)である。「地域活動や社会活動」と答えた者は5.9%と少ない。
なし	文献・資料 [論考]	自殺対策は、事前対応としてセーフティーネットの充実、サクセスフルエイジングを目指し、生きがいづくりを推し進めていくことである。
改訂版PGCモラールスケール (morale scale) の全17項目 (前田ら, 1979)	中国の天津市老年人大学生780名から回収のできた663名(回収率85.0%)であった。 [横断調査研究] (関連要因)	学習の「社会参加に対する効果」は「学習満足度」に影響を与えただけでなく、「生きがい感」の中の「有用感」とも密接に関わっていた。「有用感」得点が、「高位群」の人の率は、「社会参加に対する効果」の評価が「高位群」に属する人の50.0%を占め、それは「中位群」及び「低位群」に属する人の率を大きく上回っていたのである。高齢者の社会活動への参加意欲を高めることは、彼らの「有用感」を高め、結果として「生きがい感」を高めることにつながるといえよう。
熊野 (2001) の生きがい認知尺度 (30項目)	大学生492名、H市立教育文化センター“生きがい創造学園”受講者やH市立総合福祉センター利用者さらに友人・知人を通じて調査依頼して集められた中年層 (30-55歳) 194名および高齢者 (65歳以上) 316名 [横断調査研究] (関連要因)	(1) “人生肯定”と“コミットメント”は、高齢者は中年層や大学生より高く、“存在価値”と“人生の意味”は、高い順に、高齢者、中年層、大学生であり、“目標・夢”は年齢層の差が認められなかった。(2) 大学生は対人関係以外の要因が生きがいに影響し、中年層は他者からの承認が生きがいに最も影響し、高齢者は他者との交流が生きがいに最も影響していた。
なし	文献・資料 [論考]	従来の施設生活は晴の要素が多いが、生活の継続性を保つうえで畏の作業が重要である。それによって残存能力を発揮でき誤見当の世界の中で在宅生活を続けているかのように感じながら、役割を持ちつつ安心して暮らすことができる。現実的には大規模施設では人的・物的環境上の制約が大きく、十分な取り組みができにくい状況にあるが、われわれ作業療法士もグループホームのケアにならない、作業を再考する必要があるのではないだろうか。
なし	文献・資料 [論考]	地域での高齢者を対象とした健康づくり活動の目標は、生活機能や主観的QOLの維持・向上にある。今こそ住民参加型の保健福祉活動が待たれている。地域での健康づくりにおいて、社会的役割やボランティア活動、そして効果的な活動プログラムの根拠を提供することにもなる参加型アクションリサーチ等の視点がますます重要となつてよう。

著者 (発表年)	論文名 [雑誌] 巻(号), 頁	目的	生きがいの定義
岡本和士, 原澤優子 (2008)	在宅要介護高齢者の主 介護者における介護負 担感とその関連要因に 関する検討 [厚生指標] 55(4), 21-25	主介護者の介護負担感と心理的・精神 的および家族環境との関連を明らかに すること。	生きがい感は、個人によりその定義 や価値観およびその対象が異なると 考えたために、本研究では特に定義 を与えず、その有無の判断は介護者 本人の感じ方に基づいた。
熊谷幸恵, 森岡郁晴, 吉益光一, ほか (2008)	主観的な精神健康度と 身体健康度, 社会生活 満足度および生きがい 度との関連性: 性およ びライフステージによ る検討 [日本衛生学雑誌] 63(3), 636-641	性やライフステージ別に, 主観的精神 健康度を把握し, 主観的身体健康度な らびに社会生活満足度, 生きがい度な ど他の側面から捉えた健康自己評価と 精神健康度との関連性を検討すること により, 地域におけるメンタルヘルス の向上を図っていくための基礎的な知 見を得ること。	わが国におけるspiritualの概念は研 究段階であるが, その下位概念の一 つに「生きる意味・目的」が含まれ ていることから, 本研究ではspiritual を「生きがい」として用いた。
白川あゆみ (2009)	過疎地域に暮らす配偶 者を亡くした女性高齢 者の死別後の体験 [日本地域看護学会誌] 11(2), 87-92	過疎地域に暮らす配偶者と死別した女 性高齢者の死別後の体験を質的に明ら かにし地域における支援について検討 すること。	特になし
長嶋紀一 (2009)	高齢者にとっての生き がい-年齢, 心身の健 康等との関係 [生きがい研究] 15, 4-19	高齢者の生きがいについて検討するに 際して, 高齢者にとって生きがいとは 何かについて考察し, さらに年齢, 身 体的健康と生きがいとの関係, 認知症 高齢者と生きがい等についても考察し ていくこと。	高齢者の生きがいに関与するのは, 年齢, 心身の健康状態, 認知症症 状, 人間関係, 人的交流の頻度や質 が大きな要因となる。この有無に拘 わらず, 役割期待が考えられる。
古谷野亘 (2009)	生きがいの探求-高齢 社会の高齢者に生きが いが必要なわけと生き がい対策 (高齢者の生 きがいを支える社会の 仕組み) [生きがい研究] 15, 22-36	今日の高齢社会で, 高齢者の生きがい が特に問題とされる背景を考え, 生き がい対策の課題を検討してみること。	生きがいの定義の中では, 当人が感 じる主観的な生きがい感に関心があ る心理学と, 特定の時代や集団で特 定の物事が生きがいになることの社 会的背景に関心が向かう社会学者の 違いがあるようだ。

生きがいの測定の仕方	研究参加者・研究対象 [調査方法・研究デザイン]	研究成果・要約
生きがい感の有無	2006年6月に研究協力が得られたA県内通所介護施設においてサービス登録がある250名の中から、介護家族がいる195名の主たる介護者、質問紙の回収数は152名(回収率77.9%)であった。 [横断調査研究] (関連要因)	主介護者を対象として、介護負担感と精神心理的要因および家族の支援状況との関連では、介護負担感の高い者はそうでない者に比べ、健康状態不良の者、「感情表出(なし)」「生きがい感(なし)」「目標達成への努力(なし)」「精神的ストレス(あり)」「家族からの支援(少ない)」の者の割合が有意に高く、これらの要因の関連を同時に比較した結果「生きがい感(なし)」のみ有意に高い関連(オッズ比4.9; 95%信頼区間1.1-18.5)を認めた。さらに、生きがい感の有無と介護負担感との関連において、他の要因を介する間接的な関連の程度よりも、直接的に関連する程度の方が顕著に高かった。本研究において結果として示さなかったが、「生きがい感」は「目標達成のための努力」「世間体への認識」と有意な正の相関関係を認めた。
視覚アナログ尺度 (Visual analogue scale, 以下VAS)を用いて、生きがい(以下生きがい度)の四側面について調べた。	和歌山県のA保健所管内1市4町に在住する20歳以上の住民で、調査票を配布できた3,048人に対して2003年1月～2月に調査を実施した。20-30歳台(若年群)、40-50歳台(中年群)、60歳以上(高年群)とした。 [横断調査研究] (関連要因)	地域におけるメンタルヘルスの向上を図っていくための基礎的な知見として以下のことが明らかになった。①若年群の男性では社会生活満足度が、女性では生きがい度と社会生活満足度の低さが、精神健康度の低さと強く関連していた。②中年群では男女とも社会生活満足度、生きがい度の低さが、精神健康度の低さと強く関連していた。③高年群の男性では生きがい度と身体健康度が、女性では身体健康度の低さが、精神健康度の低さと強く関連していた。以上のことから、精神健康度を高めるためには年齢や性差を考慮した取り組みを行うことが有効であると考えられた。
なし	調査地域の村保健師から以下の条件を満たす5名以下の女性高齢者の紹介を得た。①65歳以降に配偶者を亡くした女性で一人暮らししている。②言語によるコミュニケーションが可能である。③精神的、身体的に不調や苦痛がない。④配偶者と死別して数年である。紹介された女性高齢者5名全員から研究参加協力の了解を得た [質的研究]	5名全員が70代であり平均年齢は74.6歳(SD2.5歳)であった。過疎地域に暮らす配偶者を亡くした女性高齢者の体験をその記述によって明らかにすることを目的に研究を行った。その結果、心身、社会的に大きな否定的影響を受けることなく生活していた。むしろ自分自身で新たな生きがいや役割を創造して生活していた。それには過疎地域という特有の環境が影響している可能性が示唆された。また、「一人暮らしになり将来の健康を案じる」一方で「何かあれば将来、村の福祉サービスを利用したい」(夫が行っていた役割もすべて自分の肩にかかってきて大変である)一方で、「夫が行っていた役割を継承していくことが生きがいであり、支えである」(交流に気遣いをする)一方で「同年代の人たちとの交流を楽しんでいる」という思いを体験していた。女性高齢者はこのような否定的側面と肯定的側面を、自らバランスよく保ち、否定的側面が大きくならないように生活をしてきた。看護支援としては、肯定的側面を維持、強化していく必要性が示唆された。
なし	文献・資料 [論考]	高齢者の生きがいに関与するのは、年齢、心身の健康状態、認知症症状、人間関係、人的交流の頻度や質が大きな要因となる。この有無に拘わらず、役割期待が考えられる。さらに認知症高齢者の心理的特徴などにより、体験する、あるいは認識する「生きがい感」には質的にも量的にも、さらには時間的にも違いが生じてくるものと思われる。また、年齢により心身の健康状態等によって、高齢者自身の生きがいに対する考え方や基準も変化してくるようである。しかし、高齢者の生きがいに影響するものとしては、役割意識、人間関係、社会や人との交流頻度などが考えられる。今後の課題としては、超高齢者、病弱高齢者、さらには認知症高齢者の生きがいについて、新しい価値観も踏まえて、検討することが望まれる。
なし	文献・資料 [論考]	社会老年学でこれまで研究されてきたのは、生きがい(感)ではなく、モラルや生活満足度、そして主観的幸福感という概念であった。主観的幸福感の関連要因に関する研究は多く行われているが、そこで明らかにされた幸福な老いの条件と、生きがい(充実感と人生の意義)をもたらす要因は同じではないらしい。生きがい対策事業は、内容ばかりではなく、その存否を含めて抜本的な見直しを迫られることになるであろう。

著者 (発表年)	論文名 [雑誌] 巻(号), 頁	目的	生きがいの定義
小澤利男 (2009)	医療からみた高齢者の 生きがい (高齢者の生 きがいを支える社会の 仕組み) [生きがい研究] 15, 37-52	医療の立場からの生きがいを考察する こと。	要するに生活の満足度である。QOL (quality of life) がややこれに近い。だが、 生きがいという用語は日本特有である。 欧米にはこのような言葉はない。
橋本正明 (2009)	介護の今日的課題とケア に関わる生きがい研究 (高齢者の生きがい を支える社会の仕組み) [生きがい研究] 15, 53-98	超高齢社会の扉を開いたわが国における 高齢者福祉のあり方、幸せを実現する ソーシャルワークとはどのように考 え、また援助を考えていくのか一人ひ とりで考えておかなければならない。 これらを理解しておくこと。またアン ケートを通じて、職員の意識を確認 し、ボランティアの存在の大切さを再 認識すること。	特になし
薬師寺清幸 (2009)	全国の高齢者大学および 高齢者大学卒業生の 動向 (生きがい健康づ くり事業報告) [生きがい研究] 15, 152-159	高齢者の生きがい健康づくりの推進の 取組みの一つである「高齢者大学事 業」の動向を紹介すること。	特になし
針金まゆ み, 石橋智 昭, 岡真人, ほか (2009)	都市部シルバー人材セ ンターにおける就業実 態: 性・年齢階級によ る検討 [老年社会科学] 31(1), 32-38	シルバー人材センター会員が実際に従 事している就業の量と内容について、 性別に年齢階級間で比較することによ り、70歳以上の高齢者の就業を促進 する方途を探った。	特になし

生きがいの測定の仕方	研究参加者・研究対象 〔調査方法・研究デザイン〕	研究成果・要約
なし	文献・資料 〔論考〕	一人の個体の老病死には、このような時間的、空間的、社会的な要因が絡んでいるのである。こうした事実を知るとは、生きとし生けるものにとって最大の喜びである。それは今日に生きるものの、生きがいそのものといえよう。
なし	文献・資料ならびに特別養護老人ホームの介護職員、そこで活動するボランティアおよび利用者からであった。 〔横断調査研究〕 (関連要因)	利用者・ボランティア・職員は、“お互いを大切な存在”だと感じている、ということである。そして、利用者は、もつと会話をしたいということであった。介護施設での「生きがい」を考える時、“職員”“ボランティア”“利用者”といった立場を超えて、誰であろうとも人としての関わりを大切にすることが、「生きがい」の獲得のために何より大事なことである。そのためには生活の場としての施設全体の雰囲気作りが重要である。高齢者が暮らす福祉施設が、関わる者のお互いの存在を尊重できる、笑顔にあふれた場所となれることが今、超高齢社会に突入する社会から高齢者福祉施設に期待されている最重要テーマだと認識していきたい。
なし	財団法人長寿社会開発センターと全国31の都道府県明るい長寿社会づくり推進機構が取り組んでいる事業 〔実践報告〕	高齢者大学は県レベルのもので、主に県庁所在地にある。すなわち、定員100名程度の県立大学というイメージである。組織での経験、高齢社会に対する見識や問題意識、生き方にこだわりをもった方々が集まる。このような知識と経験とこだわりを有する方々に、いかにして、地域活動の推進者になっていただくか、それが高齢者大学の大きな課題である。高齢者大学は、高齢者自身の知識・教養の向上だけではなく、地域活動の実践者を育成することを大きな柱としている。高齢者大学卒業生による特徴的な活動事例を三つ紹介した。高齢者大学全体を捉えて社会参加を促進する仕組みづくりを考えることが重要である。
なし	A市シルバー人材センターの会員データおよび就業実績データから得たものである。分析データとして、2006年4月～2007年3月の間の会員データおよび就業実績データを用いた。分析対象は、上記期間に在籍していた会員2,987人とした。分析対象の平均年齢は70.7歳(標準偏差=4.93歳)、男性2,233人(74.8%)、60～64歳、65～69歳、70～74歳、75歳以上の4階級に群分けした。 〔横断調査研究〕 (関連要因)	男性会員では75歳以上のグループで配分金額が少なく、またその就業内容も異なることが明らかとなった。他方で、女性会員においては年齢階級による配分金額に差がみられず、就業内容のみ異なっていた。加齢に伴う会員の就業状態には男女で異なった要因が存在していることが推察される。

著者 (発表年)	論文名 [雑誌] 巻(号), 頁	目的	生きがいの定義
今井忠則, 長田久雄, 西村芳貢 (2009)	60歳以上退職者の生き がい概念の構造: 生き がい概念と主観的幸福 感の相違 [老年社会科学] 31(3), 366-377	生きがい概念の構造を構築し(研究 1), その仮説を検証し(研究2), 主 観的幸福感(Subjective Well-being; SWB)との相違点を考察すること。	考察で論じている。暫定的な生きが いの定義を, 神谷(1980)を参考に 「生きがいを感している精神状態」 とした。
文鐘馨, 三上洋 (2009)	地域在住日本人高齢者 と在日コリアン高齢者 の転倒要因の比較 [日本老年医学会雑誌] 46(3), 232-238	都市部在住日本人高齢者及び在日コ リアン高齢者の転倒に関連する因子を解 析し, 特徴を比較すること。	特になし
千葉和夫 (2009)	認定講座・ダンスムー ブメント高齢者の健康 と生きがいサポート (変わる力 探る 次代 を育む-教師のための スキルアップ支援) - (生涯スポーツ) [女子体育] 51(1), 48-51	“老化”という概念の検討を含め, 保 健・医療・福祉分野での高齢者の健康 についての考え方, また生きがいサ ポートという考え方について紹介する こと。	生きがいは, “自己価値 (Self Es- teem)” “自尊心” “自己充実感” “明 確な自己存在感” “人生の値打ち (Worth of Living)” などと言い換 えることができる。

生きがいの測定の仕事	研究参加者・研究対象 [調査方法・研究デザイン]	研究成果・要約
<p>質問項目の作成では、生きがいの対象・源泉とはし別して意見を収集した。各質問の回答は、「1.ほとんどあてはまらな、2.あまりあてはまらな、3.ややあてはまらな、4.わりにあてはまらな、5.とてもあてはまらな」の5件法とした。</p>	<p>(研究1) 2005年6月に某企業グループの定年退職者273人を対象として同意の得られた回答は204人(回収率74.7%)あり、その内、60歳以上の有効回答者198人(男性188人、女性10人、平均年齢71.3±5.4歳、範囲60~87歳)を分析した。(研究2) 2006年5~11月に茨城県の地域中高年者461人の中から同意が得られた414人(回収率89.8%)の内、60歳以上かつ観測変数に欠損のない367人(男性149人、女性218人、平均年齢65.5±4.1歳、範囲60~88歳)であった。 [横断調査研究] (関連要因)</p>	<p>研究1から①『社会⇔個人の関係性の次元』と②『過去・現在⇔未来の時間の次元』および、幸福感を単次元ではなくポジティブとネガティブに分けて考える、③『肯定的⇔否定的の心理機能の次元』の3次元とした。 「生きがい概念」とSWBの相違点は、①現在(およびこれまでに)の生活・人生に対する個人的感情(満足感や充足感など)は共通(重複)している。ただし、とらえ方が肯定的と否定的で異なる。②「生きがい概念」はSWBより広範な概念で、時間性では「未来」の方向に、関係性では「社会的」の方向に広がりをもっている。③「生きがい概念」はポジティブ(肯定的)な概念であるが、SWBはどちらかというとながティブ(否定的)な概念である(これは測定尺度から起因する問題かもしれない)。これまでのSWB研究の知見を単に援用しただけでは、「生きがい概念」の独自(SWBと重なっていない)の部分(たとえば「未来に対する積極的・肯定的姿勢」や「自己存在の意味の認識」)が見落とされるおそれがある。両概念を区別することが今後の研究には不可欠であろう。</p>
<p>生きがいの有無</p>	<p>2004年11月-2005年1月に在日コリアンの集住地域Aである、大阪市生野区A地区在住の65歳以上の高齢者543人の中の調査票が配付可能であった494人の中から協力拒否63人を除いた430人から回収した(回収率87.2%)。また、無効回答者5人を除く425人を分析対象とした(有効回答率98.8%)。内訳は、日本人221人(平均年齢74.9±6.8歳:転倒群41人、非転倒群180人)、在日コリアン200人(平均年齢74.7±7.1歳:転倒群66人、非転倒群134人)の計421人。過去1年のうちに転倒の経験があったものを転倒群、そうでないものを非転倒群とした。 [横断調査研究] (関連要因)</p>	<p>在日コリアン転倒群は非転倒群に比べ独居者が多く、生きがいがなく回答したものが多く、糖尿病、脳卒中、骨関節疾患の既往が高く、主観的幸福感が低いという結果が見られた。また在日コリアン高齢者は日本人高齢者に比べて転倒の頻度が高かった。その中でも後期高齢者、女性においてその割合が顕著であった。また、日本人、在日コリアンともに転倒群は非転倒群に比べ、抑うつ、閉じこもり、介護保険利用率が高く、高血圧、心筋梗塞、骨折の既往が高く、ADL、QOLの値が低いことが明らかとなった。多変量解析の結果、日本人は閉じこもり傾向と睡眠薬・安定剤の服用が、在日コリアンはBADL、視力の低下、高血圧の既往、抑うつが転倒に関連する要因と考えられた。</p>
<p>なし</p>	<p>個人体験 [論考]</p>	<p>高齢者へスポーツを提供し、生きがいをサポートしていく枠組みは、「個人と集団(グループ)の軸」と「医療・保健モデルと人生・生活モデルの軸」の2つの軸とその4つの局面の中で医療・保健モデルよりも「依存的利用者」を配置し、人生・生活モデルよりも自立の利用者を配置してある。読者は4つの局面の中のどこのエリアを基盤としてアプローチしているのか? この枠組みは、実践的な知見の整理に役立つと期待する。私たちは、スポーツと健康・生きがいのサポーターでありたい。</p>

著者 (発表年)	論文名 [雑誌] 巻(号), 頁	目的	生きがいの定義
星日二, 栗盛須雅子, 猪野由起子, ほか (2009)	都市在宅高齢者における縁に関連する楽しみと生きがいの実態と主観的健康感との関連 [厚生指標] 56(4), 16-21	都市在宅高齢者の縁に関連する楽しみと生きがいの実態と主観的健康感との関連を明確にすること。	生きがいと楽しみを同等に捉えている可能性がある。
津田理恵子 (2009)	グループ回想法の介入効果：特別養護老人ホーム入所者の生きがい感 [厚生指標] 56(4), 34-40	特別養護老人ホームでクローズド・グループによる回想法の介入を試み、生きがい感スケールを用いて、多層ベースラインで調査を実施し回想法の介入効果を確認すること。	考察で論じている。
染谷倭子 (2010)	日本の高齢者ケアと生きがい [生きがい研究] 16, 40-54	介護の仕事の生きがい、つまり“やりがい”について、著者自身が実施した福祉介護労働の調査結果を中心に検証し、生涯を託す仕事としてやりがいを感ずる、生きがいある仕事として捉えられているか、について論じていきたい。	生きがいとやりがいを同等として捉えている。

生きがいの測定の方法	研究参加者・研究対象 [調査方法・研究デザイン]	研究成果・要約
<p>「楽しみや生きがいは何ですか、主なものを3つを○で囲んでください」とし、13選択肢を示した。</p> <p>1) 運動・スポーツ・散歩など体を動かすこと、2) 趣味・娯楽・読書など、3) 知人や友人・近所とのつきあい、4) サークル・地域活動(町会、高齢者クラブ、ボランティア・社会貢献などへの参加)、5) 旅行・歴史探訪、6) 夫婦や子供や孫との団らん、7) 仕事(アルバイト、内職を含む)、8) 生涯学習(パソコン・俳句・英会話など)、9) 家庭菜園、10) 園芸、11) 森や樹木とのふれあい、12) ハイキング、13) 登山であった。</p>	<p>調査対象都市は、東京都副都心部から電車で30分の人口14万人のニュータウンである。在宅高齢者20,939人(男性9,522人、女性11,417人)である。回答が得られた13,461人(回答率64.3%)の中から、不明者54人を除く13,407人を分析対象とした。</p> <p>[横断調査研究] (関連要因)</p>	<p>都市在宅高齢者において、楽しみや生きがいの対象として、園芸と家庭菜園は、どの年齢階級でも有意差なく選択されることが示された。また、家庭菜園は男性の割合が高いのに対し、園芸は女性の割合が高かった。森や樹木とのふれあい、ハイキング、登山は加齢と共に低下しやすかった。このように、緑に関連する楽しみや生きがいの対象が性別および前期・後期高齢群別にみて変化する可能性が示唆された。緑に関連する楽しみや生きがいがあるほど、主観的健康感を高める可能性が示唆された。よって、緑に関連する楽しみと生きがいが高まる結果的に生存維持に寄与する可能性も推測されたものの、これらの因果を明確にするのは今後の研究課題である。</p>
<p>近藤・鎌田(2003)が作成した「高齢者向け生きがい感スケール(K-I式)」</p>	<p>特別養護老人ホームに入所している高齢者13名を3群に分けて1グループにつき5週間ずつ、介入時期を2カ月間ずらしてグループ回想法を実践し、生きがい感スケールを用いて2カ月ごとに5回(10カ月間)測定した(多層ベースライン)。</p> <p>[介入・プログラム研究]</p>	<p>生きがい感スケールの下位項目では、「私には施設内・外で役割がある」「世の中がどうなっていくのかも見ていきたいと思う」「私は家族や他人から期待され頼りにされている」の3項目において有意な改善が示された。回想法は、生きがい感の中でも、「自己実現と意欲」因子と「存在感」因子と関係が深く、意識と目的、役割感、張り合い感に大きな影響があるといえる。</p> <p>生きがいは、一人ひとりが日々の生活を送っていく上で、生きる意味や目的を見出す重要な意味を持っており、生きがいの特徴から、個性性があり、主体的な生活を送っていく上で生きる喜びにつながる概念といえる。</p>
<p>なし</p>	<p>平成14(2002)年度から平成16(2004)年度の3年間、社団法人雇用問題研究会を通し、厚生労働省の調査研究助成を受けた高齢者介護の実態調査を実施した。初年度の平成14年度には、4年制大学を卒業し社会福祉士資格をもつ人、平成15年度には、介護福祉士資格をもつ人、平成16年度にはホームヘルパーの資格をもつ人、それぞれ全国2,600人を対象にアンケート調査を実施した。現状の具体的把握のために3年間のアンケート調査と並行し、毎年、首都圏、北海道、九州において、30~40人を対象に事例調査を行った。</p> <p>[横断調査研究] (関連要因)</p>	<p>高齢者介護に従事する人々の多くは、自分自身の仕事に生きがい(やりがい)を抱いているものの、労働環境の厳しさと低い収入に将来を描けず、心身ともに消耗し、それを理由に辞職する人が多い。一方でわが国はますます高齢化が進展し、要介護高齢者人口は増えるばかりである。それに対し、近年では介護施設は建設されても、介護スタッフの不足を理由に開所できず、急増する介護ニーズに対応できない状況が生じている。</p> <p>2000(平成12)年4月に介護保険がスタートし、3年ごとに介護報酬の見直しが行われている。2003(平成15)年、2006(平成18)年の改定では、介護報酬は削減された。しかし2009(平成21)年の見直しでは、介護従事者の不足、労働条件の不評を改善するために、初めて報酬基準が3%引き上げられた。この介護報酬の引き上げは、常勤職員の月2万円のベースアップに相当するとされている。しかしながら、それは経営者に義務付けられていることではないため、そのまま賃金アップは期待しにくいといわれている。現状の制度では、有資格者にそれ相応の待遇が保障されていない。社会福祉士については職務規定が曖昧で、実際には介護職員としての業務であったり、介護福祉士とヘルパーの待遇の違いがない現場は少なくない。</p> <p>2005(平成17)年の介護保険の改正では、新たに地域包括支援センターが設置され、社会福祉士資格取得者の配置が義務づけられた。しかしその他の領域では、依然として名称独占の資格で、業務独占でないことは、1990年代に拡大した福祉専門職の魅力を低下させた重要要因の一つといえる。</p>

著者 (発表年)	論文名 [雑誌] 巻(号), 頁	目的	生きがいの定義
吉田成良, 君島奈奈 (2010)	認知症・要介護高齢者等の推計モデルの研究—地域社会における推計のあり方(生きがい健康づくり事業報告)[生きがい研究]16, 77-97	介護保険制度の導入によって, 各自治体は介護事業の的確な運営実施のため, 地域社会(自治体)における認知症・要介護高齢者の将来動向把握が必要とされ, 推計作業が行われている。地域性をみた認知症高齢者と要介護・要支援高齢者の将来推計の研究の概要を紹介すること。	特になし
芳賀博 (2010a)	介護予防の現状と課題[老年社会科学]32(1), 64-69	介護予防の現状と課題, とくにポピュレーションアプローチとしての介護予防に視点を当て論述する。	特になし
芳賀博 (2010b)	高齢者の運動と生きがい[老年社会科学]32(2), 143	わが国に固有であるとされる「生きがい」の意味とその尺度について概観するとともに, 高齢者の運動・身体活動が生きがいの促進につながっているかについて述べること。	「生きがい」とは, その源泉となる対象(物, 人など)が存在し, それに価値を見出したときに得られるポジティブな感情であると整理することができよう。
鄭小華, 黒田研二 (2010)	中国都市部高齢者の日常生活機能低下に関連する要因: 北京市と上海市の高齢者実態調査より[社会福祉学]51(2), 83-95	中国の北京市と上海市において高齢者の実態調査を行い, 両都市の高齢者の日常生活機能低下に共通する関連要因を明らかにし, 中国都市部高齢者の日常生活機能の低下予防に関する示唆を得ること。	特になし
小松紗代子, 斎藤民, 甲斐一郎 (2010)	孫の育児に参加する祖父母の精神的健康に関する文献的考察[日本公衆衛生雑誌]57(1), 1005-1014	国内外の孫の育児に参加する祖父母の精神的健康に焦点を当てた研究を整理し, 今後の研究を進めていく上での課題を明らかにすること。	特になし

生きがいの測定の方法	研究参加者・研究対象 [調査方法・研究デザイン]	研究成果・要約
なし	推計の基礎データとなる要介護・要介護・認知症高齢者の平均割合には、福岡県福岡市、東京都江戸川区、山形県山形市の3地域のデータの割合を算出し、その平均値を日本全域の認知症高齢者の割合の一つのモデルとし、将来推計を算出する基礎データとした。 [データベースを活用した分析]	2008（平成20）年の3地域の平均割合による認知症高齢者の将来推計は、2005（平成17）年で305.8万人、2010（平成22）年で376.9万人、2015（平成27）年で449.0万人、2020（平成32）年で511.1万人、2025（平成37）年で559.2万人であり、推計の基準年である2005（平成17）年から2025（平成37）年までの20年の間に、認知症高齢者の数は1.84倍に増加していた。
なし	文献・資料 [論考]	介護予防の枠組みは「新予防給付」「特定高齢者施策」「一般高齢者施策」からなる。制度創設からこれまで「新予防給付」と「特定高齢者施策」には多くの時間を割いてきたが、特定高齢者の把握方法を含め効果的な介入プログラムの確立までには至っていない。一方で活動的な高齢者を対象とする「一般高齢者施策」にまで手が回らないのも現状である。積極的な健康・生きがいづくり対策としてのポピュレーション・アプローチにもっと力点が置かれるべきである。従来の研究者主導のトップダウン的な介入手法にこだわってはいけず、現実の問題解決は図れない。研究者自らがフィールドに出て、住民、行政と協働しながら計画・実践・評価に携わってこそ真に効果的な介護予防プログラムを見出すことが可能になってくると考えられる。
近藤・鎌田（2003）が作成した「高齢者向け生きがい感スケール（K-I式）」と長谷川ら（2007）が作成した「高齢者のための生きがい対象尺度」の紹介	文献・資料 [論考]	身体活動が高齢者の生きがい感を増すことにつながるについてのメカニズム研究は今後の課題となっている。また、これまでの研究は、観察型の研究が主体であった。運動による介入が、生きがいや主観的QOLへ及ぼす効果評価の研究も必要である。その際最後まで介入プログラムに参加できた者のみを分析対象とするのではなく、ベースライン調査に参加した全対象者について評価がなされるべきことはいままでもない。
生きがい対象として「家族との交流」「友人や近隣との交流」「読書、新聞、テレビなどの楽しみ」「自分の趣味活動」についてそれぞれ「はい」または「いいえ」	北京市の調査地域として2009年5月31日から6月11日にかけて行った。上海市の調査地域は2009年1月3日から22日にかけて行った。調査対象は現地の戸籍をもち、在宅生活をしている高齢者とした。調査対象者の年齢について、鄭（2005）の調査と比較できるように70歳以上とした。調査対象者数は両都市とも750人とした。 [横断調査研究] (関連要因)	IADL低下とADL低下と交流・外出、生きがいの関連について有意差を認めた。交流・外出が少なく、生きがいをもっていないことによる日常生活機能の低下が考えられるが、日常生活機能の低下によって、交流・外出が少なくなり、生きがいをもてなくなることも考えられる。①低学歴の人、配偶者のいない人、子どもの人数の多い人、子どもからの生活費を収入源とする人ではIADLの低下割合が高い。②高い年齢層、年金が収入源ではない人ではADLの低下割合が高い。③食生活が良好でない人、閉じこもりがちの人、生きがいをもっていない人ではIADLおよびADLの低下割合が高い。中国都市部高齢者の日常生活機能の低下予防には、教育の機会が乏しい人々への保健知識の普及、配偶者のいない人または閉じこもりがちの高齢者への生活支援と生きがいづくり、所得・医療などの社会保障制度の強化が重要である。
なし	国内文献は、医学中央雑誌刊行会の医中誌Web（Ver.4）Advanced Mode、株式会社メテオの医学文献検索サービスMedical*Online、国立情報学研究所のCiNii、タイヤ高齢社会研究財団のDial社会老年学文献データベースを用いた。国外文献は、Web of KnowledgeとPubMedを用いた。文献の年代について制限は設けていない。 [文献調査]	国内外の文献から、孫育児へ参加している祖父母は精神的に良い影響（主観的幸福感・生きがい）と悪い影響（抑うつ・不安）の両方を受けていること、精神的健康を左右する要因が複数考えられることが示された。今後の研究課題としては孫育児の定義を明確にして研究を進めること、研究のデザインや解析の方法を工夫すること、祖父母の身体的な健康にも焦点を当てた研究を進めることが挙げられる。

著者 (発表年)	論文名 [雑誌] 巻(号), 頁	目的	生きがいの定義
長谷川明弘 (2010)	農村地域在宅高齢者における「生きがい」と身体・心理状況, 生活機能, 生活習慣および社会活動性との関連 [Hearty(金沢工業大学心理科学研究所年報・金沢工業大学臨床心理センター報)] 6, 15-23	農村地域在宅高齢者の健康実態調査で尋ねた「生きがい」の有無に着目し, 「生きがい」の有無に関連する要因を, 心理・身体・社会活動性ならびに生活機能や生活習慣などの総合的観点から, 「生きがい」の関連要因を検討すること。	長谷川ら (2003b) は, 「生きがい」を, 「今ここで生きているという実感, 生きていく動機となる個人の意識」と定義した。「生きがい」とは, 自己あるいは主体が今ここで実感している「生きがい」感, 「生きがい」意識, あるいは「生きがい」の対象に伴う感情と呼ばれる「生きがい」を感じている精神状態と, それらが生じてくる「生きがい」の対象もしくは「生きがい」の源泉との総和あるいは相乗の結果とした (長谷川ら, 2003a)。
湯原悦子 (2010)	男性介護者による高齢者虐待: 先行研究の到達点 [高齢者虐待防止研究] 6(1), 8-12	男性介護に関する先行研究をレビューし, 男性介護者, 男性が加害者となる高齢者虐待や介護殺人に焦点を当て, 特徴と今後の課題を導き出すこと。	特になし
内田陽子 (2011)	短期間で改善しやすい認知症ケアのアウトカム評価に影響する因子: 看護学生の実習前後の評価分析から [日本認知症ケア学会誌] 10(1), 11-19	看護学生の認知症高齢者に対する実習に着目し, 短期間で改善しやすい認知症ケアのアウトカム評価に影響する因子 (アウトカムを高めるケア実施項目, アウトカムに影響する認知症高齢者の背景) を明らかにするとともに, 短期間でも認知症高齢者の状態改善を目指すケアの方策を検討すること。	生きがいを趣味と同等に捉えていた可能性がある。
北澤一利 (2011)	ふまねっと運動で高齢者が地域福祉の担い手に! (生きがい健康づくり事業報告) [生きがい研究] 17, 70-102	学生の社会経験の場をつくることと, 地方や地域が抱えている高齢化や過疎化といった社会的課題の解決策を研究することを目的に, 北海道内で地域住民の健康づくりを支援する活動を行う「NPO法人地域健康づくり支援会ワントゥスリー」を設立して運営してきたこれまでの活動を報告すること。	特になし

生きがいの測定の方法	研究参加者・研究対象 [調査方法・研究デザイン]	研究成果・要約
生きがいの有無	2000年10月1日現在、新潟県Y町に在住する65歳以上の全高齢者1,673名を対象とした。調査期間は、2000年11月3日から11月12日であった。調査の結果1,544名から回答が得られ(応答率92.3%)、その中から「生きがい」の有無に関する質問の回答に不備のなかった1,515名(男性602名、女性913名)を分析対象とした。 [横断調査研究] (関連要因)	女性の前期および後期高齢者では、交友活動と「生きがいあり」の間に正の関連が認められた。また性別に関係なくすべての世代において、散歩・運動・趣味などの余暇活動ならびに知的能動性は、「生きがいあり」との間に正の関連が示された。
なし	文献・資料。文献選択の基準は示されていないものの引用文献は27篇あった。 [論考]	男性は女性以上に介護を生きがいとしてとらえており、介護に対して高い肯定的価値を抱く傾向がある。男性は介護そのものも大変だが、炊事・掃除といった家事にも不慣れであり、家事能力の有無が男性介護者の困難性にかかわる最初の分岐点となる。高齢者虐待では、虐待する息子は主に「粗暴な性格」「精神的に未成熟、依存心が強い」の2タイプに分類できる。男性が加害者となる介護殺人では、嗜癖的に介護を続ける状態で介護を継続困難にする要因が発生すると、介護意欲をそがれることで目的を失い、殺人・心中に至るリスクが高まる点に注意が必要である。今後、介護者が無理のない形で介護に向き合える介護支援システムを構築していくことが、高齢者虐待や介護殺人防止の有効な手立てとなりうる。
「趣味・生きがいの実現」のなかで「本人の過去・生い立ちの理解」と「趣味を生かしたレクリエーションを計画・実施」	A大学で2009年10月～2010年2月までに介護老人保健施設で老人看護学実習を行った3年生83人のうち、認知症高齢者を受け持ち、調査の協力が得られた看護学生とその学生が受け持った認知症高齢者それぞれ45人を対象とした。なお、対象となる認知症高齢者は65歳以上で、厚生労働省の認知症高齢者の日常生活自立度判定基準で1以上の者、かつデータ提供について本人もしくは家族に同意を得られた者とした。 [横断調査研究] (関連要因)	アウトカム改善者を実施率が高かったケア項目の中で「趣味・生きがいの実現」の改善者には「趣味を生かしたレクリエーションを計画・実施」「道具の工夫」「個別に考えた催しを企画・実施」のケア実施率が高かった ($p < 0.05$)。
なし	文献・資料 [実践報告]	ふまねっと運動とは、50センチ四方のマス目でできた大きな「あみ」を床に敷き、この「あみ」を踏まないようにゆっくり慎重に歩く運動を平成16(2004)年に北海道教育大学釧路校で開発し、歩行機能が低下した高齢者でも安心して参加でき、転倒予防や認知症予防の効果が期待できる。ふまねっとサポーター養成事業は、北海道以外のどの地域においても、高齢者の健康づくりと生きがい提供の方策として、また、地域福祉のボランティア人材を養成する事業として、ある程度の有効性が認められるのではないかと感じている。

著者 (発表年)	論文名 [雑誌] 巻(号), 頁	目的	生きがいの定義
本橋豊, 金子善博, 藤田幸司 (2011)	高齢者の社会的孤立と自殺, 自殺予防対策 [老年精神医学雑誌] 22(6), 672-677	高齢者の地域での社会的孤立は, うつ状態を引き起こし, 結果として自殺のリスクとなることが考えられることから, 今後の自殺対策のなかで十分に考慮されなければならない要因と考えられるので問題提起すること。	特になし
石原房子, 長田久雄 (2011)	Tornstamの老年的超越尺度の構造の検討 [応用老年学] 5(1), 20-27	老年的超越の初期段階であると推測される前期高齢者を対象としてTornstamの老年的超越尺度 (Gerotranscendence Scale) の因子構造および関連要因の検討を行うこと。	特になし
久保温子, 村田伸, 大田尾浩, ほか (2012)	在宅高齢者における運動器不安定症該当者の身体・認知・心理機能の特徴 [日本在宅ケア学会誌] 16(1), 44-50	身体・認知・心理機能を比較検討し, 高齢者が健康寿命を延伸できるよう効果的な在宅ケアを行うための基礎的な研究を行うこと。	特になし
山登一輝 (2012)	高齢者と子どもをつなぐパソコンお絵描き教室: NPO法人do beくらぶの活動 (生きがい健康づくり事業報告) [生きがい研究] 18, 119-145	ICT (情報通信技術) 社会の進展によって存在感を強めている, パソコンを活用した高齢者の生きがい健康づくり事業について報告すること。	特になし

生きがいの測定の仕方	研究参加者・研究対象 [調査方法・研究デザイン]	研究成果・要約
なし	文献・資料 [論考]	高齢者の社会的孤立は生きがいの低下をもたらす孤立死を増加させると、高齢者白書は指摘している。また、高齢者の社会的孤立は社会的排除につながり社会的支援が乏しいなかで、自殺のリスク要因になると考えられる。大震災の被災者の心のケアにおいても自殺予防の観点は重要であり、官民連携による自殺予防活動が必要である。高齢者の社会的孤立に起因する自殺を防ぐためには、包摂的社会政策としての自殺対策を総合的に展開していくことが求められる。
なし	A県生きがい大学校受講生248人の中で221人から回答を得た(回収率89.1%)。データ不備がなかった203人(81.9%)を分析対象とした。分析対象の内訳は、男性93人(45.8%)、女性110人(54.2%)であり、平均年齢は66.3歳(SD=4.2歳)であった。 [横断調査研究] (関連要因)	Tornstamにより提唱された老年的超越理論に基づけば尺度がCosmic.Self.Social and Individual relatioから構成されるといわれている。老年的超越尺度の因子構造を確証的因子分析により検討した結果、尺度を構成する3因子のうち、Cosmicのみ属する全ての項目と有意な関連を示した。Cosmicに影響する要因の検討を行った結果、年齢、友人に会うこと、親戚に会うことが影響要因として示された。今後、日本人高齢者に即した老年的超越モデルを検証するとともに、老年的超越の発達メカニズムを検討していく必要がある。
視覚アナログ尺度(Visual Analogue Scale:VAS)【10cm】を用いて、両端を「とても生きがいを感じる」と「まったく生きがいがない」として生きがい感を評価した。	2008～2010年の毎年8～9月に調査協力が得られた在宅高齢者522人を対象として、運動器不安定症に該当する高齢者146人(男性14人、女性132人、平均年齢78.0±5.6歳)と該当しない高齢者376人(男性90人、女性286人、平均年齢71.2±7.0歳)であった。 [横断調査研究] (関連要因)	年齢と性を調整した共分散分析を行った結果、独立して有意差が認められたのは、歩行能力の指標とした歩行速度と10m障害物歩行時間、主観的健康面の3項目のみであった。生きがい感には有意差は認められなかった。有意差の認められなかった項目のうち、筋力(握力、大腿四頭筋筋力)や認知機能(MMSE,TMT)が加齢と性による影響を受けることは先行研究と矛盾しない。また、心理機能のうち生活満足度と生きがい感についても加齢の影響を受けることが報告されており、先行研究と一致した。運動器不安定症に該当する高齢者は、歩行能力の低下と自分の健康に不安を感じていることが特徴として明らかとなった。
なし	全国各地で「パソコンお絵描き教室」の普及活動を展開しているNPO法人do beくらぶを事例として取り上げた。 [実践報告]	パソコンを活用した高齢者の生きがい健康づくり事業の事例について、「パソコンお絵描き教室」を展開する「do beくらぶ」の活動を報告した。この活動は、高齢者と子どもをつなぐ世代間交流の道具として、新たにパソコンが加わったことを感じさせる。高齢者がパソコンを操作できるようになって自信を深め、そのスキルを持って子どもにパソコンお絵描きを教える「パソコンお絵描き教室」は、高齢者を元気にし、子どもを笑顔にする、高齢者の生きがい健康づくり活動のモデルとなりうる取組みとして評価できる。東京西部から始まった活動は、公的機関や助成団体の支援を得て、今や関東地方から全国へ広がりがつつある。

著者 (発表年)	論文名 [雑誌] 巻(号), 頁	目的	生きがいの定義
鶴若麻理 (2012)	高齢者のナラティブを通してみた高齢期と生きがい [生きがい研究] 18, 16-34	高齢者自身の語り(ナラティブ)に注目し, その語りから, 高齢期における生きがいの実態を明らかにすること。	考察で論じている。
星旦二 (2012)	都市在宅高齢者における生きがいと3年後の健康長寿との因果構造 [生きがい研究] 18, 35-64	都市在宅高齢者における生きがい対象の実態と3年後の要介護状況と生存日数について, 社会経済要因と食を含む生活習慣, それに身体的精神的社会的健康との因果構造を追跡調査によって明確にすること。	生きがいと楽しみを同等に捉えていた可能性がある。

生きがいの測定の仕方	研究参加者・研究対象 [調査方法・研究デザイン]	研究成果・要約
<p>「これまでの生きてきた道のりをふまえて、あなたが生きがいであると感じていることについて、自由に話をしてください」という一つの方向づけを行った。</p>	<p>特別養護老人ホーム入所者、特定有料老人ホーム入居者、通所リハビリテーション・デイケアに通う高齢者、ホスピスに入院している高齢末期がん患者、さらに長寿でしかも活動的な高齢者（新老人の会）などの5つのグループごとに、主として後期高齢者を対象とした105名（男性36名、女性69名：平均年齢80.1歳）である。内訳は、新老人の会会員51名（男性24名、女性27名、平均年齢78.2歳）、通所リハビリテーション・デイケア通所者22名（男性9名、女性13名、平均年齢78.9歳）、特定有料老人ホーム入居者7名（男性1名、女性6名、77.8歳）、特別養護老人ホーム入所者21名（男性1名、女性20名、平均年齢86.7歳）、ホスピス入院者4名（男性1名、女性3名、平均年齢80.5歳）であった。 [質的研究]</p>	<p>高齢者の語り（ナラティブ）から浮かび上がる高齢者の生きがいをまとめると、生きがいを感じさせるものとして、①連帯感（家族、友人、社会、地域などとの連帯）、②充実感・満足感・幸福感（現在の生活、今までの人生の満足など生活全般から得られる安定や充実）、③達成感・追求感（自己の向上を促すような学習、奉仕活動、創造的活動、仕事などにおける達成または追求）、④有用感（自分の能力を発揮して役に立っていると思える感情・感覚）、⑤価値（個人の生き方、信念、生活信条に関係する領域）という5つが示された。これらは互いに独立した実在ではなく、相互にかかわりを持っていた。</p>
<p>「楽しみや生きがいは何ですか、あてはまるものを5つまで○で囲んでください。」 1)運動・スポーツ、あるいは散歩など体を動かすこと 2)趣味・娯楽・読書 3)知人や友人・近所とのつきあい 4)サークル・地域活動（町会、高齢者クラブ、ボランティア・社会貢献などへの参加） 5)旅行など 6)家族との団らん 7)仕事（アルバイト、内職を含む） 8)孫・ひ孫の世話 9)生涯学習（パソコン・俳句・英会話など） 10)家庭菜園 11)園芸 12)森や樹木とのふれあい 13)ハイキング 14)登山 15)とくにない</p>	<p>A市高齢者16,462人全員を調査対象とした。2001年9月に回答が得られた13,195人（回収率80.2%）を基礎的データベースとし、3年後に同様な質問紙調査によって同一人を追跡調査し、データをリンクした。初回調査から3年間に市外に転居した505人と死亡した914人、および2回目の調査に回答しなかった2,642人と、2001年時点で85歳以上の972人を除き8,162人を解析した。生存日数は、2004年9月1日から2007年8月31日までに死亡した男性278人と女性160人の生存日数を算出し、それ以外の1,064日生存を確認した。 [縦断調査研究] (因果関係)</p>	<p>高齢者が生きがいを持つことが、その後の健康長寿つまり、生存を維持し、要介護になりにくい状況を直接に規定するのではなく、生きがいを持てるような状況であれば、そのような集団が結果的に健康寿命を維持していることを示唆しているかもしれない。健康長寿を維持するために寄与すると考えられていた、生きがいは、食を含む生活習慣と同様、社会経済的要因を基盤とし、その後の健康三要素を交絡要因とする因果構造がみられる可能性が示唆された。都市高齢者の生きがいは、社会経済的要因に支えられ、その後の健康三要素を経て規定されることから、これらの因果構造を踏まえた健康支援の重要性が示唆された。</p>

著者 (発表年)	論文名 〔雑誌〕 巻(号), 頁	目的	生きがいの定義
岡村絹代 (2012)	過疎地における女性独居高齢者の食生活の構成要素 〔介護福祉学〕 19(1), 16-25	女性独居高齢者の食生活の意識を明らかにし、地域に根づく食生活支援のあり方を検討する資料とすること。	特になし
デーケン, アルフォンス (2012)	よく生き よく笑い よき死と出会う：超高齢社会の死生観 〔老年精神医学雑誌〕 23(0), 1175-1180	人生を豊かに生きるために今後どのように考察すべきかを「生と死を考える」「生きがいの探求」「発想の転換」「人生におけるユーモアの役割」という4点から述べたい。	特になし
戸田淳仁 (2012)	働き方と生きがい：高齢者が生きがいを持って働くためには(特集 老後に向けた生活と生きがい) 〔年金と経済〕 31(1), 28-38	労働者のうちどのような人が仕事に対して生きがいを感じているのだろうか、そして生きがいを持って働いている人はどのような人なのだろうかについてアンケート調査を基に分析を行いたい。この結果を通じて高齢者が生き生きと働くためには何が必要となるのかについて考察したい。	特になし
芳賀博 (2012)	2. アクションリサーチによる健康長寿のまちづくり 〔日本老年医学会雑誌〕 49(1), 33-35	アクションリサーチに基づく地域での健康づくり活動の実践を概説するとともに、今後の方向性について論ずること。	高齢者が望む「健康像」は、単なる病気の予防や長生きにとどまらず、活動性の維持や主観的健康感あるいは生きがいなどの精神的充実へとその多様性を増している。

生きがいの測定の仕方	研究参加者・研究対象 [調査方法・研究デザイン]	研究成果・要約
なし	<p>過疎高齢化が進行しているA町の女性高齢者とした。調査はA町にある5か所の生きがい活動支援サービス事業で実施された。調査対象者の選定条件は、①独居歴3年以上②上の女性であること、厚生労働省による障害老人の日常生活自立度が「ランク（何らかの障害等）を有するが日常生活はほぼ自立しており、独力で外出する」であること、③要介護認定を受けていない65歳以上の高齢者であること。条件を満たした対象者11名の平均年齢は81.2歳であった。独居生活歴は15～30年で全員配偶者は死亡していた。調査は、平成22（2010）年9月～10月に調査を行った。面接時間は一人30分程度とした。 [質的研究]</p>	<p>本研究における女性独居高齢者の食生活は【不便な食環境への適応】【健康であるための努力】【楽しく食べることへの希望】【人とのつながりへの期待】で構成されていた。女性独居高齢者の食生活は高齢者自身が培ってきた知識や経験の活用を基盤に成り立っていた。食環境が不便であっても自分でできることは自分で行いながら、必要なときは他者のサポートも受け、健康と楽しみと人とのつながりを意識した食生活を送っているといえる。</p>
なし	<p>特になし [論考]</p>	<p>日本人の平均寿命の延長につれて、いかに意味のある老年期を送るかという課題が、超高齢社会に向けての主要な課題として浮上してきた。多くの人は退職後、2、30年に及ぶ老年期を過ごす。人生の約3割を占める、この期間をどう生きるのか、人生について深く考察し、発想の転換を勧めたい。</p>
<p>「どのようなことに生きがいを感じているか」を13の選択肢から3つを選ぶ形式と、生きがいを表すのに最も適当なものを選んだうえで、「生きがいを現在持っているか否か」の二つの質問をしている。</p>	<p>年金シニアプラン総合研究機構が実施した「第5回サラリーマンの生活と生きがいに関する調査（2011）」を用いる。調査は、株式会社クロスマーケティングのモニターサンプルのうち、35～74歳の男女で、厚生年金被保険者および厚生年金受給者とそれらの配偶者5,145人を対象としている。そのため、国民年金の第1号被保険者に該当する者は含まれないことに注意すべきである。調査期間は2011年10月25日～28日である。 [横断調査研究] (関連要因)</p>	<p>仕事に現在生きがいを感じている者の割合を見てみると、男性は3割前後であり、年齢階層によって大きな違いはない。しかし、女性では65～69歳で年齢計より10ポイント以上高い一方、年齢の若い層では低い傾向も多少みられる。仕事に現在生きがいを感じていて、かつ現在生きがいを持っている者の割合は、男性では年齢計で2割が該当する。ただし年齢層が高くなるにつれてその割合が高くなっている傾向がみられる。女性では年齢計で15.4%が該当し、男性同様年齢が高くなるにつれて、その割合が高くなる傾向が多少みられる。特に男性高齢者においては、仕事内容に満足をしている生きがいを感じやすく生きがいを持ちやすいことが分かった。定年前の世代では有意な影響がある職場での地位の高さや職場の人間関係・雰囲気はあまり影響を与えていないことが分かった。男性高齢者において賃金の満足度は生きがいに対しては影響を与えない。男性の35～59歳においては職場での地位の高さや職場の人間関係・雰囲気の仕事に対して生きがいを感じるためには重要である。女性については仕事や職場についての満足度において仕事内容のみが統計的に有意な結果となっていて、職場での地位の高さや職場での人間関係・雰囲気は生きがいとあまり関連がないということも分かった。女性においては特に仕事内容に対して満足させることが生きがいを持って働くことにつながるであろう。</p>
なし	<p>文献・資料 [論考]</p>	<p>活力ある高齢社会の創造に向けてどのようなアプローチが有効なのかについての方法論を確立するためには、住民参加型の「生活モデル」に立脚したアクションリサーチへのパラダイムシフトが必要であると考えられる。研究者の役割は、住民の間に芽生えた問題解決に向けた共感の輪、すなわちcommunity empowermentが広がるように支援することであり、住民、行政等の当事者とチームを組み、協働で設定した目標を達成できるように支援することである。</p>

著者 (発表年)	論文名 〔雑誌〕 巻(号), 頁	目的	生きがいの定義
飯島勝矢 (2012)	1.何が求められているのか? 千葉県柏市・健康長寿都市計画から:「Aging in Place」を目指して 〔日本老年医学会雑誌〕 49(6), 693-696	東京大学・高齢社会総合研究機構(ジェロントロジー)は千葉県柏市をフィールドとして課題解決型の社会実証研究(Action Research)を行いながら,地域のまちづくりを多角的な視点で取り組んでいることの紹介すること。	特になし
今井忠則, 長田久雄, 西村芳貢 (2012)	生きがい意識尺度(Ikigai-9)の信頼性と妥当性の検討 〔日本公衆衛生雑誌〕 59(7), 433-439	「生きがい」を測定する簡便な尺度の実用化のために,9項目から構成される「生きがい意識尺度(Ikigai-9)」の信頼性と妥当性を検討すること。	生きがい意識とは「現状の生活・人生に対する楽天的・肯定的感情と,未来への積極的・肯定的態度,および,社会との関係における自己存在の意味の肯定的認識から構成される意識である」と操作的に定義される(今井ら,2009)。
金子勇 (2013)	高齢者の生きがい研究の帰結と展望(「生きがい研究」の成果と課題) - (分野別の整理・分析) 〔生きがい研究〕 19, 74-91	高齢者の生きがい研究の帰結と展望を論じること。	生きがいを「生きる喜び」として定義した。その上で「安定した私生活の中で,自分を活かし,人生の意味を確認して,自由な関わりとの社会関係をもち,未来への展望が可能だ」と感じる意識状態」とする観点を堅持して,オリジナルな中間的な総括を行った。
山登一輝 (2013)	「生きがい研究」にみる高齢者の生きがい健康づくり事業の動向(「生きがい研究」の成果と課題) - (推進機構・助成団体等の事業動向) 〔生きがい研究〕 19, 94-109	都道府県レベルで高齢者の生きがい健康づくりを推進する「明るい長寿社会づくり推進機構」の事業や過去に助成金を交付していた団体の活動についての記事を中心に取り上げ,これまでの生きがい健康づくりの事業の一端を紹介すること。	特になし
西山啓 (2013)	高齢者の心に響く交通安全教育(128)12.「高齢者交通安全」問題再考(73)個人の老化と社会全体の老化を考える(4)生きがい感を高めよう 〔交通安全教育〕 48(1), 19-23	人生収穫を寿ぐ感謝祭の必要を提案すること。	特になし
岡田唯加, 古城幸子 (2014)	山間地域で暮らす高齢者の生きがい感とその関連要因 〔インターナショナル nursing care research〕 13(2), 53-60	山間部に暮らす高齢者の生きがい感とその関連要因を明らかにし,高齢者支援の課題への示唆を得ること。	特になし

生きがいの測定の仕方	研究参加者・研究対象 [調査方法・研究デザイン]	研究成果・要約
なし	文献・資料 [実践報告]	いつまでも住み慣れた場所で安心して自分らしく暮らす体制づくりの一環として、高齢者の「生きがい就労」の実現を図っている。これは人とのつながり、そしてコミュニティビジネスへの展開をしている。60歳以上の高齢者が就労セミナーおよび就労勉強会に対して積極的に受講し、そして柏市内の様々な事業者と接する機会を持ち、セカンドライフのための就労を開始している。具体的な業務は、農業、子育て支援、教育、コミュニティ食堂など多様な部門を希望することができる。
生きがい意識尺度を開発することが目的である。	茨城県の住民参加型介護予防事業に参加した地域中高年者577人を対象に調査を実施し、回収は542人（回収率93.9%）あり、そのうち60歳以上の有効回答者428人（男性128人、女性300人、平均年齢65.4±4.3歳、範囲60～85歳）を分析対象とした。調査は、2007年6月から2008年2月に行われた。 [尺度構成]	尺度の信頼性は、全体で $\alpha=.87$ 、下位尺度ごとでは $\alpha=.76\sim.82$ であった。また理論的予測と一致し、併存的妥当性が確認された。さらに確認的因子分析の結果、高次因子モデルの適合度はGFI=0.95等と良好であり、因子的妥当性が確認された。60歳以上の地域中高年者を対象とした場合のIkigai-9の得点分布・信頼性・妥当性は良好であり、高い実用性が示された。
生きがい項目は「仕事・職業」「社会奉仕活動」「信仰」「スポーツ」「旅行」「マスコミ」「一人趣味活動」「仲間趣味活動」「家族団らん」「食事・飲酒」「友人近所交際」「子や孫の成長」の指標で表した。	文献・資料 [論考]	『生きがい研究』の18年間、さまざまな定義による高齢者の生きがい測定がなされてきた。その歴史的成果を学びつつ、それと並行して私もまた、いくつかの調査を行ってきた。得られた結果は、高齢者個人が表明する生きがいは「生きる喜び」としても、その内容には将来への希望軸とするもの、人生の意味を強調するもの、日々の力が溢れた生活充実感を指すものなどさまざまであった。今回、それらを裏返しアノミー論で総括してみたのが本研究であり、今後とも引き続き質的事例研究を中心にして、高齢者の生きがい研究にも目配りをしていきたい。
なし	『生きがい研究』の第1巻から第18巻まで [論考]	高齢者の生きがい健康づくり事業に関する記事23本を紹介してきた。政策的・事業的視点からみた『生きがい研究』の意義は、①推進機構の事業に関する情報発信、②“草の根”的活動の紹介、③事業推進のための基礎資料の提供であった。高齢者の生きがい健康づくりに関するさまざまな論考を扱うわが国唯一の研究紀要として、今後は機関誌『生きがい研究』のさらなる充実が期待される。
なし	文献・資料 [論考]	高齢者たるもの人生の成熟実りの時期（つまり現在）に際して『今まで歩んできた道程の「収穫感謝祭」を考えてみるべきではないか』と言いたい。古来人間には食物の恵みに感謝するという良き習わしが引き継がれてきた。豊年を祝うお祭りも謝肉祭もそういったものの現れであろう。そこで言いたい。代々引き継がれてきた精神文化の中には人の生きがいという素晴らしい所産があったはずである。それは人により家族により民族によって多少の違いはあったが、それを心の張りとして現在に至ってきていることを忘れてはならぬ。
視覚アナログ尺度（Visual Analogue Scale: VAS）【10cm】を用いて、生きがい感について左端を0点：生きがいを全く感じていない、右端を最高の状態（100点：生きがいを強く感じている）	A県の山間過疎地域にあるB市の老人クラブ等に所属している高齢者231人であった。2012年8月上旬から下旬 [横断調査研究] (関連要因)	本研究の調査対象者の生きがい感に影響を与える要因で有意差がみられたのは、「外出の頻度」「不安・ストレスの有無」「健康感」「サポート提供」「生活費に対する満足感」「孫の有無」「仕事の有無」の7項目であった。このうち、「健康感」では有意確率が1%未満であり、生きがい感との最も強い関連要因であった。

著者 (発表年)	論文名 〔雑誌〕 巻(号), 頁	目的	生きがいの定義
小野公一 (2014)	高齢者の職業意識と生きがいに関する探索的研究：男性高年齢従業者の分析（『生きがい研究』創刊20周年記念表彰論文） 〔生きがい研究〕 20, 6-24	50歳代と60歳以上の労働者を取り上げ、正社員と非正社員の職務態度や生きがいの比較を通じて、高齢者が働くことにどのような意味づけをしているのかを探ること。	特になし
星旦二 (2014)	都市在宅高齢者における楽しみと生きがいの実態とその三年後の累積生存率との関連（『生きがい研究』創刊20周年記念表彰論文） 〔生きがい研究〕 20, 25-36	都市在宅高齢者の楽しみと生きがいの実態別にその3年後の生存との関連を明確にすること。	生きがいと楽しみを同等に捉えていた可能性がある。
片岡佳美, 吹野卓 (2014)	「高齢者の生きがい」再考：生きがいのもう一つの視点（『生きがい研究』創刊20周年記念表彰論文） 〔生きがい研究〕 20, 37-51	生きがいとは、特に高齢者の生きがいとは、一体何だろう。本稿では、われわれの分析結果を示し、その点についてあらためて考察すること。	特になし

生きがいの測定の仕方	研究参加者・研究対象 [調査方法・研究デザイン]	研究成果・要約
	<p>中堅企業S社（金融業，保険業）の役員を除く正社員・非正社員合わせて1,330人の中から回収できた1,276（回収率95.9%）の中の有効回収は1,214（有効回収率91.3%）であった。本研究では、そのうちの高齢者（55歳以上）のデータを分析する。 [横断調査研究] (関連要因)</p>	<p>生きがいを感じる程度については、正社員と非正社員ではほとんど差がない。「生きがい」といって何を連想するのかは、上位3つまで挙げてもらうと、正社員では【価値観や生き方を大切に自分らしく生きること】58.6%であるのに対し、非正社員は【健康に暮らすこと】62.3%で、互いに他方よりも20%以上高い割合を示している。しかしながら【仕事】は複数選択で、正社員で3.4%を示す以外は選択されず、単一選択は1名で、1%にも満たない。 正社員は、【家族や家庭を守ること】や【家族と家庭生活を楽しむ】など家族関連の割合も高いが、【能力を發揮し自分らしく生きること】の割合も3分の1を超えており、自分らしさへのこだわりが強い。非正社員は、家族関連の割合は正社員よりも高く、【金銭的な豊かさの確保・増進】の割合も高い。相対的に、正社員は自己実現的な側面が強く、非正社員は、自分の健康を軸に家族関係も含め、基本的な生活維持への訴求が強いように思われる。高齢者では、生きがいは1因子構造をとっていると考えたほうがよいようにも思える。ちなみに16項目の信頼性（Cronbach's α）は0.929であり、項目数が多いことを勘案しても十分な信頼性が担保されているといえよう。</p>
<p>「楽しみや生きがいは何ですか、主なものを3つを○で囲んでください」とし、13選択肢を示した。1)運動・スポーツ・散歩など体を動かすこと、2)趣味・娯楽・読書など、3)知人や友人・近所とのつきあい、4)サークル・地域活動（町会、高齢者クラブ、ボランティア・社会貢献などへの参加）、5)旅行・歴史探訪、6)夫婦や子供や孫との団らん、7)仕事（アルバイト、内職を含む）、8)生涯学習（パソコン・俳句・英会話など）、9)家庭菜園、10)園芸、11)森や樹木とのふれあい、12)ハイキング、13)登山</p>	<p>A市高齢者16,462人全員を調査対象とした。2001年9月に回答が得られた13,195人（回収率80.2%）を基礎的データベースとし、3年後に同様な質問紙調査によって同一人を追跡調査し、データをリンクした。初回調査から3年間に市外に転居した505人と死亡した914人、および2回目の調査に回答しなかった2,642人と、2001年時点で85歳以上の972人を除き8,162人を解析した。生存日数は、2004年9月1日から2007年8月31日までに死亡した男性278人と女性160人の生存日数を算出し、それ以外の1,064日生存を確認した。 [縦断調査研究] (因果関係)</p>	<p>楽しみ生きがいとして最も多く選択されたものは、趣味活動（男性57.5%、女性54.0%）であり、次いで旅行、運動の順であった。男性より女性で年齢が若い群の生存が維持されていた。主観的健康感が高いこと、買い物に行けること、知的活動得点が高いことが、楽しみと生きがい要因では、身体を動かすことと仕事を選択した人の生存が統計学的に有意に維持されていた。楽しみと生きがい要因であるサークル活動と緑に関する生きがい得点は、生存維持にとって弱い有意な要因であった。</p>
<p>「あなたが思う生きがい」を自由記述で尋ねた。また「生きがいの有無」について「しっかりと持っている」「なんとなく持っている」「ほとんど持っていない」「まったく持っていない」という回答選択肢を用いた。</p>	<p>文献・資料 [論考]</p>	<p>生きがいとはそもそも何だろうか。今日それは、「具体的」[「すること」という点から捉えられる傾向があるように思われる。そのため、高齢者の生きがいについても、「地域活動やボランティア、生涯学習などを通じた社会参加によって、獲得しなくてはならない」という規範が形成されがちである。しかし、われわれの分析結果は、生きがいが、特に高齢者では、そのように「具体的」に何かを「すること」というより、「抽象的」なまま、そこに「あること」から得られていると語られる傾向を示していた。私は生きている、生きてきた、と、あるがままの自分自身を受け入れる。そうしたときに生きがいを感じる人が高齢者には多いのである。</p>

著者 (発表年)	論文名 [雑誌] 巻(号), 頁	目的	生きがいの定義
大場宏美 (2014)	地域高齢者のgenerativityと社会参加活動との関連構造 (『生きがい研究』創刊20周年記念表彰論文) [生きがい研究] 20, 52-67	わが国の地域高齢者の「generativity」と社会活動性および地域帰属意識との関係について、性・年齢別の違いを明らかにすること。	特になし
青木邦男 (2014)	在宅高齢者の精神的健康状態と社会関係、生きがい感、役割および身体的健康状態ほかの関連性 [老年精神医学雑誌] 25(8), 916-927	高齢者の主要な心的不調であるうつ状態と不安・不眠を精神的健康状態と考え、意欲、肯定的感情や有用感などを喚起する生きがい感や役割が他の主要な関連要因との相互関連のなかで精神的健康状態にどの程度に関連を示すかを調査研究すること。	特になし
安瓊伊 (2014)	介護福祉士の専門性の構成要素の抽出：介護福祉士養成施設の介護教員の自由記述の内容分析に基づいて [老年社会科学] 35(4), 419-428	介護福祉士養成施設の介護教員の自由記述調査をとおして介護福祉士の専門性の構成要素を抽出すること。	特になし
瀬沼克彰 (2014)	高齢者の生きがい就労の動向と今後の期待 [エルダー=Monthly elder：高齢者雇用の総合誌] 36(8), 26-31	高齢者の生きがい就労についてこれから成熟が期待されるので、まとめておくこと。	特になし

生きがいの測定の仕方	研究参加者・研究対象 [調査方法・研究デザイン]	研究成果・要約
なし	滋賀県長浜市の調査実施年の3月現在の年齢が60歳以上となる地域高齢者から無作為抽出された計3,000名を対象とした。有効回答数は、主要な項目に欠損のない1,034人(男性590人,女性444人)とした。分析対象者の平均年齢は73.28歳±6.2歳であった。調査時期は、2011年2月から3月であった。 [横断調査研究] (関連要因)	高齢者の「社会参加」「認知的ソーシャル・キャピタル」と「generativity」の関連を構造方程式モデリングによって検証した結果、高齢者が社会参加活動に至るためには、地域への愛着や人の助け合いの有無等に加え、高齢者自身の「generativity」を経由しているモデルの適合度が高いことが明らかとなった。さらに、男性と後期高齢者においては、高齢者の「社会参加」の約5割を本モデルにより説明することができた。 本研究により「generativity」に着目したアプローチをすることにより、個人の社会参加活動を促進できる可能性が示された。さらに、「認知的ソーシャル・キャピタル」等の環境要因を醸成することにより、高齢者の「generativity」を高め、個人の社会参加活動を促進する可能性が示唆された。
近藤・鎌田(2003)が作成した「高齢者向け生きがい感スケール(K-I式)」	山口県E市の在宅高齢者735人(男性322人,女性413人)を分析対象とし、分析対象者の平均年齢と標準偏差は男性で74.3±6.6歳,女性で75.1±7.4歳であった。2009年12月の1か月間に調査した。 [横断調査研究] (関連要因)	①男性では生きがい感、役割および身体的健康状態が相互に有意な関連(相関)をもちながら、精神的健康状態に対して有意な負の影響(パス係数)を示した。②女性では社会関係、生きがい感および身体的健康状態が相互に有意な関連(相関)をもちながら、精神的健康状態に対して有意な負の影響(パス係数)を示した。③男女ともに、生きがい感が精神的健康状態を強く規定していた。したがって、在宅高齢者の精神的健康状態を改善させるためには生きがい感を高める施策や環境を整えることがきわめて重要である。
なし	全国の4年制介護福祉士養成施設と関東地域の2年制介護福祉士養成施設の介護教員276人を対象とし65人の回答があった(回収率23.6%)。調査期間は、2010年8～9月。 [質的研究]	“生きがい支援”が介護福祉士の専門性の構成要素のひとつとして示された。“生きがい支援”のカテゴリーには、「1人ひとりが「自分らしく生きる」ことができるようサポートする」「役割と生きがいを持ち、自分らしい生活が継続できるように支援する」という記述が含まれていて、要介護者の生活を支援するなかで食事、排泄、移動、睡眠への直接的な生活援助をとおして、要介護状態になっても役割や生きがいをもってその人が築いてきたその人らしく生きるように支援することが示された。
なし	文献・資料 [論考]	厚生労働省では、すでに高齢者の「生きがい就労」という言葉を使っている。筆者の考えでは、それは有償ボランティアと起業の間に位置づけるとよいと思う。「生きがい就労」は、全国的にまだ始まったばかりでノウハウが確立していない。よくいえば発展途上で、多くの可能性を秘めて現実と闘っている姿が見てとれる。「生きがい就労」という新しい働き方を希望する退職者は、これから団塊世代を中心に本格的に増えていく。個人としては勝負できるスキルを磨いていく必要がある。また、仕事を提供する行政・NPOは、短時間の仕事など受入れ条件を整えることに力を入れてほしいと願っている。